ストライク・ザ・ブラッド

蒼き魔女の迷宮

4

序章 Intro

目にしているのは真夏の海だ。

人工島〝魔族特区〟紘神市。太平洋のド真ん中に造られたこの都市に、夏の終わりが訪れることはない。群青色の空には鮮やかに白い積乱雲が漂い、鏡のように凪いだ海面を明け方の太陽が眩く照らす。

彼女は無言で、窓越しに広がる景色を眺めている。

十代半ばの日本人の少女だ。すらりとした長身に、ポニーテールの長い髪。肌は白く、髪の色素も薄い。華やかさと優美さを兼ね備えた綺麗な娘である。しかし彼女が浮かべていたのは、どことなく物憂げな表情だ。むっつりと引き結んだ唇から、時折、疲れたような溜息が洩れる。

視界の片隅を、離陸する飛行機が通り過ぎていく。

彼女たちがいるのは空港内の貴賓室。

政府の要人や国賓クラスだけが使用を許された、いわゆるＶＩＰルームである。床には毛足の長い絨毯が敷き詰められ、木目の美しい壁には巨大なテレビモニタが埋めこまれている。

それを見上げて談笑しているのは、異国からきた客人たちだ。

一人は金髪碧眼の美しい男。その名をアルデアル公ディミトリエ・ヴァトラーという。

外見こそ二十代の半ばにしか見えないが、彼の正体は欧州〝戦王領域〟の貴族だった。すなわち第一真祖〝忘却の戦王〟直系の、純血の吸血鬼ということだ。

そんな青年貴族と向かい合うようにして、若い女が座っている。
雪原を思わせる銀髪と、氷河の輝きにも似た水色の瞳。美の女神の再来とも讃えられる美貌の少女。北欧アルディギア王家の第一王女、ラ・フォリア・リハヴァイン――
「この場面、戦闘時にもかかわらず敵前で完全に無防備になっていますね。装備の換装による戦術面での優位性は評価しますが、運用にあたっては問題になりましょう」
テレビに映る映像を眺めて、ラ・フォリア王女が涼やかに告げる。
彼女は、長い歴史と優れた魔導技術で知られた国家の王族。しかも精霊召喚術を使いこなす高位の巫女でもある。吸血鬼の貴族と間近で対面しながら、怯えた様子は微塵もない。
一方のヴァトラーも、いつになく真剣な表情で画面を見つめている。
「それはどうかな。この場合の変身は、単純な装備の換装ではなく、物質変換の一種と見なすべきなんじゃないかな。それならば完全に実体化しなくても、防御力は維持できる」
「彼女たちの衣服は消滅しているわけではなく、原子配列の変換過程で電離状態になっている、ということですか」
王女が興味を惹かれたように頷いた。彼女が見つめる画面の中では、巨大な怪物と対峙した少女たちが、戦闘形態へと姿を変えているところだ。
「そのぶん呪力の消費量が跳ね上がることになるけどね」
ヴァトラーが皮肉っぽい声を出す。いいえ、と微笑みながら王女は首を振った。

「属性を固定することで、呪力の消費を抑えることは可能です。ただ、要求される物質変換の精度を考えると、術者単独での変身状態の維持は困難でしょうが」

「ああ、それで補助演算を行う道具が必要になるわけか――」

真顔で交わされる二人のやりとりを聞きながら、煌坂紗矢華は顔をしかめている。どうして自分が、こんなところにいなければならないのか、と自問しているような苦悩の表情だ。

紗矢華は攻魔師。獅子王機関の舞威媛と呼ばれる、呪詛と暗殺の専門家である。

そして専門家であるがゆえに、紗矢華たちは、呪詛や暗殺の標的になりやすい要人の警護を任されることが多かった。暗殺者をもって暗殺者を制す、という理屈なのだろう。

そんな紗矢華の現在の任務は、ラ・フォリア・リハヴァインの護衛である。

世界的に名前を知られた美貌の王女。非公式での来日中とはいえ、彼女が日本政府にとって極めて重要な人物であることは間違いない。

〝旧き世代〟の吸血鬼ともなれましてや同席しているのがディミトリエ・ヴァトラーのような〝旧き世代〟の吸血鬼ともなれば、警備担当者の責任は重大だ。

る最高位の武神具、六式重装降魔弓の使い手たる紗矢華が派遣されてきたのは、むしろ当然の判断だといえる。

にもかかわらず、紗矢華の表情は冴えない。どうしてラ・フォリアとヴァトラーが、真剣な表情で視聴しているのは、アニメ専門チャンネルの子

ども向け変身ヒロイン番組だ。ふりふりミニスカートの衣装で悪者と戦うら、二人は大真面目にその戦術的価値について論議していたのである。実とだが、そんなふうに彼らを監視している自分が、なんだかひどく間抜けなことえて、紗矢華は鬱々とした気分になる。

ちなみに貴賓室の片隅に控えている王女の護衛の騎士団や、ヴァトラーたちも、全員が喰い入るような表情でテレビ画面を見つめていた。

中には、拳を握りしめてヒロインたちを応援している連中や、感動のあまり涙を流している連中だけに平和的で結構なこ者もいる。普段は無縁の無骨そうな連中だ。そのことも紗矢華の苦悩の一因である。

そうで少々不安だが、妙な影響を受けて

「ところで、王女。最近、奇妙な噂を耳にしたんだが」

エンディングテーマが終わるのを待って、ヴァトラーが唐突に話題を変な何気ない口調だが、その瞬間、貴賓室の空気が緊張で軋む。

「なんでもアルディギアの騎士の一部隊が、極秘裏に絃神島に派遣されてきたのだとか」

「それほど奇妙な噂でしょうか？」

あら、と王女は、にこやかな表情のまま首を傾げてみせた。

「この島にはわたくしの叔母がおります。王位継承権を失ったとはいえ、王族。最低限の世話役は必要でしょう」

アルディギアの彼女もれっきとした

「こんな辺境の島まで来て、中学生のお守りか。聖環騎士団の精鋭部隊も挑発的な青年貴族の言葉にも、ラ・フォリアは笑顔を崩さない。王女の護衛の騎士たちは、二人の会話を固唾を呑んで見守っている。平和な世間話に見えて、実際のところヴァトラーと王女が繰り広げている戦略に裏打ちされた駆け引きだ。

アはそれを口実にして、非公式にアルディギアの騎士団を絃神市に派遣し、王族の護衛を、王国の騎士たちが行う。特に不自然なことではない。

しかし夏音と同じ学校に世界最強の吸血鬼が通っている、となると話は叶瀬夏音の護衛を名目に、アルディギア王家は労せずして〝第四真祖〟たというわけだ。同じ目的で絃神市に滞在しているヴァトラーとしては、面白かる態勢を整えたい。だからこそ、余計な真似をするなと、こうしてやんわり警告しているのだろうはずがない。それでも王女は、平然とヴァトラーを見据えたまま目を細める。

「それを仰るなら戦王領域からも、やけに物騒な方々が次々に訪島してルティズラワ伯やジャガン卿。名だたる夜の帝国の武闘派ですね」

「連中はただの観光客だよ。もうすぐ絃神島で大きな祭りがあるからサ」

「手間のかかる叔母でして」

「大変だねェ」

ヴァトラーが何喰わぬ表情で答える。王女が
「祭り？」
目を輝かせ始めるラ・フォリアを見て、まず
護衛の騎士団長も渋い表情を浮かべている。
「ま、間もなくお時間です、王女。ご搭乗のお
ヴァトラーたちと紗矢華が唇を噛むか
紗矢華の慌てぶりを見て、王女はますます愉快
日本政府が用意した特別機で、ラ・フォリア
ていた。彼女を送り出してしまえば、紗矢華の
報を吹きこまれたらたまらない。
聡明にして博識、予定を変更されたらたまら
それは裏を返せば、好奇心旺盛で並外れた行動
そんな彼女が〝祭り〟の存在を知ったら、帰
出しかねない。それだけはなんとしても避けた
「それでは、王女、よい旅を。キミのお父上に
幸いなことにヴァトラーも、ラ・フォリアを
王女の見送りという名目でこの場にいるものの、彼の本来の目的は、アルディギア側の牽制だ。

ラ・フォリアがこのまま大人しく帰国してくれるのなら、それに越したことはないという思惑なのだろう。

渋る王女を急き立てるようにして、紗矢華は彼女を貴賓室から連れ出した。空港の駐機スポットには、離陸準備を終えたチャーター機が待機しているのが見える。あとは、どうにかしてその中に王女を連れこむだけだ。

「お祭りとはなんですか、紗矢華？」

優雅な足取りで専用通路を歩きながら、ラ・フォリアがしつこく訊いてくる。

「波朧院フェスタのことですね。毎年、この時期に絃神市で開催されている祭典です。島内で様々なイベントといっても、仮装行列や屋台のような庶民の娯楽ですけど！」

「まあ」

紗矢華の説明を聞いたラ・フォリアが、子どもようにきらきらと瞳を輝かせた。ぎくり、と騎士団長の表情が引き攣る。

「な、なりませんぞ、姫様！　先日もお命を狙われたばかりではないです。これ以上、帰国を遅らせるようなちにしておられるのです。国王陛下も姫様の帰国を心待たちの展示発表や模擬店もあるのですね」

「あら。学生王女は部下の忠言を無視して、どこからか取り出したスマートフォンでイベント公式サイト

のチェックを始めていた。騎士団長が頭を抱えて天を仰ぐ。
「姫様あああああ！」
「王女。あの、日本の首相が特別に手配した飛行機ですし、その……」
「言われずとも、わかっています。わたくしとて、興味本位のお祭り見物のために貴方の国に迷惑をかけるつもりはありません」
小さく唇を尖らせて、ラ・フォリアは不満そうに溜息をついた。紗矢華に手を引かれながら、彼女たちは搭乗口に通じているゲートをくぐる。その瞬間、二人を襲ったのは一瞬の軽い目眩だった。陽炎のように景色が揺らぎ、そして眩い太陽の下に出る。
「――ですが、飛行機に辿り着けないのではどうしようもありませんね」
王女の声が、明らかに状況を愉しんでいるような、悪戯っぽい響きに変わる。
「辿り着けない……って……え!?」
紗矢華が愕然とした表情で周囲を見回した。彼女たちはついさっきまで間違いなく、空港の中にいたはずだ。しかし目の前に広がっているのは広大な海と、そこに浮かぶ建設途中の浮体式構造物だった。
あちこちに生々しい破壊痕が残るその景色を紗矢華はよく知っていた。
絃神島十三号増設人工島――
かつて紗矢華が、暁古城とともに、テロリストたちと死闘を繰り広げた場所である。見間

違うはずもない。

しかしここは紘神島の中央空港とは、ほとんど島の反対側。直線距離でも十キロ近く離れている。どう考えても一瞬で移動できるような距離ではなかった。

なのに現実に紗矢華と王女は、そんな増設人工島の先端に、二人きりで放り出されている。

同行していたはずの騎上たちの姿はなく、搭乗予定だった飛行機や空港の建物は影も形も見あたらない。空港内のゲートをくぐった瞬間、紗矢華たちは、この場所に飛ばされてしまったらしい。まるで空間の裂け目に踏み込んでしまったかのように。

もちろん、単なる自然現象ではないだろう。何者かによる魔術攻撃の可能性が高い。だが攻撃の気配は感じなかった。これだけの規模の魔術の前兆を、紗矢華や能者が気づかないはずがないにもかかわらず、だ。

「さすがは〝魔族特区〟ですね。これでしばらくは退屈せずに済みそうです」

無邪気な微笑を浮かべて、ラ・フォリアが言う。愛用の呪式銃を構えて周囲を警戒しているところを見ると、今回の異変を王女本人が仕組んだというわけではなさそうだ。とはいえ、彼女がこの状況を面白がっているのは間違いない。

紗矢華は、猛烈な不安を覚えながら空を見上げる。

嵐の到来を予感させる、澄みきった真夏の青空を。

十月最後の一週間——
絃神島〝魔族特区〟で繰り広げられる狂騒の祭典の幕開けに、人々はまだ気づいていない。

第1章 嵐の前
Calm Before The Storm

1

空気が、蒸し暑く澱んでいた。

絃神市内を循環する市営モノレールの車内である。窓の外には太平洋の海面が広がり、朝の太陽から遮るものはなにもない。真夏のような強い陽射しが、沿いの高架を走る車両を、朝の太陽から遮るものはなにもない。真夏のような強い陽射しが、車内に詰めこまれた乗客たちを容赦なく炙り続けている。

「ああくそ……暑っちーな……」

アルミ製のドアに顔を押しつけられるような姿勢で、弱々しくうめいたのは暁古城だった。

高校の制服の上にパーカーを羽織った、気怠げな表情の少年だ。

世界最強の吸血鬼、などという馬鹿げた肩書きを持つ彼だが、そんなごく大層な〝第四真祖〟の能力も、この状況ではまるで役に立たない。満員の車内で身動きすることとすらままならず、窓越しに降り注ぐ眩い陽光に、苦悶の声を洩らすだけだ。

「ひうっ……!?」

モノレールが緩やかなカーブに差しかかり、遠心力で乗客たちがずりずりと移動する。彼の無言の圧力に押されて、古城の隣にいた少女がくぐもった悲鳴を洩らす。

獅子王機関の剣巫、姫柊雪菜である。

飾り気のない黒髪と、黒目がちの大きな瞳。まだ少し幼さを残してはいるが、綺麗な顔立ちの娘だった。細身で華奢だが、儚げな印象はない。名匠の手による刀剣のような、均整のとれた機能美と強靭さを感じさせる少女だ。

表向きは古城の後輩として彩海学園の中等部に通う雪菜だが、彼女の本来の任務は第四真祖の監視役だ。場合によっては、雪菜独自の判断で古城の抹殺すら許可されているという。

その証拠に、彼女が常に携行しているベースギター用のギグケースには、最先端の魔導技術で造られた武器が収納されていた。あらゆる魔力を無効化し、吸血鬼の真祖すら滅ぼし得るという、対魔族用の破魔の槍〝七式突撃降魔機槍〟である。

しかしその最強の武神具も、ラッシュアワーのモノレール内では傍迷惑な荷物でしかない。かくして獅子王機関が誇る秘奥兵器は、ほかの乗客の邪魔にならないように網棚の上に放り出され、雪菜自身は、監視対象であるはずの古城とかつてないほどの密着状態にあった。

車両のドアと座席の背もたれ、そしてスシ詰めの乗客たちに四方を囲まれ、二人の全身はギチギチに押しつけられている。

「わ、悪い。大丈夫か、姫柊……？」

心地好い雪菜の髪の匂いに、危険な喉の渇きを覚えつつ、古城が低い声で囁いた。

雪菜が潰されないように支えていたはずの古城の腕は、乗客たちの圧力に耐えきれず、いつの間にか彼女の背中を抱き寄せるような形になってしまっている。傍目にはうらやましい体勢

かもしれないが、実際のところ古城の右手はとっくに痺れてなにも感じなくなっていた。

「はい……でも、あの」

「すまん。わざとやってるわけじゃないからな……！」

「わかってます！　不可抗力ですから！」

雪菜が赤面しているのは、わたしも同じですから。ふたりの密着状態では、彼女が鞄を握っている左腕が、古城の股間に引き抜こうとしているのだが、それもままならないらしい。モノレールの振動に合わせて古城に伝わってくる微妙な刺激が、けっこうつらい。

「今日はいつもより一段と混んでますね」

気を紛らわせようとしているのか、雪菜が何気ない口調を装って呟いた。

たしかに朝のこの時間帯、登校中の学生や通勤客でモノレールが混雑するのはいつものことだ。しかし、ここまでの混雑は滅多にない。乗車率は通常の倍近いのではないだろうか。

「島外からの観光客が来てるんだろ。もうすぐ祭りだからな」

「波朧院フェスタ……ですか。中等部でも、最近よく話題になってますけど」

「そうか。姫柊は見たことないんだよな」

古城の言葉に、雪菜がうなずく。

獅子王機関の特命を受けて、彼女が、古城の監視を始めたのは夏休みが終わる直前のこと。

彼女が絃神島に来てから、まだ二カ月も経っていない。そんなわずかな期間に、彼女ともども何度も死にそうな目に遭っているという事実に、古城は今さらながら自分の不幸を実感する。

「イベントの存在は知ってましたけど、こんな大規模なお祭りだとは思ってませんでした」

「派手だよな。島内の企業も軒並み休みになるし。この時期は絃神島への訪問許可が下りやすいから、観光客も押し寄せてくるしな」

そう言って古城は、車内の中吊り広告を見上げた。

波朧院フェスタとは、毎年十月の最終週に開催される絃神市最大の祭典だ。花火大会や野外コンサート、そして仮装パレードなどの様々な企画が催され、全島あげての大騒ぎとなる。この時期に絃神島を訪れる観光客は延べ十二万人を超えるが、日本本土から遠く離れた島の立地条件を考えると、驚異的な数字だといえるだろう。

もっともその数字には理由がある。〝魔族特区〟である絃神市は、通常、企業や研究機関の関係者及びその家族以外の訪問を認めていない。一般の観光客やジャーナリストはもちろん、〝魔族特区〟との取り引きを望む人々にとっても、祭りの期間は、堂々と市内に入れる千載一遇のチャンスなのである。

ともあれ絃神市内の広告媒体は、数日前から波朧院フェスタ一色だ。テレビ特番も組まれているし、便乗商品などのCMも堂々と流れまくっている。全島的にお祭り気分が盛り上がっているのは間違いなかった。

「ハロウィンがモデルになってるんですね」
お化けカボチャのイラストが描かれたポスターを眺めて、雪菜が言う。
「そういやそうだな。なんでハロウィンなのかは知らんけど」
古城は他人事のような表情で、ささやかな疑問を口にした。
人工島である紘神島には、もともと伝統的な民族行事は存在しない。しかし住民の娯楽や経済活動の刺激に、祭りという非日常的なイベントは有効だ。そこで行政サービスの一環として、ハロウィンを参考に人工島管理公社が制定した祭典が波朧院フェスタである。
逆に言えば、祭りのモデルがハロウィンでなければならないはずだ。バレンタインでもひな祭りでも七夕でも、口実があればなんでもよかったのではないかと古城は思う。
しかし雪菜は、意外にも真面目な口調で答えてきた。
「ハロウィンはもともと魔除けの儀式ですから。〝魔族特区〟にお似合いの行事だと思います」
「へぇ……そういうものなのか？」
「はい。古代ケルトの信仰では新しい冬の季節が訪れるこの時期、こちら側の世界と霊界との通路が開いて、精霊や魔女たちが押し寄せてくると信じられていたんです。それらの魔物から身を守るために仮面を身につけ、篝火を焚いたのがハロウィンの始まりだとか」
ふむ、と古城は素直に彼女の説明を聞いた。古城が第四真祖などという非常識な体質になったのはわずか半年前のこと。それまでありふれた高校生としての日常を過ごしていた古城に、

上着信仰や魔術などのオカルト的知識はほぼ皆無だ。獅子王機関で攻魔師（こうましし）としての英才教育を受けてきた雪菜と張り合うつもりは、さらさらない。

「ハロウィンの仮装やお化けカボチャは、その名残（なごり）か」

「はい。それにハロウィンの伝承自体、まったく根拠がないわけではないんです。この時期に、時空連続体が不安定になりやすいのは事実ですから。異なる時間軸からの〝来訪者（ヴィジター）〟や、異界からの〝招（アンヴィティド）かれざる魔物〟と遭遇した事例も報告されてますし」

「……勘弁してくれ。そんな連中、相手にしたくねーぞ」

古城は本気で嫌そうな顔をする。なにしろここは〝魔族特区〟だ。そんなものと遭遇することはあり得ない、などとは口が裂けても言えない。それころ古代兵器だの模造天使（エンジェル・フォウ）だのという激レアな連中と立て続けに遭遇して、心底うんざりしているのだ。

なのに雪菜は、そんな古城をじっと見つめて真顔で訴えてくる。

「はい、ですから気をつけてください、先輩」

「え？」古城は困惑して雪菜を見返した。「いや……気をつけろと言われても、異世界からの侵人者って、俺の心がけでどうにかなるものなのか？」

とというよりも、古城が好きで面倒事を引き寄せていると雪菜に思われてそうな現実が地味にショックだ。古城ほど平穏な日常を愛している学生はいないというのに。しかし、

「えっ？」雪菜がむしろ驚いたように目を瞬く。「だって、この島でいちばん不安定で危険な魔力源は先輩ですよね。うっかり眷獣を暴走させたりして、ただでさえ不安定になってる空間を歪めないでくださいね。特に吸血衝動にはくれぐれも――」

雪菜がそう言い終わる前に、駅に近づいたモノレールが減速を始めた。慣性の法則に従って乗客たちが前につんのめり、バランスを崩した古城の左手が雪菜の胸を揉みしだく。

「先輩……！」

「ま、待て！　今のも不可抗力だっただろ！」

「いえ、そうではなくて、彼女――！」

雪菜が鋭い視線を向けていた相手は、古城ではなく、少し離れた場所にいる通学中の女子生徒だった。彩海学園の制服を着ているが、雪菜と比べてもさらに小柄だ。艶やかな長い黒髪と、白い肌が異様に目立つ。

「高等部の生徒か？　なんか危なっかしい感じだな」

人混みの中に埋もれている少女を見て、古城が眉間にしわを寄せた。彼女が立っているのは、逃げ場がない上に目立たない混み合った通路。気弱そうにうつむく彼女の背後に、どことなく挙動の不審な中年男性が密着している。

「はい。彼女の後ろに立っている男性、もしかして――」

「痴漢か！　野郎――！」

「えっ!?」

雪菜が虚を衝かれるほどの勢いで、古城に向かって突進を始めた。特というわけでもない古城だが、それでも問妹を持つ古城にとって、痴漢は許せない犯ざけた真似をする相手など、とっ捕まえて「先輩、待ってください！　先輩！　もっ乗客たちをかきわけながら進む古城を、でに小柄な女子生徒の傍まで辿り着き、彼もうと手を伸ばし――停車したモノレールのドアが開いたのは、その直後の限界近くまで詰めこまれていた乗客たちがホームへと一気にあふれ出し、巻きこまれる。目一杯伸ばしていた指先が、小柄な少女の臀部に触れる。

その瞬間、横から伸びてきた別の腕が、古城の手首をガッチリと握った。

「え？」

「――はい、痴漢一名様。現行犯で確保してみたりして」

困惑する古城の耳元で、妙にテンションの高い声がした。声の主は、赤い編みにした若い女だ。チャイナドレス風のシャツにミニスカート、スパッツティな装いで、姿勢がいい。どことなく見覚えのある顔立ちだ。

「お……おい、離せ！　俺は痴漢じゃなくて——！」

駅のホームに連れ出された古城が必死に抵抗するが、赤髪女は、がっちり古城の手首を握ったまま離さない。人間離れした彼女の握力に、古城の骨がギシギシと軋む。

そして彼女は古城の顔をまじまじと見つめ、おやまあ、と怪訝な顔をした。

「その制服、もしかしてうちの学校の生徒だったりする？　ていうか、暁ちゃんのお兄さん？」

「……え!?」

「笹崎先生！」

ようやく古城に追いついた雪菜が、驚いたように立ち止まって叫んだ。赤髪女が誰なのか思い出す。

うに眉を上げる。それを見て古城は、彼女が彩海学園中等部の体育教師、笹崎岬。凪沙や雪菜のクラス担任だ。

「姫柊ちゃんも一緒だったり？　自分の彼氏の面倒はちゃんと見てなくちゃダメじゃない？」

「ち、違いますし。その人は、わ、わたしのとかじゃないですし、痴漢でもありません」

「そうなの？」

雪菜の擁護を受け入れて、岬が古城の手を離す。危うく痴漢冤罪を免れた古城は、深々と息を吐きながら額の汗を拭った。

「本当の痴漢はこちらだ、馬鹿犬」

そんな古城たちの背後から、舌足らずでありながら、妙に威厳のある声が聞こえてくる。つ

いでに男の情けない悲鳴もだ。思わず振り返った古城たちが見たのは、全身を鎖でガチガチに縛られて、恐怖に怯える中年男性の姿だった。それを引っ立てているのは、つい今さっきまで痴漢被害に遭っていたはずの、長い黒髪の女子生徒だ。そして彼女の正体を、古城たちはよく知っていた。

「え？」

「……南宮先生？」

古城と雪菜が口々に困惑の声を洩らす。

制服を着てそこに立っていたのは、南宮那月だった。しかし顔の輪郭も体つきもとにかく幼く、少女、あるいは幼女という表現が似合う。

称二十六歳。しかし、那月ちゃんか？　なんだその恰好？」

「もしかして、那月ちゃんか？　なんだその恰好？」

「巡回だ。最近、この車両で痴漢に遭う生徒が多くてな」

「……どうして高等部の制服を？」

「生徒を痴漢捜査の囮にするわけにはいかんからな。無理を承知で変装していたんだ」

なるほど、と古城は納得する。幼い見た目に反して、那月は凄腕の攻魔師だ。教師業の傍ら、特区警備隊（アイランド・ガード）の指導教官を務めているという異名を持ち、多くの魔族が彼女を恐れているという。痴漢ごときの取り締まりに投入するには、もったいない人材だろう。それに、ここまで制服が似合う女教師もそうそう見つかるまい。

「無理どころか、全然違和感がないな……。むしろ中等部の制服のほうが似合ってたかも」

「ほらほら、那月先輩。私の言ったとおりだったりしたじゃないですか」

岬が得意げに胸を張る。彼女の身長は百六十センチ台の半ばほどだが、完全に保護者と娘の構図である。それに中等部のときの制服は残ってなかったんだから仕方ないだろう」

「残ってなかった……って、その制服、那月ちゃんの自前なのか？」

古城は思わず那月の制服を観察する。言われてみれば、小学生並の彼女の身長にも、あつらえたようにサイズがぴったりだ。その制服が彼女の私物だとすれば、那月は彩海学園の卒業生だったということになる。その情報は初耳だ。

「担任教師をちゃん付けで呼ぶな」那月が鬱陶しげに唇を歪めた。「だいたいどうしてそこの馬鹿犬が先生呼ばわりで、私だけ那月ちゃんなんだ」

「威厳と風格の差だったりして」

「撫でるな！」

幼い子どもをあやすように、那月の頭を撫でさする岬。那月がそんな同僚教師を睨みつける。天上天下唯我独尊を地でいく那月だが、学生時代からの知り合いである笹崎岬のことだけは、なぜか苦手にしているらしい。そういう相性なのだろう。

「まあ、そういうことなら、俺たちはもう行っていいですかね。時間、そろそろヤバいんで」

じゃれ合う教師たちを眺めながら、古城が
「いいんじゃない。本物の痴漢も捕まえたりし
鎖に縛られたわけだし」
軽く会釈して中年男性を一瞥して、岬がふ
そんな古城、改札のほうへと歩き出した。
「暁古城」を那月が不意に呼び止める。
「はい？」
無警戒に振り返った古城が見たのは、不思
めないのはいつものことだが、普段とは少し
懐かしさと切なさが混じった笑顔だ。
「もうすぐ波朧院フェスタだな」
「ああ。そうですね」
古城は戸惑いながらも適当に相づちを打つ
月は鼻を鳴らし、いつもの彼女
ふん、と那
「週明けから普通に授業を再開するからな
傲岸な口調でそう言った。

波朧院フェスタが開催されるのは十月最後の週末で、彩海学園はその前日から休校になる。吹奏楽コンクールや展覧会など部活がらみのイベントに参加する者、町内会主催の屋台などに労働力として駆り出される者、バイトに精を出す者、あるいは単に客として祭りを満喫するそれなりに慌ただしい時期なのだ。

問題を起こす生徒が出ないようにと、学校側からの注意事項も多い。

そこで休日直前の今日は、ホームルームの時間を延長し、各クラスの担任教師が、みっちり念入りに注意事項を伝達することになっていた。

とはいえ、それすらも毎年の恒例行事だ。ましてや高校生ともなれば、そんな長ったらしい説明を真面目に聞いている生徒などほとんどいない。ところが、その常識を覆すような異常事態が、暁占城のクラスでは起こっていた。

教壇の上に立っているのは、ほっそりとした少女だった。

藍色の髪に青い瞳。完全に左右対称の人工的な美貌。人の手によって工業的に生み出された、人工生命体の娘である。

もちろんここは〝魔族特区〟であり、人工生命体程度で驚くような生徒はいない。しかし、その人工生命体が、露出度高めのエプロンドレスに身を包み、クラス担任の代理として諸注意を読み上げている状況は、さすがに異常だ。

「メイド……あれ、この専属メイドだよな？」

「なんでメイドが先生やってんの？」

「アスタルテちゃんが、女子の制服を着て駅をうろついてたって噂があるんだが」

「それよりも那月ちゃんだっけか……叮愛いな、あの子」

「それも」

「……ありだな、猛然とヒソヒソ話を続けながらも、アスタルテはいまだ事情が呑みこめていない生徒たちの注意事項を伝えるという彼女の任務は、見事に達成されたことになる。

「……なんだったの、あれ」

自らの役目を淡々と果たし終えて、人工生命体の少女は教師控え室へと戻っていく。彼女の背中を見送りながら、古城に訊いてきたのは藍羽浅葱だった。制服をセンスよく着崩した、華やかな髪型の女子生徒だ。

「本人が言ってたろ。那月ちゃんが見回りに出かけたから、代理を頼まれたんだって」

「ふうん。やっぱ祭り前だから、攻魔官の仕事が忙しいのかしらね」

浅葱がいちおう納得したようにそう呟く。古城は少し迷ったが、那月姿で街をうろついているところを見られるのが恐ろしい。

あとで報復されるのは勘弁してほしいし、なんにしても本日の授業はこのまま午前中で終了だった。あとは荷物をまとめて帰るだけだ。

モノレールはそろそろ空いてきただろうか、などと考えながら古城がなにか物言いたげにこちらを見ている浅葱と目が合った。

どうした、と古城は軽い気持ちで首を傾げ、浅葱が意を決したようにその直後、わらわらと集まってきたクラスの男子生徒たちが、いきなり古城を取り囲む。

「なあ、暁。おまえさ、波朧院フェスタのイベントになにか出る予定はあるのか？」

「いや。なにも決めてないけど？」

怪訝な表情を浮かべつつ、クラスメイトの質問に答える古城。それをギラリと瞳を輝かせる。その雰囲気はさながら、獲物を見かけた肉食獣の群れだ。

「そうか。だったらバイトしないか？　うちの町内会でオープンカフェをやる予定なんだけど、店員の頭数が足りなくてさ。もちろんバイト代はちゃんと払うぜ。時給一千五十円でどうだ？」

「待て、古城！　今なら特典で利益の一割……いや、二割をバイト代としてくれてやる！」

「待て待て、古城！　波朧院フェスタといえば伝統のビーチバレー大会のことを忘れてないか。

俺たちと一緒に砂浜で爽やかな青春の汗を流そうじゃないか！」

「待て待て待て待て！　祭りの華といえばやはりミスコン。貴様には特別に目を眇めた。近くにいたなんなの、あれ？」

「お……おお？」

クラスメイトたちの強引な勧誘に、警戒の表情を浮かべる占城。そんな彼親友を呼び止めて、低い声で訊く。

浅葱は不機嫌そうに目を眇めた。近くにいたなんなの、あれ？」

「ねえ、お倫……テだね、暁くん」

「ふふっ。モテモテだね、暁くん」

築島倫が悪戯っぽく目を細めて笑った。かタイル抜群のすらりとした引き攣らせる。スタイル抜群のすらりとしたティに分類されるが、意外に世話焼きで倫だが、意外に世話焼きで由も、すっかりお見通しというこらしい。

「まあ、古城っつうか、姫柊ちゃんが目当てなんだろうけどな」

矢瀬基樹が、いつもの軽薄そうな口調で横から話に割りこんでくる。古城代からの占い友人なのだ。

浅葱とも小学生時代からの悪友である彼は、

「姫柊って、中等部の転校生？」

矢瀬の口から出たその少女の名前に、浅葱の機嫌がさらに悪化する。

そんな浅葱の変化に気づかずに、矢瀬は訳知り顔でうなずいた。
「あの子がどういうわけか占城につきまとってるのは有名だからな。占城は姫柊ちゃんも参加するってことだろ。それは大きいよな。客寄せにしても」
「馬鹿じゃないの、どいつもこいつも」
浅葱は淡々と思ったことを口にする。要は姫柊雪菜を呼び寄せるためのエサとして、占城を誘っているということか。実際、雪菜は人目を惹く美少女だし、彼女がイベントに参加するということになれば、それだけでかなりの集客が見込めるのは事実だが。
「いいの、浅葱？」
ふて腐れたように頬杖をつく浅葱を、ますます愉快そうに眺めて倫が訊いてくる。浅葱は、苛々と彼女を見返して、
「なにがさ？」
「波朧院フェスタ。暁くんと一緒に回りたいんじゃない？」
「う……」
いきなり核心を突かれたせいで、浅葱は思わず固まった。
この手の祭りの例に漏れず、波朧院フェスタはカップルにとっても重要な行事だ。肝試しや花火大会などの定番イベントも揃っているし、縁結びのまじないや占いなど、〝魔族特区〟ならではの企画も多い。そのぶん気軽に誘いづらいというジレンマもあって、浅葱にしてはめず

らしく古城に声をかけるのをためらっていたのだ。

その間にも、クラスの男どもによる古城の勧誘は続いていたのだが――

「あー……いや、誘ってもらえるのは有り難いけど、やめとくわ」

意外にも古城がきっぱりと断って、教室内がわずかにざわめく。

「なに!?　いったいなにが不満なんだ!?　コーヒーも飲み放題だというのに!」

「二割五分……いや、二割でどうだこの野郎!」

「わかってないぞ、暁!　おまえはまだビーチバレーの奥深さをわかってていないんだ!」

「審査員でもまだ不足というのなら、男性出場者枠のほうでどうだ!?」

血相を変えて古城に詰め寄るクラスメイトたち。しかし古城は気怠そうに頭をかき、

「いや、今年は一緒に回る約束をしてるやつがいるから、ちょっとそういうのは無理なんだ。悪イな」

古城の言葉を聞いた人々が、皆一斉に殺気立つ。

「一緒に回る約束をした……だと?　やはりあの中等部の転校生なのか!?」

「転校生?　あー、いや、姫柊は関係ないんだけど」

思いがけない古城の返答に、勧誘していた連中がはっきりと困惑の相を浮かべた。彼らの視線が、誰からともなく浅葱のほうへと向けられる。

「……転校生……じゃない?」

「じゃあ、もしかして藍羽か」
「藍羽だな……まあ、この際、藍羽で妥協するか」
「うむ、やむを得ん。藍羽もありといえばありだな。というわけで、やはり暁にはうちのイベントに参加してもらわなければ」
「……なんだろう、すっごいムカつくんだけど」
男たちのあからさまな内緒話に、浅葱がヒクと唇を痙攣させる。倫溜息を洩らすだけだ。
そのとき教室の入り口のほうから、誰かが大声で占城を呼んだ。
「暁ィー、あんたにお客だよ。中等部の女の子」
あまりにも絶妙なそのタイミングに、今度こそ教室が大きくどよめいた。
「なに!?」
「転校生か!? 藍羽と見せかけて、やはり転校生なのか!?」
「いや、待て！　あれは！」
「馬鹿な！　中等部の聖女……だと!?」
占城の名前を呼んだのは、同じクラスの棚原夕歩。そして彼女の背中に隠れるようにして、透きとおるような銀髪の少女が立っていた。
中等部の制服の下に、ハイネックの長袖アンダーシャツを着ており、そのせいでどことなく

教会のシスターを連想させる。ある意味、中等部三年の叶瀬夏音。その容貌と優しげ子にも彼女のファンは多い。一般には知られ女でもあった。近寄りがたいほどの神々しい自分たちが注目されていることにも気づか「叶瀬、学校に来てたのか」
「あ、はい。教室まで押しかけてすみません「いや、べつにそれはいいんだけど。身体は「はい。一昨日、退院でした」
まるで古くからの知り合い同士のように、徒たちが彼らの言動に注目していた。築島倫が声を潜めて、浅葱の耳元で訊いて「あれってどういう知り合いなの？」
「そんなもん、あたしが知るわけないでしょうが」
浅葱は、こめかみに血管を浮き上がらせながら答えた。少し前に古城たみのトラブルに巻きこまれていたことは知っどうしてそんな事件以上に目立つ美貌の持ち主な雰囲気から〝聖女〟の異名を持ち、高等部の男品を持つのも道理であろうルディギア王家の王ず、そんな夏音に古城は平然と声をかける。

ている。しかし古城の言い訳は要領を得ず、彼が結局わからないままだったのだ。そして浅葱に睨

まれていることにも気づかないまま、古城は、夏音の隣でへらへらと笑っている。
「わざわざ挨拶に来てくれたのか？」
「はい。それともうひとつ、お願いがありました」
「お願い？　俺に？」
古城が意外そうに訊き返す。夏音が恥じらうように少し目を伏せた。
「はい、あの……」
銀髪の少女が声を落として言い淀み、古城のクラスメイトたちは息を殺して彼女の言葉の続きを待つ。やがて夏音は勢いよく顔を上げ、緊張気味の声で古城に尋ねた。
「今日の夜、泊まりに行ってもいいですか？　お兄さんのお宅に」
その瞬間、凍りついたような静寂が教室の中に訪れた。ただ一人、浅葱だけが驚愕の表情で、「な!?」とうめき声を上げている。そして、
「ああ、べつに構わないけど」
平然とした態度で、夏音の要望を受け入れる古城。
「なっ、なっ!?」
浅葱は感電したように肩を震わせ、大きく目を見開いたまま固まっている。
それを隣で見ていた矢瀬が、やれやれ、と見かねたように首を振り、
「ちょっと待った！」

浅葱の手首を強引につかんで、そのまま一人一緒に手を高く挙げた。教室に再び、地鳴りのようなどよめきが起きる。さすがに古城たちも、その異様な気配に気づいて振り返った。

「あたしたちも一緒にお邪魔していいかな、暁くん」

そんな古城に向かって、倫がにっこりと笑って告げる。

「え？」

ぽかんとした表情で訊き返す古城。浅葱はなにが起きたのかわからないまま、戸惑う古城と微笑む倫たち、高らかに掲げられた自分の腕をきょろきょろと見比べ、そして叫ぶ。

「えええぇーっ!?」

波朧院フェスタ開催まであと二日。祭りの気配は、徐々に盛り上がりを見せ始めていた。

3

住宅街が多く集まるアイランド・サウス、と絃神島南地区。人工的に設計された緩やかな坂の上に建つマンションが、暁兄妹の自宅だった。

部屋番号は七〇四号室。間取りはごく一般的な3LDKだ。見晴らしのいい窓の外には鮮やかな夕焼けの空が広がり、眼下に広がる絃神市の街並みを夕陽が赤く染めている。

ガラス製のリビングテーブルには、大皿に盛りつけられた料理が所狭しと並んでいた。

その料理たちを見下ろして、ぽつんと所在なく立っているのは、制服姿の夏音である。緊張気味の表情を浮かべる彼女を脅かすように、

「夏音ちゃん、退院おめでとうー」

クラッカーを鳴らしながら叫んだのは暁凪沙。雪菜や夏音と同じ中等部の二年生で、古城の実の妹である。体つきや顔立ちは、同年代の女子よりも子どもっぽい印象を受けるが、全体的には出来のいい妹といえるだろう。顔立ちもそれなりに可愛らしく、成績般も器用にこなすし、喋り好きで口数が多いことだとで彼女が誰かを不快にさせたことはなかった。

テーブルの上の料理のほとんども、彼女が不思議とそのこせっせと調理したものである。唯一最大の欠点はやたら

「あ、あの」

全身あちこちに夏音が恐縮した表情で周囲を見回した。

そんな夏音を力づけるように、凪沙がひときわ明るい声を出す。

「なに言ってんのためにこんな」

「すみませんでし

「なんだから。はい、座って座って。食べて食べて。このサラダ、自信作なんだ。今日は夏音ちゃんが主役なんだから。クルミとピーナッツとゴマを使った自家製ドレッシングだよ。こっちが凪沙特製レッドホットチリビーンズ・グラコロッケ・デラックス。そしてもうすぐハイブリッドパスタも茹で上がるから」

ンドフィナーレ。

「あ、ありがとう」
凪沙の勢いに引きずられたのか、夏音もぎこちなく微笑んだ。そんな夏音の隣に厚かましく座っていた矢瀬がさっそく料理に箸を伸ばす。
「おー、美味いなこれ。さすがは凪沙ちゃんの妹にしとくのはもったいないわ」
「ほんとね。占城に運びながら、浅葱が幸せそうに頬に手を当てた。リビングの隅っこに追いやられた古城が、呆れたような表情で彼女たちを睨む。
「なんで叶瀬の快気祝いに、おまえらまでいるんだよ」
「まあ、そう言うなって。せっかくの祝い事なんだし、人数が多いほうが盛り上がるだろ」
「言っとくけど古城が喰ってるその肉、あたしの差し入れだからね」
「ぐぐ」
まったく悪びれない矢瀬と浅葱の態度に、古城はやれやれと息を吐いた。
らが突然うちに来てくれたことで、少し気にはよくわからない。
もっとも彼らが楽になったのも事実だった。実際、どうして彼の快気祝いとはいえ、妹の同級生たちに囲まれてメシを喰うというシチュエーションに、多少の気まずさを感じないわけではなかったのだ。
いくら知り合いでさ、結局どういう関係だったわけ？」
「……で、あんたと叶瀬さん

食事の手を休めずに、浅葱がいきなり訊いてくる。見た目の印象とは裏腹にキャラだ。空っぽになった浅葱の皿に、凪沙が次々に新しい料理をよそっていく。

「こないだ説明しただろ。叶瀬が病気で、メイガスクラフトの研究所で治療俺と姫柊は、輸血とかいろいろあって協力してたんだって。な、姫柊」

「はい。そ、そうですね。急なことだったので、ご心配をおかけしてすみません」

古城と雪菜がすらすらと説明を口にする。こんなこともあろうかと、前もっておいたのだ。だが、その流暢な言い訳に、逆に不自然さな臭いを感じたのか、浅葱は露骨に疑わしげな表情を浮かべ、

「じゃあさ、例の王女様はなんだったの？」

「あれは叶瀬の親父さんが若いころアルディギアの宮廷魔導技師をやってたから、その関係でお見舞いに来てくれたんだって」

「ふーん」

古城たちの説明は真実とはずいぶん違っていたが、それぞれの立場や人間ほとんど嘘はついていない。完全に納得したわけではないにせよ、浅葱も、諦めたようだった。

代わりに古城の部屋のほうから、もう一人の参加者の声が聞こえてくる。

「へえ……これが暁くんの部屋なんだ。意外に普通だね。うーん、興味深いな」

「他人の部屋に入るなり、ベッドの下をのぞきこむのはやめてくれないか」
床に屈みこんでいる倫の背中に、古城が上擦った声で呼びかける。
誰に対しても分け隔てなくクールに振る舞う彼女だが、古城に対してだけは少々態度が違う。
有名な魔族生態学者の祖父を持つ倫は、彼女自身、魔族の特徴に詳しいとはいえ彼女は、古城を敵対視しているわけではない。特に騒ぎ立てるようなそぶりを見せるのだ。
ただ単に面白がって観察している、という程度の印象だ。古城の自宅まで押しかけてきたのも、そのような観察の一環なのだろう。
そんな倫は古城の本棚を興味深そうに物色し、
「アルバム発見。見てもいい？」
「いいけど、そこにあるのは小学生のときのやつだから、べつに面白くないと思うぞ」
古城は親切に警告してやったつもりだったが、女の子たちの感想は少し違ったらしい。逆に興味をそそられたように、浅葱や雪菜までもが倫の周りに集まっていく。
「小さい暁くんだ。今とあんまり変わらないね」
アルバムの表紙をめくった倫が愉しそうに眉を上げ、雪菜がしみじみと感想を述べる。
「先輩にも小学生の時代があったんですね。かわい……い？」
「なんで疑問形なんだよ!?　そこは素直に褒めるとこだろ！」

憤然と文句を
「これって、古
正確に写真の
ている。四年前
「だいたいそん
「こいつ、誰だ
矢瀬がアルバ
着たチームメイ
小学生だ。
「ああ、ユウマ
「ユウマ？」
「ガキのころか
腐れ縁の親友み
へえ、と倫が
「男前だねー。
「どういう意味
傷ついたよう

たれる古城。そのやりとりを聞
城が絃神市に引っ越してくる直
撮影時期を特定したのは浅葱だ
。古城がまだ中学生になったば
かりのころだ。
な感じだな。このあたりの写真
？　よく一緒に写ってるみたい
ムを持ち上げて訊いてくる。そ
トの姿が写っていた。真っ黒に
こには、古城と同じバスケ部の
日焼けしているが、なかなか凛々しい顔立ちの
ら一緒につるんでた遊び仲間だよ。幼なじみっていうかバス
たいなもんだな」
感心したように目を細める。
暁くんの友達にしとくのがもったいないくらい」
だよ!?　べつにいいだろ、俺の友達の顔がよくても！」
に唇を歪めて、古城が喚く。

一方の矢瀬は、あながち冗談とも思えない表情で写真を睨みつけ、

「クソッ、古城の親友は俺だけだと思っていたのに、まさか昔の男がこんなイケメンだとは！」

「なに言ってんの、あんたたちキモッ……」

浅葱が本気で嫌そうに顔をしかめる。古城は思わず目を剝いて、

「なんで俺まで!?」

あははは、と笑い出したのは凪沙だった。

「たしかにユウちゃんは昔から女の子に人気あったよね。古城君と違って」

「まあな」

古城は不本意ながら首肯する。実際、彼の友人はよくモテた。

そして凪沙は、ふと思い出したように携帯電話を取りだしてメール画面を開き、

「そうそう、さっきユウちゃんから連絡あったよ。明日、九時くらいに空港に着くって」

「え？」

矢瀬が驚いたように振り返る。震える指で古城のアルバムを指さして、

「もしかして紘神島に来るのか、こいつ？」

「そうだよ。親戚のツテで、フェスタの招待チケットをもらったらしい」

凪沙が運んできたパスタを皿によそいながら、何気ない口調で古城が答える。昔のアルバムを物置から引っ張り出しておいたのも、もともとは旧友との再会に備えてのことだった。

「そういえば暁くん、今年は誰かと一緒に回る予定があるって言ってたっけ」
すっきりと疑問を解き明かしたような表情で、倫が言う。
「ああ。島の中を案内するってユウマと約束しちまったからな」
古城はパスタを口にくわえたままうなずいた。倫が含みのある表情で、浅葱を励ますように微笑みかける。
「お友達の案内じゃ仕方ないわね。ね、浅葱」
「いいわよ。どうせそんなことだと思ってたから」
テーブルの前に戻ってきた浅葱が、なぜかやけ食いのような勢いで食事を再開する。自分の料理が順調に減っていく様子を眺めて、凪沙が嬉しそうな表情をみせる。
浅葱はふと食事の手を休めて、隣にいる雪菜を見た。彼女に顔を寄せて、小声で訊く。
「ねえ……あなたは知ってたの？　古城の友達が来るってこと……」
「いえ」雪菜が残念そうに首を振った。「今、初めてお祭りの間の予定を聞きました」
ほんのわずか視線を交わして、二人は同時に溜息をついた。
「そういうやつよね」
「……ですね」
妙に共感のこもった言葉で慰め合う二人を、なんなんだいったい、と古城はわけもなく不安な気持ちで眺めていた。

開始前の懸念とは裏腹に、パーティは和やかな盛り上がりの中で終了した。

主賓の夏音は、途切れることのない凪沙のおしゃべりや、矢瀬の馬鹿話を、嬉しそうに聞いたし、倫も古城の私生活を観察して満足したらしい。

浅葱と雪菜は、なぜか自棄っぱちのようなハイテンションで、対戦型のビデオゲームに熱中していた。超人的な反応速度を誇る雪菜と、圧倒的なコンピューターアルゴリズムの知識と天性の勘を持つ浅葱。二人の対戦は白熱し、結果、見たこともないハイスコアを多数叩き出したものの、決着は最後までつかなかった。ギスギスしているのか仲がいいのか、よくわからない二人である。

お泊まりの準備をしていなかった浅葱たちは、終電間際になって仕方なく帰宅。暁家には、古城と中等部の二人だけが残された。

夏音と雪菜はそのまま凪沙の部屋に泊まって、さっさとベッドに入ることにする。

屋に引きこもって研究主任などという偉そうな肩書きを持つ古城たちの母親は、仕事の都合で、

市内の企業で週に一、二度しか自宅に戻らない。この時間になっても帰ってこないところをみると、今夜も

職場に泊まりこみなのだろう。

とはいえ、研究所が閉鎖される波朧院フェスタの期間は、さすがの彼女も得ないはずだ。それにユウマも到着する。明日もまた騒々しくなりそうだ。

そんなことをいつものことだが、眠れないのだ。

もともと夜型の古城だが、吸血鬼化して以来、その傾向がいっそう強くなことなら、昼夜逆転の生活を送りたいくらいだ。

だが、そんなことをすれば当然、高校生活に支障が出るし、それに古城がとを凪沙に気づかれてしまうだろう。それだけは絶対に避けなければならなが魔族になってしまったことを、彼女にだけは知られるわけにはいかないの

「――お兄さん」

悶々と眠れない夜を過ごしていた古城の耳に、控え目な声が聞こえてくる一瞬、幻聴かと思ったが、よく見れば古城の部屋のドアがほんの少しだけの隙間から、きらきらとした美しい銀髪が見え

「あの、まだ起きてますか？」

「……叶瀬？」

古城が小声で訊き返すと、安心したような表情で夏音が顔を出す。礼儀正しく頭を下げて、

彼女は部屋の中に入ってくる。そして静かにドアを閉める。

彼女が着ているのは膝丈までのパジャマ。淡い水色の生地は、夏音の瞳の色と同じで、せいか彼女によく似合っている。

古城はむくりと上体を起こして、困惑の視線を夏音に向けた。これが噂に聞く夜這いというやつか、と妄想したのは一瞬だけで、すぐにその可能性を否定する。修道院育ちで〝聖女〟とまで呼ばれる夏音が、そんな行動に出るとは思えない。

「どうしたんだ、こんな時間に」

「一人きりで少しお話がしたかったでした」

「話？」

はい、と夏音が真面目な表情でうなずいた。

古城はベッドの隅に移動して、彼女が座るためのスペースを空ける。夏音は少し照れたようにはにかんで、古城の隣にちょこんと腰掛けた。そして再び神妙な顔つきになって続ける。

「お話というのは、模造天使のことでした」

「……天使化していた間の記憶があるのか？」

古城の表情が険しくなる。

魔術的に人体を強化して、高次元の存在へと変異させる、そうやって造り出された存在が模造天使だ。アルディギア王族の血統を受け継ぎ、強力な霊媒としての体質を持つ夏音は、そ

の実験体として選ばれた。そして一時は、限りなく本物の天使に近い姿にまで辿り着いたのだ。

しかし人間を強制的に天使化するという無謀な儀式は、相応の代償を彼女に強いた。同類である模造天使（エンジェル・フォウ）上の殺し合いを強要され、やがては夏音自身の自我すら消滅することになっていた。さらにはそうやって生み出した模造天使（エンジェル・フォウ）を、兵器として利用しようとする人々すら存在した。

そんな過酷な状況に追いこまれていた夏音を、古城と雪菜（ゆきな）は、結果的に助けたことになる。

しかし古城たちは、そのことを夏音に伝えるつもりはなかった。

助けたといっても、古城たちが彼女と戦ったのは事実だ。一歩間違えば古城たちは彼女に殺されていた。そんなことを夏音に伝えても、彼女を苦しませるだけだと思ったからだ。夏音は、模造天使（エンジェル・フォウ）となっている間の記憶をなくしていると聞いていたし、それはむしろ好都合だと思っていた。

だが、夏音が記憶をなくしていなかったとなると、事情はまったく変わってくる。

こんな夜中に、彼女がこっそり古城に会いに来たのは、あの日の出来事について問い詰めるためなのだろう。

しかし夏音の気持ちに配慮しながら、筋道立てて説明するには、古城はあまりにも混乱していた。そして真実を彼女に伝えるためには、当然、自分が吸血鬼であることも明かさなければならない。それも古城の迷いの一因だ。凪沙（なぎさ）の友人である夏音が古城の正体を知ってしまえば、

それが凪沙に知られてしまう可能性も増すからだ。

明かりの消えた暗い部屋。狭いベッドの上で古城は夏音と見つめ合う。

部屋のドアが、突然誰かにノックされたのはそのときだった。

「話し声が聞こえた気がしたけど、古城君、まだ起きてるの……？」

古城の返事を待つことなく、ドアが無造作に開けられる。

その直前、古城は夏音をベッドの上に押し倒し、掛け布団の下に彼女もろとも潜りこんでいた。声を上げそうになった夏音の口元を掌で覆って、静かにするんだ、と眼で語りかける。

幸い凪沙は、布団の下に隠れた夏音には気づかず、古城が寝ているものと信じたらしい。

「……まったくもう。古城君ったら、またこんなに設定温度下げっぱなしで」

机の上に置かれていたリモコンを操作してエアコンを止め、ふわ、と眠そうにあくびをする。

「うー……トイレトイレ」

そう言い残して部屋を出て行く凪沙。彼女が遠ざかる気配を感じて、古城はぐったりと力を抜いた。布団の下に隠れていた夏音も、ホッとしたように息を吐く。

自分の部屋で寝ているはずの夏音の不在に気づいていないあたり、凪沙も少し寝ぼけてるのかもしれない。どちらにしても助かった。こんな時間に夏音と二人でいるところを見られたら、

凪沙が怒り狂うのは確実だ。心臓がバクバクいってるのに、古城は再び全身を硬直させた。予想外の密着状態に、古城は固まるが、ベッドの上でこの体勢は危険すぎる。

「か、叶瀬……あのさ……」

「お礼を言いに来たんでした。覚えてますか？お兄さんと雪菜ちゃんが私を助けてくれたこと」

「え……？」

「全部、那月先生に聞きました。父様の研究のことも、お兄さんの正体のことも」

古城は、夏音の唐突な告白に息を呑む。模造天使の実験に関与していた夏音の父親に代わって、現在、彼女の後見人になっているのは南宮那月だ。

その那月の口から、すでに夏音に語られてしまったというのだろうか。あの事件の真相も。

そして古城の正体までも。

「どうにかバレずに済んだみたいだな」

「ドキドキしました」

目元だけ布団から出して、夏音が微笑む。

「悪かったな、無理やり布団に引っ張りこんだりして」

「いえ。ちょっとだけ愉しかったです」

そう言って夏音は、古城の耳元に顔を寄せてくる。予想外の密着状態に、古城は再び全身を硬直させた。

「か、叶瀬……あのさ……」

「お礼を言いに来たんでした。覚えてますか？お兄さんと雪菜ちゃんが私を助けてくれたこと」

「え……？」

「全部、那月先生に聞きました。父様の研究のことも、お兄さんの正体のことも」

古城は、夏音の唐突な告白に息を呑む。模造天使の実験に関与していた夏音の父親に代わって、現在、彼女の後見人になっているのは南宮那月だ。

その那月の口から、すでに夏音に語られてしまったというのだろうか。あの事件の真相も。

そして古城の正体までも。

動揺する古城の耳元で、夏音は言葉を続けた。どこか憧れのこもった口調で——

「お兄さんは正義の味方だったんですね」

「は……!?」

完全に予想外の夏音の言葉に、古城は沈黙した。彼女がなにを言っているのか、古城にはさっぱり理解できない。しかし夏音は大真面目な口調で、

「那月先生があの……チビッ子は……！」

島の平和のために人知れず働いている魔法戦士で、紘神

「あ……あ、それとも途中で考えるのが面倒になったのか、

やり場のない虚脱感に、古城が声を震わせる。

ほかに上手い説明を思いつかなかったのかい。

ともかく那月は、そんな子どもだましの適当な説明で夏音を納得させたらしい。

いちおう話の筋は通っているし、古城が吸血鬼という事実も隠蔽されてはいるが、もう少しはなかったのだろうか。信じる

マシな言い訳

「……あのさ、叶瀬。今の話、凪沙には黙ってくれないか」

古城が弱々しい声で言う。吸血鬼だとバレるのと、改造人間と誤解されるのと、どっちがマシだろうかと思わず真剣に悩んでしまう。

「わかってます。正義の味方の正体は家族にも内緒でした」

夏音がきっぱりとうなずいた。それを確認して、もうこれ以上深く考えるのはやめておこう、と古城は気持ちを切り替える。

「そういや叶瀬、大丈夫なのか？　退院した直後なのに、外泊したりして」

「はい。身体のほうはもう元気でした。那月先生にも許可をいただきましたし」

「そうか、よかった」

「はい。アスタルテさんもよくしてくれました。どうやら那月の家での新しい暮らしも、それなりに上手くいってるらしい。

しかし占城が安堵の笑みを洩らしたのも束の間、再び廊下に足音が響く。

夏音の答えに、占城は安堵の笑みを洩らしたのも束の間、再び廊下に足音が響く。

うろたえる夏音をもう一度ベッドに押し倒し、占城は掛け布団を肩まで引っ張り上げた。そうやって安心したのも束の間、再び廊下に足音が響く。

して二人抱き合うような姿勢で、凪沙が行き過ぎるのをじっと待つ。

だがそのとき、密着状態の夏音から伝わってくる予想外の感触に気づいて、占城は動揺した。

「叶瀬。もしかしてそのパジャマの下って……」

「はい？」

不思議そうに古城を見上げてくる夏音。その無防備な表情を直視できずに、古城は思わず目を逸らした。

古城の身体に押しつけられているのは、抗い難い物の本能として直感する。今の彼女はブラを派だったらしい。

「お兄さん？」

小刻みに身体を震わす古城に気づいて、夏音がそれに答える余裕がない。

体調を崩したわけではない。古城を襲ってきたのは、肉体特有の忌わしく厄介な症状だった。吸血衝動、だ。

世間ではいまだに誤解されることも多いが、吸血鬼と呼ばれる種族は、飢えを満たすために他人の血を吸っだし吸血鬼化したつまりは性欲、動が発生する真の原因は、食欲ではなく性的興奮。

「どうしたんですか、お兄さん？　もしかしてどこか具合でも悪いんじゃ……」

「大丈夫……だから、くっつかないでくれ。さすがにちょっとこれは……」

不安な表情をのぞきこんでくる夏音。心配してくれるのはありがたいが、前屈みになった彼女の白い喉や胸元が、視界が真紅に染まり、興奮して長く伸びた牙が疼く。

――そう思われた直後、古城の口の中に、唐突に完全に理性のタガが弾け飛ぶ

甘く金臭い血の味が広がった。

「お兄さん、鼻血が!?」

夏音がついに悲鳴を上げる。しかし古城は、だらだらと流れ出す鼻血の感触にむしろホッとしていた。吸血衝動は消滅する。味わうのが自分の血であれ、問題ないのだ。たとえ中学生の女の子に抱きつかれて鼻血を噴き出したヘタレに思われようと、夏音を傷つけずに済んだことは誇りに思っていいはずだ。

そんなささやかな古城の達成感を粉微塵に打ち砕いたのは、部屋の入り口から聞こえてきた静かな声だった。

「……こんな夜更けに、叶瀬さんとなにをやってるんですか、先輩」

「ひっ……姫柊!?」

その声の主の姿に気づいて、古城の表情が凍りつく。モノトーンのパジャマを着た雪菜が、いつの間にか古城の部屋の中に氷のような無表情で立っていた。

彼女の隣に解いた長い髪を逆立てるようにしているのは水玉パジャマの凪沙。怒りのあまり声も出せずにいるらしい。大変よくない徴候だ。

「待て、違うんだ。俺たちはただ大事な話をしてただけで……」

古城は必死の形相で首を振る。しかし雪菜は半眼になって冷たく溜息をつき、

「ベッドの上で大事なお話ですか」

「その状況でなにを言われても、言い逃れにしか聞こえないよ……！」

押し殺したような低い声で宣告する凪沙。占城の背中を冷や汗がつたう。

「……ですよね」

そんな殺伐とした古城たちの会話に気づかず、夏音は一人おろおろと流血する古城を見上げている。

「鼻血、止まりませんね。どうしましょう……？」

「……そうでした、たしか……！」

突然勢いよく立ち上がり、夏音は空手チョップの姿勢で手を高く掲げた。無意識にこめられた膨大な呪力が、彼女の手刀に集まっていく気配がする。

本人はまったく自覚していないが、夏音はアルディギア王家直系の王族。潜在能力だけなら雪菜をも凌ぐ強力な巫女なのだ。

「聞いたことがありました。こういうときは首の後ろを叩くとすぐに治まると！」

「ちょっと待て、それって間違った民間療法だろ！　よい子が真似したら危険だから――！」

夏音の狙いに気づいて、古城は慌てる。彼女の巫女チョップを後頭部に叩きこまれたら、いくら不老不死の吸血鬼といえどもただで済むとは思えない。それでなくても、その間違った民間療法は危険だといわれているのだ。

しかし古城の悲痛な叫びもむなしく、夏音が可愛らしい掛け声とともに手刀を振り下ろす。

「えいっ」

致死的な衝撃をまともに喰らって、古城の視界が暗転する。
薄れゆく意識の中で古城が最後に見たのは、自業自得です、と言いたげに目元を押さえている雪菜と、冷たく蔑むような表情を浮かべた妹の姿だった。

5

月齢九。上弦を二日ほど過ぎた膨らみかけの半月が、南西の空で眩く輝いている。
〝魔族特区〟の夜は長い。魔族たちの多くは夜を好み、それゆえに、飛び抜けて魔族人口の多いこの街では、多くの飲食店や娯楽施設が夜明け近くまで営業を続けているのだ。
一方で、そんな街の喧騒を少し離れれば、ネオンの光さえも届かぬ暗い夜の海が、島を取り囲むように広がっている。外洋の荒波が人工的に造られた岸壁へと絶え間なく打ち寄せ、冷たい飛沫を散らす。白く弾けた波頭が、月光を浴びて銀色に輝いている。
闇と光。揺らめくベルベットのような海面に、嘲り笑うような歪な声が響き渡った。
「相変わらずここは醜い街ね、お姉様」
声の主は、赤い装束をまとった女だ。異国の踊り子を思わせる露出度の高い衣服。扇情的なガーターストッキング。そして魔術師のローブを連想させる、長い頭巾。すべてが血のような緋色で統一されている。

見た目の年齢は二十歳前後。服装だけなら娼婦のようにも、あるいは後ろ姿だけなら尼僧のようにも見えるかもしれない。しかし、彼女が漂わせている禍々しい雰囲気をひと言で端的に表すならば、魔女――という呼び名こそが相応しい。

「ええ、本当に」

緋色の女の呼びかけに応えて、もうひとつの声が艶めかしく笑う。

そちらの女は漆黒だった。鍔広の三角帽子をかぶって、闇色のマントを羽織り、ボンデージ衣装のような黒革のライダースーツで、全身をくまなく覆っているのだ。なまめかしい身体のラインがくっきりと浮き出して、ある意味、裸よりもエロティックな雰囲気を漂わせている。

そんな彼女の姿もまた、魔女としか表現できないものだった。

緋色の魔女と、漆黒の魔女。

二人は夜の海面を悠然と歩いて、絃神島の人工の大地へと足を踏み入れる。

その直後、眩いサーチライトの光が、彼女たちの姿を暴力的に照らし出した。

海岸沿いの道路を埋め尽くしていたのは、武装した機動隊員の群れ。彼らの楯には護身用の魔法陣が刻まれ、携行している銃器には対魔族用の特殊弾頭が装塡されている。

特区警備隊（アイランド・ガード）の密入国阻止部隊。その任務の性質上、強力な武装と豊富な実戦経験で知られた精鋭たちである。

しかし魔女たちは、そんな警備隊員たちを蔑むように眺めて、気怠く嘆息した。

「興ざめですわね、お姉様」

「十年ぶりに私たちが帰還したのだから、二人は市街地に向かって歩き続ける。自分たちに向けられた銃口の存在を、歯牙にもかけない傲岸な態度だ。

口々にそう呟きながら、

『侵入者に警告する。貴君らは〝魔族特区〟の管理区域を侵犯している。これより特区治安維持条例に基づき身柄を拘束する。直ちに魔術障壁を解除し、我々の誘導に従え』

特区警備隊の分隊長が怒鳴った。拡声器越しの彼の声が、海辺の大気を震わせる。

『十秒間だけ待つ。これは最終警告である。従わない場合は実力をもって拘束する』

警備隊員たちが武器の安全装置を解除した。

彼らが装備しているのは、獣人すら無力化する大口径の呪力弾や琥珀金弾だ。まともに喰らえば、彼女たちの肉体など一撃で粉砕されてしまうだろう。

にもかかわらず、

「愚民どもが騒々しいこと」

魔女たちは冷ややかな嘲笑を絶やさない。

「せいぜい愉しませていただきましょう」

分隊長がカウントダウンを続ける。約束の十秒間が過ぎても、二人の魔女は歩みを止めない。

一瞬だけ苦々しげに表情を歪めた後、無感動な口調で分隊長が叫ぶ。

『撃て！』

闇の中に青い火花が散った。無数の銃声が一体となって、雷鳴のように大地を揺るがした。
撃ち放たれた弾丸の雨は、しかし魔女たちに触れることはなかった。
海面を割って飛び出してきた巨大な触手が、彼女たちの楯となって、飛来する銃弾をすべて受け止めたからだ。その異様な光景に、警備隊員たちが絶句する。
触手の直径は最大で百五十センチほど、長さに至っては見当もつかない。イカなどの頭足類の肉体を連想させる、半透明の触手である。それらは蛇のようにうねりながら次々に数を増し、魔女たちの姿をすっぽりと覆い隠した。
「仮にも〝魔族特区〟を名乗る都市の住民が、この程度の使い魔で驚かないでいただきたいわ」
浮き足立つ隊員たちを嘲るように、緋色の魔女が哄笑する。
漆黒の魔女が、酷薄に唇を歪めて首を振る。
「それは無理な注文というものよ、オクタヴィア。あの礼儀知らずの小娘が住んでいるような街ですもの」
「そうね、お姉様」
緋色の魔女が、小脇に抱えていた本を広げた。掌を本に押し当てる。描かれた文字が発光し、膨大な魔力があふれ出す。
「ならば彼らには自分たちの血で、この薄汚い街をせいぜい美しく飾ってもらいましょう」
触手の動きが勢いを増した。

警備隊員たちは銃撃を続けるが、さすがの大口径弾も、直径一メートルを超える半透明の触手は撃ち抜けない。銃の残弾が尽きて、弾幕が途切れる。

その瞬間、触手が反撃に転じた。

巨大な鞭と化して伸びた触手が、隊員たちを次々と薙ぎ払う。

その圧倒的な質量の前には、楯などなんの意味もなさなかった。屈強なグのピンのように弾け飛び、魔女たちを包囲する陣形が崩壊する。

「なんなんだ、こいつらは――!?」

分隊長が怒声を上げた。彼とて実戦経験豊富な〝魔族特区〟の警備隊員たちがボウリン

術師など、これまでにも掃いて捨てるほど見てきている。

しかしこの触手は桁が違った。これほど強大な使い魔は、普通の人間が超えている。吸血鬼の眷獣にも匹敵する化け物だ。不老不死の吸血鬼でも物を召喚すれば、たちまち術者の生命力が枯渇して絶命するはずだ。

過去には眷獣を人工生命体に寄生させる実験が行われたこともあるらしいが、かに長命な彼らの肉体ですら、ごくわずかな期間で寿命が尽きたという。

否。たったひとつだけ、抜け道とでも呼ぶべき例外が存在する。

人間の姿でありながら、高位の吸血鬼に匹敵する強大な魔力を得る方法。

己の魂と引き替えに、悪魔の力を与えられた者。すなわち、魔女――

『術紋を人工島管理公社の犯罪者登録情報と照合完了。高確率で一級犯罪魔導師〝メイヤー姉妹〟と推定。所属はLCO第二類〝フィロソフィ〟』

特区警備隊本部の分析オペレーターから、分隊長のイヤフォンに緊急通信が入る。

「メイヤー姉妹!?　アッシュダウンの魔女かしら！」

分隊長が絶望に声を震わせた。メイヤー姉妹とは、かつて北海帝国領アッシュダウンで危険な魔術儀式を敢行し、州都ひとつを消失させる巨大災害を引き起こした国際魔導犯罪者だ。

そして彼女たちは、十年前にもこの絃神島に現れて、未曾有の大被害を出したことがある。

その魔女姉妹が再び戻ってきたのだとしたら、密入国阻止部隊程度の武装でどうこうできる相手ではない。

「ご名答。私たちのことを、まだちゃんと覚えていてくださったのね」

「偉いわ。ご褒美よ」

放心状態で立ち尽くす警備隊員たちを眺めて、漆黒の魔女が自分の本を掲げた。隊員たちの足元に亀裂が入り、その隙間から禍々しい瘴気が立ち上る。

我に返った分隊長が、部下たちに撤退の指示を出そうとする。だが、そのときにはもう遅かった。地面を割って出現して新たな触手が、人工島の鋼鉄製の地盤を引き裂き、警備隊員たちを暗い海の底へと引きずりこんでいく。

その圧倒的な蹂躙が終わると、岸壁の道路には静寂が訪れた。

地上に残っていたのは、それぞれ緋色と漆黒の衣装をまとった、二人の魔女だけだった。

「他愛ない連中ですこと。この様子なら、〝凶書館〟の手を借りるまでもなかったですわね」

「そうね、オクタヴィア」

頭巾の中に本をしまいながら、緋色の魔女が退屈そうに呟く。

「でも忘れてはダメよ。この街にはナツキがいるわ――あの忌々しい〝空隙の魔女〟が！」

漆黒の魔女もうなずいた。三角帽子の鍔を持ち上げ、彼女は夜の絃神市街を睨む。

ずるり、と湿った音を残して、巨大な使い魔の触手が海へと戻っていく。

無慈悲な破壊の痕跡だけを残して、二人の魔女もまた、闇の中へと溶けこむように消えた。

深夜零時を過ぎて日付が変わる。

血塗られた狂乱の宴の始まりまで、あと一日――

第1话 有朋自远方来

Dear MAO Childhood Friend

1

絃神島中央空港は、旅客たちでごった返していた。

十月最後の金曜日である今日は、波朧院フェスタの前夜祭が本格的に押し寄せているのだ。

方から始まる数々のイベントに備えて、島外からの観光客が本格的に押し寄せているのだ。

モノレールの駅から空港までの連絡通路も、キャリーバッグを引きずる人々に占領されて、大渋滞になっていた。その混雑をかきわけて、古城たちはどうにか空港到着ロビーに辿り着く。

「ギリギリ間に合った……か」

電光掲示板の時計を見上げて、古城が荒い息を吐く。

時刻は午前九時を、すでに十五分ほど過ぎていた。しかし待ち合わせ相手の姿は見えない。

この様子では手荷物受け取り場も混み合っているだろうし、検疫や上陸審査に時間がかかってしまうかもしれない。

「本当にもう！　古城君の準備が遅いから、服を選んでできたのに。どうしてこんな日に寝坊するかな。信じられない、ホントあり得ない」

凪沙がぷりぷりと怒っている。肩で息をしながらも、口数が減らないあたりはさすがだ。

「悪かったよ！　昨日の夜の騒ぎで目が冴えて眠れなかったんだよ！」

「夏音ちゃんが部屋に来たことを思い出してたんでしょ。恥ずかしい！」

「う……ぐ……！」

凪沙に図星を指されて、古城は言葉に詰まる。なんと言われても、吸血衝動を感じるほどの刺激を受けた直後に、ぐっすり安眠できるほど古城の神経は太くないのだ。

「すみませんでした、お兄さん。私のせいで」

夏音がなぜか責任を感じているような表情で頭を下げる。

今日の彼女が着ているのは、飾り気のないグレーのコットンドレス。しかし夏音の華やかな銀髪が、むしろ地味な服装のせいで引き立って、空港にいる人々の注目を余計に浴びている。

「いや、叶瀬が悪いわけじゃないから気にするな」

「……でも、わたしたちまで一緒に来てよかったんでしょうか。迷惑なんじゃ……」

夏音の気持ちを代弁するように、困惑気味の口調で訊いてきたのは雪菜だった。

彼女の服は、ポロワンピースにニーソックス。もちろん背中には、いつものギターケースがある。そのせいでバンド少女っぽく見えなくもない服装だ。

実は雪菜が所有する私服のほとんどは、彼女のために紗矢華が選んで送りつけてきたものだという。まるでオカンのようだ、と思わなくもないが、さすがに紗矢華の見立てだけあって、その服は雪菜によく似合っていた。

「いいのいいの。雪菜ちゃんたちも波朧院フェスタは初めてなんでしょ。一緒に回ったほうが

愉しいよ。」一人案内するのも手間は変わんない。ね、占城君」

遠慮がちな友人たちの肩を抱きながら、凪沙が朗らかな口調で言う。

「凪沙が面倒見るぶんには、俺は文句はないけどな。ユウマもいいって言ってたんだろ」

古城も鷹揚に肩をすくめた。凪沙が、うん、と迷わずにうなずく。

「友達を連れてくって言ったら喜んでた。ユウマちゃんは昔から女の子に優しかったよね」

「ああ」

適当に相づちを打ちながら、古城は緩く溜息をついた。

夏音はもともと凪沙の友人だ。彼女たちの動向を、古城が気にする必要もないだろう。

それに雪菜は放っておいても、古城を監視すると言い張ってあとを尾けてくるに違いない。

それなら目の届くところにいてくれたほうがまだ気楽だ。古城の溜息の理由はほかにある。

「……で、おまえらはなんでここにいるんだよ」

古城はぐるりと首を回して、柱の陰から自分を監視していた、男女の二人組を睨みつける。

華やかな髪型の女子高生と、ヘッドフォンを首にぶら下げた短髪の若い男。それぞれ目元をド派手なカーニバルマスクで覆っている。もしかしたら変装のつもりなのかもしれないが、目立ち過ぎて逆効果だ。

「……よく見破ったわね、あたしたちの完璧な変装を」

正体を看破されたことを悟って、浅葱が渋々とマスクを外す。古城は呆れ果てて、もはや笑

う気力もない。あからさまに怪しいわ。どっから持ってきたんだ、そんな仮面」
「なにが完璧だ。パレード用のやつをちょっといやー、仮装したクジャクの羽根を撫でつつ、矢瀬は得意げに胸を張る。
仮面から生やっぱ、古城の幼なじみってかったんだ？」
「おまえら、そんな手間暇かけてなにがしたんだら、すぐ帰るからさ」
「いいでしょ、べつに。古城の友達の顔を拝いでくれ」
「だな。俺らも見てみたいし。まあ、ただの通行人だと思って気にしなければ普通に紹介するのに…」
「わざわざ隠れて見に来なくても、言ってくせたのだった。古城
そういえば待ち合わせの話題が出たとき、浅葱と矢瀬もその場に居合わたのかもしれない。
と旧友の再会を邪魔しては悪いと、案外、彼らなりに気を遣ってくれていそう思うと、浅葱たちを邪険に追い返すのもはばかられて、古城はやれと首を振る。と、
「――古城！」
彼らの頭上から、予期せず誰かが大声で呼びかけてきた。混雑した到着ロビーでもよく響く、透明感のあるアルトヴォイスだ。
その声につられて、古城が思わず顔を上げる。視界に映ったのは、舞い階段の手すりから身を乗り出した誰かが、古城目がけて飛び降りてくる人影だ。

快活そうな雰囲気の娘だった。

髪型は毛先の撥ねたショートボブ。上着はスポーツブランドのフード付きチ

ートパンツから伸びた脚がすらりと長い。ほっそりしたふくらはぎと、ごつい

ーズの組み合わせが妙に可愛らしい。

「うおっ!?」

驚愕する浅葱たちの目の前で、古城がどうにか彼女を受け止める。結果的

な姿勢になったまま、古城は少女を呆然と見つめて、

「ユ、ユウマ!?」

「久しぶり。元気そうだね、古城」

ユウマと呼ばれた少女が、悪戯っぽく目を細めて笑う。ボーイッシュと呼ぶ

笑顔だ。古城はうんざりしたように彼女を下ろし、

「……今ので危うく心臓が止まりかけたぞ。相変わらず無茶苦茶するな、おま

ははっ、と爽やかに笑って、少女が周囲を見回した。今の騒ぎで自分たちが

を集めてしまったことにようやく気づいたらしい。少し困ったように舌を出し

古城が深々と溜息を洩らしていると、それを押しのけるようにして、凪沙が

こんだ。

「ユウちゃん!」

「凪沙ちゃんか。美人になったね。見違えたよ」
「またまたー……こないだも写真送ったばっかじゃん」
「いやいや。写真よりも実物はもっとね」
歯の浮くような気障な台詞も、彼女の口から出ると妙に説得力が出るのが不思議だ。
そんな謎の少女と暁兄妹の会話を放心したような表情で眺めていた浅葱が、傍にいた雪菜の肩をつかんで勢いよく揺さぶった。
「なにあれ。どうなってるの!?」
「そ、それはわたしに訊かれても……」
どうしてあんな美少女に途方に暮れたようにロごもる。小学生時代の友人を迎えに来たはずの彼が、わからないのだ。第四真祖の監視者たる彼女にもさっぱり
「ちょっと古城。どういうことなのよ？」
ついに業を煮やした浅葱が、強引に古城を引き寄せて訊いた。いつになく殺気立った友人の顔を、古城はわけがわからないという表情で見つめる。
「なにがだ？」
「あの方は誰ですか」
古城の背後に回って雪菜が訊く。奇しくも浅葱と共同戦線を張るような恰好だ。挟撃され

て逃げ場を失った古城は、居心地悪そうに肩をすくめて、
「だから俺の幼なじみだけど」
「でも、女の子ですよね？」
「ってか、すごい美人じゃん!?」
雪菜と浅葱がほとんど同時にツッコミを入れる。
古城はますます困惑したような表情になって、
「……なに騒いでんだよ。おまえらだって、昨日、写真見ただろ。俺んち家で」
「そういやたしかに、待ち合わせの相手が男子とは言ってなかったよな」
冷静にそう指摘したのは矢瀬だった。む、と唇を噛みしめて浅葱と
占城の親友という人物は、当然のように相手は男子だと思いこんでいた。
暁兄妹は一度もそんなことは口にしていない。あの写真に写っていた人物の面影が残っていた。
にしてはあまりにも美形すぎた。
おまけに凪沙と愉しげに語らっている謎の少女には、あの写真の人物の面影が残っていた。
つまり、やはり二人は同一人物ということなのだろう。
「――彼らは、学校の友達かい、古城？」
証明終了――
いまだに動揺から立ち直れない浅葱たちに近づいて、その元凶である謎の少女が、人懐こく微笑みかけてくる。身長は浅葱ともそう変わらないが、無駄な肉のない引き締まった体つきと

八頭身近い体型は正直、反則だと思う。
おまけにその清爽とした笑顔。その気になれば、老若男女問わず骨抜きにできそうだ。
しかし慣れの問題なのか、彼女の笑顔を目の当たりにしても古城は眉ひとつ動かさず、
「ああ。この子たちは凪沙のクラスメイト」
夏音と雪菜を順番に紹介し、それから浅葱たちをぞんざいに指さした。
「――で、こっちはただの通行人だ」
「誰が通行人かよ!?」
反射的に本気で怒鳴り返してしまう浅葱。
「おまえらがそう思えって言ったんじゃねーかよ」
「あははっ、いつも古城がお世話になってます」
浅葱たちのやりとりを愉快そうに見つめながら、少女が礼儀正しく頭を下げた。
「仙都木優麻です。どうぞよろしく」

2

殺人的に混み合ったモノレールを諦め、古城たちはバスでキーストーンゲートへと移動した。
絃神市内でもっとも巨大なこのビルは、人工島全域の管理を司る中枢施設だが、同時に高級

ブランドショップなどが集まる島内いちばんのオシャレスポットでもある魔族特区博物館や土産物売り場も併設されており、紘神島見学者向けの観光案内はここからスタートするというのが、地元民にとっては常識なのだった。

ひととおり博物館を見て回ったあと、古城たちは矢瀬オススメの小さなカフェテリアに入る。店内は少々古びているが、なかなか雰囲気のいい店だった。

四人がけのテーブルしか空いてなかったため、中等部の三人と高校生には浅葱と矢瀬、そして古城と優麻のグループだ。古城と優麻が料理を受け取りに行ったので、浅葱と矢瀬は自動的に荷物番として席に残る係になってしまう。

「……面白くないって顔だな」

ジンジャーエールのグラスを行儀悪くストローでブクブクしていた浅葱を眺めて、矢瀬が皮肉っぽく笑いかけてくる。

「あんたはずいぶん愉しそうね」

浅葱がやさぐれた目つきで訊き返すと、矢瀬は、おう、と力強くうなずいた。

「優麻ちゃん、しみじみと批評する矢瀬のうちの先輩には及ばないまでも、なかなか魅力的だよな。か。スレンダーに見えて実は胸もなかなか」

腕組みしながら、なかなか魅力的だよな。

いまだに信じがたいことだが、この男、実は彼女持ちなのである。しかも相手は二学年も年

上の三年生女子。少々変わり者だが、なかなかキュートな眼鏡美人だという
そんなリア充の余裕なのか、時折、やたらと偉そうにアドバイスしてくるのが
実にムカつくところだ。
「おまえが動揺する気持ちもわかるぜ。まさか古城があんな隠し球を用意し
古城のアホは全然そのアドバンテージを自覚してないみたいだが」
「あのアホは頭の中身が小学生で止まってるのよね」
動揺しているという事実はあえて否定せず、浅葱は淡々と悪態をついた。
そうこうしているうちに、問題の優麻たちが、トレイに山盛りの料理を抱えて戻ってくる。
ホットドッグやオニオンリングなどの、外れのなさそうなメニューばかりだが、トレイに注文しちゃったけど、これで正解だったかな」
「お待たせ。適当に注文しちゃったけど、これでよかったかな」
「ああ、うん……ありがとう」
爽やかな笑顔を向けられて、浅葱は無意識に赤面する。古城のことを抜きにしても、正直、苦手なタイプなのだが、この人懐こい笑顔を向けられてしまうと優麻を嫌いになるのは難しい。
「そのサンダル……」
テーブルの下でぶらぶらさせていた浅葱の足を見て、優麻が、微笑み混じりに眉を上げる。
「え？」
「エングルの限定色だよね。雑誌とコラボしたやつ」

「そうだけど…よくわかったね」
「すごく似合ってる。可愛い」
「あ、ありがとう」
浅葱は思わず口元をほころばせる。今日履プレゼントの応募ハガキ五十枚を手書きしてようなものでもないが、その価値をわかって
「なに照れてんだ、浅葱」
ニヤける浅葱に目敏く気づいて、矢瀬が愉
「う、うるさい。あんたには関係ないでし
「ふーん、そんないいものなのか」
「見るなコラ！」
白分の素足をまじまじと見つめてくる占城を、浅葱は慌てて蹴り飛ばし
そんなやりとりを、優麻はクスクスと笑いながら眺めて、
「美味しいね、これ」
そう言ってスープを口に運ぶ彼女に、矢瀬が、おお、と嬉しそうな声を上げた。
「この店の味がわかるとは、やるな、仙都木ちゃん。ここは絃神島でも知る人ぞ知る穴場なんだよ。ここだけの話〝魔族特区〟の研究をフィードバックした特別な食材を使ってるからな。

つまり人間以上の味覚嗅覚を持つ魔族の感覚器官を、選別に応用してるって噂なんだが」

「それはすごいな。よかったら矢瀬くんも、どう？」

感心したようにいいながら、優麻はスープをすくい上げたスプーンを矢瀬の前に差し出した。

「う、美味いです」

赤らめながら矢瀬は一瞬驚いたように動きを止め、そして頬を突き出す。めずらしく緊張しているのか、その動きがぎこちない。

「あーん」の姿勢である。

なぜか敬語になってスープの感想を述べる矢瀬。優麻は嬉しそうにうなずいて、

「だよね。よかった」

明らかに優麻にときめいている矢瀬を呆れ顔で眺めて、浅葱が訊く。矢瀬は苦悩するように頭を抱え、

「……なに照れてんのよ」

「ち、違う。誤解だ。俺にはもう心に決めた女性が……うお!?」

そのときタイミングよく彼の携帯電話が鳴り出し、矢瀬が短く悲鳴を上げる。表情を引き攣らせているところを見ると、例の彼女からの電話なのかもしれない。

そして動揺しまくっている矢瀬とは裏腹に、優麻の態度は平静そのものだ。彼女にとっては、あの程度の行為は、ごく普通の友人とのコミュニケーションなのだろう。そんな優麻の性格を知っている古城も、平然と食事を続けている。

なるほど、と浅葱は妙に納得する。女の子の好意にやたら鈍感な古城の性格は、こんなふうにして培われたのだろう。最悪、浅葱が彼にキスしたことすら、ただのコミュニケーションで片付けられている可能性すらある。

とはいえ、幼いころから身近に優麻のような少女がいたのでは、無理もないか、という気がしてくる。愉しそうに食事を続ける優麻の天然ジゴロっぷりを横目に眺めて、浅葱は嘆息し、

「……チートだわ」

「なんの話だ？」

「なんでもないわよ。占城にはもったいない友達だなって思っただけ」

「そうかあ……？」

古城が心外そうに唇をねじ曲げる。

「こう見えてこいつ、けっこう抜けてるぞ。小五の林間学校のときだって」

「いいのかな、古城は、当然キミのアレも話すことになるけど？」

澄まし顔で古城を恫喝する優麻。古城は慌てて平伏する。

「すみません勘弁してください」

ふざけ合う古城たちの姿を眺めながら、浅葱は再びグラスをぶくぶくと泡立て始める。

認めるのは癪だが、優麻が魅力的な少女であるのは間違いなかった。ただ幸いにも、彼女と古城の間には恋愛感情的な空気はない。少なくとも古城は完全に相手を男友達と同列に扱って

いる。古城が鈍いというわけではなく、占いとっての矢瀬基樹も、考えてみれば似たようなものだ。

だが、なにかが妙に引っかかる。それは漠然とした勘だった。

重大なバグが潜むプログラムを見たときと同じ違和感。なにひとつ具体的な根拠はないが、浅葱はその違和感を決して無視しない。それは仙都木優麻が気に入らないからだ。そうか、と浅葱は自覚する。自分は仙都木優麻が重大な危機につながることを、経験的に知っているのだ。

浅葱がそんな物騒なことを考えている間に、電話のために店外に出ていた矢瀬が戻ってきた。

「本当なんだな……わかった。すぐに戻る」

「矢瀬？　どうしたの？」

いつになく険しい表情で言い残し、矢瀬は乱暴に電話を切る。

「ああ、悪い。ちょっと野暮用が入った。俺は抜けさせてもらうわ」

すぐにいつもの軽薄な口調に戻る矢瀬だが、眉間に刻んだしわは消えていない。どうやら、よほどの非常事態が起きたらしい。

「なに？　彼女からの呼び出し？」

「まあ、そんなもんだ。じゃあな」

愛用のヘッドフォンを引っつかんで矢瀬が店を飛び出していく。古城はポテトフライを口にくわえたまま、ぽかん、とそれを見送っていたが、

「待てコラ！　ちゃんと喰ったぶんは払ってけよオイ!?」
「ふはははははは！」
「ふはははは、じゃねえ！」
高笑いを残して行く矢瀬の姿を、店内にいたほかの客たちが呆れ顔で見送っている。
やれやれと浅葱が呟くと、正面に座る優麻と一度、同じ台詞を心の中で繰り返す。やれやれ。
見て、浅葱はもうチに入れておいたスマートフォンの振動を感じて、浅葱が裏ルートで手に入れ、様々な違法改造を施した浅葱の個人的な仕事道具だ。
「あれ……？」
その直後、ポーその携帯の番号をスマートフォンは知っている人間はいないはずだ。
「ごめん。ちょっと電話」
浅葱は、ひらひらと古城たちに手を振って立ち上がる。そう、このスマー知っている人間ではないということだ。つまり、電話相手は応答ボタンを押したスマートフォンから流れ出したのは、合成された人工『――嬢ちゃんか。休日のときに悪いな』
「なんなのよ、モグワイ。用事ならあとにしてくんない？」
相棒である人工知能に、浅葱が不機嫌そうに言い返す。モグワイとは、いわば紘神島に憑い

た付喪神――紘神島すべての都市機能を掌握する五基のスーパーコンピュータの現身だ。

世界最高水準の演算能力を誇るが、そのぶんクセが強く、扱いづらいと評判が悪い。しかし浅葱とはなぜか気が合った。

その人工知能が、わざわざ効率の悪い音声通話で連絡してきたということは、この通信には、バリバリに厳重な暗号変換がかけられているということである。

そんな浅葱の推測を裏付けるように、モグワイが告げる。

『すまんがこっちも余裕がなくてな。緊急事態だ。クラスⅢの特区防衛態勢が発動されてる』

「は？　なにそれ？　大規模テロでも起きてんの!?」

浅葱が唖然として訊き返す。なにかトラブルが起きたことは予想していたが、クラスⅢといえば、都市機能に深刻な障害が発生し、多数の人命にリスクがあることを示している。紘神市の都うのは想定外だ。七段階ある〝魔族特区〟の三番目。

浅葱が管理公社のバイトを始めて以来、クラスⅢが発動されたのはたった一度。ロタリンギアの殲教師によって、キーストーンゲートが襲撃されたときだけだ。

あのときは特区警備隊（アイアンドガード）の機動隊員に、百人以上の負傷者が出た。それと同程度の危機が、現在、紘神島に迫っているということになる。

『まあともかくそんなわけで、管理公社から緊急でバイトの依頼だとさ。ロクに事情も説明しないまま、モグワイが一方的に頼んでくる。そのことが逆に問題の深刻

さを象徴していた。天才ハッカーなどと呼ばれていても、一介のバイト学生に過ぎない身分の浅葱には、少々荷が重すぎる状況だ。とはいえ、見て見ぬふりをすることもできそうにない。

「はあ……わかったわよ。今から行くから待ってなさい。なんなのよ、もう」

弱々しい口調でそう伝えて、浅葱は通話を切り上げる。どうやら彼女たちの知らないところで、なにか致命的な事態が粛々と動き出しているらしかった。

3

地上十二階でエレベーターを乗り換え、そのさらに上にある展望塔へと向かう。エレベーターの扉が開くと、そこには空中に浮かぶ全面ガラス張りの広間だった。絃神島のド真ん中。キーストーンゲート最上部の展望ホール――そこは掛け値なしに島内でもっとも高い場所である。

「うわ、絶景だね！」

ガラス張りの床の上に物怖じせずに飛び出して、凪沙が甲高い歓声を上げる。

ドーナツ型の広間は、直径十メートルほど。壁や床の大部分がガラス張りということもあり、ここから絃神市内のほぼ全域が見渡せる。床全体がゆっくり回転しているので、立っているだけで二六〇度すべての風景が堪能できるというのが、ここの売りだ。

「展望ホール、初めて来たよ。前から上ってたんだよね。思ってたより全然高いね。

わっ、記念メダルの自販機！　キーホルダーも！」

「高ェ……エレベーターにちょっと乗るだけでこの値段はさすがにぼったくりじゃねーか？」

子どものようにはしゃぐ妹とは対照的に、全員分の人場料金を払わされた古城の表情は暗い。

いくら島内でいちばん高い場所とはいえ、ビルの屋根に上るだけでお一人様千円という観光地価格は、高校生の財布には痛かった。しかしホール内は予想以上に混んでいる。やはりここも紘神島見物の定番スポットなのだ。

「少し恐いですね。なんだか宙に浮いてるみたいで」

怖ず怖ずと強度を確かめながら、床の上に足を踏み出す雪菜。ガラス部分を慎重に避けて、金属製の柱の上を歩いている姿が微笑ましい。

「そういや姫柊って飛行機とか苦手だったっけ」

手すりから決して手を離そうとしない彼女に気づいて、古城が言う。

機械系全般を不得手とする雪菜にとって、飛行機というのは、空を飛ぶ得体の知れない鉄の塊、という印象らしい。回転式展望ホールに対する感想も、たぶん似たようなものなのだろう。

しかし監視役の誇りにかけて、自分が怯えていることを古城には知られたくないらしく、

「違います。こんなに大勢の人が乗ったらガラスの強度が不安というだけではないですから。違いますから」

「はいはい」
雪菜の強がり
迷ったあと、
「あ、ありがと
二人で日を
小学生の引率
肘で脇腹をつつ
「すごく綺麗な
「は？」」
ニヤニヤ笑い
「言っただろ、
「そのわりには
「あ、ああ……
吸血鬼として
い言い訳を口に
「ふうん。たま、ね」」

ございます」」
城の手を取った。壁際にいた夏
せて、備えつけの双眼鏡を覗き
教師になった気分で、古城が彼
かれる。
子だね。古城の彼女かい？」」
を浮かべる優麻を怪訝顔で見返して、古城は、違う違う、と
あれは凪沙のクラスメイトだって」
ずいぶん仲がよさそうだったけど」
同じマンションに住んでるからな。たまたま、偶然」
彼女に常に監視されているのだと真実を伝えるわけにもいかず、占城は苦し
する。優麻はそれを疑うでもなく、ただ意味ありげに苦笑しただけだ。

「なんだよ？」
「いや。古城は相変わらずだな、と思って」
「そうでもねーよ」
優麻の何気ない言葉に、運命の皮肉を感じて、古城は自嘲するように息を吐く。
彼女と会うのはほぼ四年ぶり。その間には結構な波乱があった。凪沙が事故に遭って生死の狭間を彷徨い、両親が離婚し、古城自身も第四真祖などという馬鹿げた体質を手に入れた。
それでもこうして懐かしい友人に再会できたのは、奇跡的な幸運なのかもしれないと思う。
「ユウマのほうこそ、変わってなくて安心したよ」
感慨深い口調で古城が言うと、今度は優麻が落胆したように肩を落とした。
「……傷つくなー。これでもだいぶ女らしくなったつもりでいたのに」
ぼそぼそと聞き取れない声で呟く優麻を、古城は不思議そうに見返して、
「え？」
「なんでもないよ。それより、すごい景色だね。これが古城の住んでる街か」
子どものように窓ガラスに額をくっつけて、優麻が言う。
眼下に見えるのはビルがぎっしりと密集した絃神市街。その向こう側には真っ青な海面が、水平線まで続いている。古城も初めて目にする、人工島ならではの独特の光景だ。
「こうして見ると、小さな島だよな」

眩い海面の照り返しに目を細めながら、古城が呟く。

優麻は、髪をふわりとなびかせて首を振り、

「でも面白いよ。島全体がテーマパークみたいだ。本当に〝魔族特区〟なんだね」

「普段はもっと地味だけどな。今はほら、祭りの前だから」

「祭りの前か……本当にそうだね」

優麻は、ぼそりと呟いて微笑した。ちょうど街の上空を巡回する宣伝用の飛行船が、今夜のイベントの告知をしながら通り過ぎていくところだった。いよいよ本格的に祭りが始まろうとしているのだ。

飛行船の船体に描かれた女性アイドルユニットの写真を古城がぼんやりと眺めていると、パーカーのポケットの中で携帯電話が振動を始める。

優麻と離れて電話機を取り出した古城は、液晶に表示された名前を見て眉をひそめた。漠然と嫌な予感がする相手だ。

「……煌坂か。こんな時間に、めずらしいな。今ちょっと取り込み中なんだけど」

古城は顔をしかめながらそう伝える。煌坂紗矢華は、雪菜と同じ獅子王機関の攻魔師だ。古城が彼女に出会ったのは、絃神市で先月発生したあるテロ事件の最中のことだった。

それ以来、なぜか彼女は頻繁に古城に電話をかけてくる。特に用があるというわけでもなく、携帯電話を持っていない雪菜の様子を、古城から訊き出すのが目的らしい。かつて雪菜のルー

ムメイトだった紗矢華は、今でも彼女のことを過保護な姉のように溺愛(できあい)しているのだ。

どうせ今回も雪菜目当てだろう、と適当にあしらうつもりでいた古城だが、電話口から聞こえてきたのは、紗矢華ではない意外な人物の声だった。

『うふふふ、わたくしです』

「え？」

不意を衝(つ)かれた古城が、声を上擦(うわず)らせる。

『紗矢華のアドレス帳の〝お気に入り〟に登録されていたので、ちょっとかけてみました……ラ・フォリアか？　この電話番号だよな？」

あ、なにをやって煌坂の番号だよな？」

『――も、もしもし、暁古城(あかつき)？』

回線の向こう側で電話機を奪い合うような物音がして、ひどく焦った紗矢華の声に変わる。

『勘違いしないで欲しいんだけど、この電話機の〝お気に入り〟は登録した相手がもれなく不幸になる機能がついてるんだからね。それだけだから！』

「地味に嫌な機能だな」

顔をしかめて古城が呟く。呪詛(じゅそ)と暗殺の専門家(エキスパート)である紗矢華がそう言うと、あながち冗談には聞こえない。

「それで、なんの用なんだよ。お姫様は帰国したんじゃなかったのか？」

『その予定だったんだけど、状況が変わったのよ。飛行機に乗れなかったし』

「道にでも迷ったのか？」

古城は呆れたように訊き返す。お姫様――

王女は日本政府が用意した特別機で、今朝来日中だった彼女の護衛を担当していたはずだ。

しかし彼女たちが今も一緒にいるということは、そして紗矢華は、お忍びで早くに帰国する予定だと聞いていた。

あるいは紗矢華がヘマをしたとしか思えないが、またしても王女の気まぐれが発動したか、

『違う……ともかく紗矢華が歯切れの悪い口調で言い返す。

『ありのまま起こったことを話すわよ。私たちは特別機に乗ろうと思ったら、建設中の増設人工島にいたの』

「……すまん。なにを言ってるのかよくわからん」

古城は正直に感想を述べた。紗矢華との会話はしばしば要領を得ないことがあるが、今回は特にひどい。

「増設人工島って、こないだ古代兵器がぶっ壊したあれか？　ほとんど島の反対側だぞ？」

『私たちだって、なにが起きたのかわからなかったんだけど！』

紗矢華が拗ねたような声で叫んでいる。

『とにかくそういう状況だから』

「……それで俺はなにをすればいいんだ？」

今イチ釈然としない気分で古城が訊く。

古城が彼女たちの役に立てるとは思えない。攻魔師である紗矢華はもちろん、呪式銃だの疑似聖剣（ヴェルント・システム）だのを振り回す王女もまた並外れた戦闘力（せんとうりょく）の持ち主だ。並みの魔族や犯罪者が束になっても相手にはならない。古城が駆けつけても護衛どころか、足手まといになるだけだ。

しかし王女の口から出てきたのは、少し意外な人物の名前だった。

『お願いしたいのは、夏音（かのん）のことです』

叶瀬（かなせ）夏音は、アルディギア前国王の娘。法律上はラ・フォリアの叔母（おば）にあたるが、実際には彼女の妹のような存在だ。古城はそのことを思い出す。

「叶瀬なら、今ここにいるけど？」

おっかなびっくりで地上を見下ろしている夏音を眺めて、古城が告げる。

なんですって、と甲高（かんだか）い怒声（どせい）を上げたのは紗矢華だった。

『どうしてあなたと一緒にいるのよ？　まさか今度はその子に手を出すつもりなんじゃ……!?』

「そんなつもりはねーよ！　姫柊（ひめらぎ）も一緒だから安心しろ」

『なにそれ、自慢なの!?　う、うらやましくなんかないからね！』

興奮のあまり支離滅裂なことを言い出した紗矢華から電話機を引ったくって、王女が続ける。

『夏音の護衛のために呼び寄せたアルディギアの騎士たちと連絡がとれません。今回の異変は、彼女とは無関係だと思いますが、気にかけてあげてもらえませんか』

「わかった。叶瀬の面倒を見てればいいんだな」

そういう話ならばと安心させるために、占城は力強い声で答える。

ラ・フォリアは冗談めかした口調で、ふふ、と笑う。

『お願いします。お礼にちょっとだけなら、あの子のアレを吸ってもいいですよ』

『ダメに決まってるじゃないですか！』

悲鳴のような紗矢華の絶叫を残して、電話が切れた。

意味不明な疲労感を覚えながら携帯電話をしまった占城は、いつの間にか隣に立っていた雪菜に気づく。

「今の声、紗矢華さんですか？」

「今の声、紗矢華が訊いてきたんだ。紗矢華が自分ではなく占城に連絡してきたことに対して、なにやらなぜか複雑そうな表情で雪菜が訊いてきた。

しかし古城には、その葛藤の理由はわからない。紗矢華が古城を嫌っているので、心配しているのだろう、という程度に思っている。

よく知っているはずのラ・フォリアと一緒にトラブルに巻きこまれてるらしい。飛行機に乗ろうとしたら、いつの間にかこないだの増設人工島にいた、とかなんとか」

「……どういうことですか？」
「さあ。誰かに襲われてるって感じでもなかった。さしあたり放っておいても問題はないだろう。
異常な状況に置かれているのは間違いないのだろうが、二人の態度にはずいぶん余裕があった。
雪菜も古城と同じ感想を抱いたのか、冷静な態度でうなずいて、
「あの二人なら、よほどのことがない限り大丈夫だと思いますけど」
「ああ。あいつらも、自分たちのことはいいから、叶瀬のことを見張っててくれってさ」
王女からの依頼の内容を聞いて、雪菜はおおかたの事情を察したらしい。窓辺にいる夏音を見つめ、なるほど、と生真面目な表情でうなずく。
「とりあえず叶瀬は、那月ちゃんに引き渡せば安心かな」
「そうですね。昼間はわたしたちもついてますし、夕方、南宮先生のご自宅まで送り届ければ」
「だな」
夏音の護衛方針は、特に話し合うまでもなくあっさりと決定した。優秀な攻魔官である南宮那月の手元よりも安全な場所というのは、この絃神島には存在しないといってもあながち過言ではない。
夏音を連れて那月に合流すれば、古城たちの役目は終わりだ。
その前に一度、那月に連絡しておいたほうがいいか、と古城が再び携帯電話を取り出そうとしたとき、エレベーター付近で軽い騒ぎが起きている気配がした。有名人でも訪れているのか、

人々が誰かに道を譲って、そのまま遠巻きに眺めている感じだ。あちこちからカメラのシャッター音も聞こえてくる。

「なんだ？」

「さあ」

古城と雪菜は、互いに首を傾げながら騒ぎの様子をうかがう。いちおう警戒してみるものの、殺伐とした雰囲気は感じない。が、

「あ、いた！　古城君、ちょっと来て。早く！」

野次馬たちをかきわけるようにして顔を出した凪沙が、なぜか慌てた様子で古城を呼んだ。

その凪沙のうしろから顔を出したのは、あからさまに場違いなメイド服姿の少女だった。藍色の髪に、淡い水色の瞳。人形めいた無機質な美貌。古城たちの存在に気づいた人工生命体の少女が、抑揚の乏しい口調で呟く。

「捜索対象を目視にて確認」

「ア……アスタルテ？」

古城は呆然と彼女の名前を呼んだ。メイド服姿の人工生命体。遠方から〝魔族特区〟の観光に来た人々にとって、これほどわかりやすく象徴的な存在も滅多にないだろう。注目を浴びているのも道理である。

「〝魔族特区〟のメイドはこんな感じなのかい、古城？」

当然、事情を知らない優麻も、驚いた顔で古城に訊いてくる。
「すごいな。まさか人工生命体のメイドと知り合いなんて……」
「いや、その子はべつにメイドが本職ってわけじゃないんだが」
アスタルテの名誉のために古城は釈明した。彼女がそんな服装をしているのは、単に現在の保護者であるところの那月の趣味である。本人もべつに嫌がっているわけではないようだが。
「こんなところでなにやってんだ、アスタルテ。那月ちゃんになにか頼まれたのか？」
無意識に警戒しながら、古城が訊く。あの横暴な担任教師が、古城にまともな手伝いを要求してきたのではないかと思ったのだ。
アスタルテが古城たちの居場所を知っていたことは、特に不思議だとは思わなかった。古城は、とある事情で、古城から生命維持に必要な魔力の供給を受けている。ることで、アスタルテには、古城がいる方角がある程度わかるらしい。そのアスタルテの性質を利用した那月が、彼女に古城への伝令役を押しつけるというのは、実にありそうなことだ。
しかしアスタルテの回答は、思いがけないものだった。
「現状報告。本日午前九時の定時連絡をもって教官との連絡が途絶しました」
「……連絡が途絶？」
「南宮先生が失踪したということですか？」
古城と雪菜が、半信半疑の表情で訊き返す。淡々と首肯するアスタルテ。

「肯定。発信器、及び呪符の反応も消失」

「マジか……」

古城の胸の奥にじわじわと不安が広がっていく。

南宮那月が失踪したといわれても、あまりに現実感が伴わない。今さら家出という年齢でもないだろうし、あれだけ好き勝手に暮らしているような者がそういるとは思えない。古城や雪菜はもちろん、あの戦闘狂のディミトリエ・ヴァトラーですら、まともに那月と戦って勝てるかどうか――

だが、もし本当に那月が失踪したのなら、そんな彼女の身になにかが起きるレベルの脅威が動揺を隠しきれない、ということでもある。

「このような場合の対応手順を、事前に教官から伝えられています」

紘神島に存在しない古城たちに、アスタルテが事務的な口調で告げた。

「対応手順？」

「叶瀬夏音を優先保護対象に設定せよ、とのことです」

「そ、そうか……」

やはり那月も後見人として夏音のことは気にかけていたらしい。

「……って、那月ちゃんは自分がいなくなる前から知ってたのか？」

「不明。データ不足により回答不能」
「……だよな。すまん」
アスタルテの心情を察して、古城は謝る。
安に思っているのはアスタルテも同じなのだ。アスタルテは無言で古城を
瞳が、かすかに揺れているように見えたのは気のせいか。
「なんか……嫌な感じだな」
苦いものを噛んだような表情で、古城は独りごちた。
紗矢華とラ・フォリアが体験した異変。そして、那月の失踪。矢瀬はともかく、浅葱が急に
人工島管理公社に呼び出されたのも気にかかる。
古城たちが知らないところで、なにか空恐ろしいことが起きているような予感がある。
せめてもの救いは、誰かが具体的に危険な目に遭ったわけではない、ということだが。
「同感です」
そう言って雪菜も真面目に悩み始める。
そんな深刻な表情の古城たちを、優麻が、きょとんと不思議そうに見つめていた。

4

島内を軽く一周して、古城たちが自宅に戻ってきたのは日没前のことだった。前夜祭のイベントはパスして、今夜は早めに休むことにしたのだ。失踪した那月のことも気がかりだったし、なんといっても波朧院フェスタは明日から本番である。

「残念だね。雪菜ちゃんたちも一緒に晩ご飯食べればよかったのに」

キッチンでガツとキャベツを切りながら、凪沙が少し寂しそうに唇を尖らせている。

協議の結果、今夜の夏音とアスタルテは、雪菜の部屋に泊まることになっていた。

一撃離脱を得意とする剣巫の戦術の特性上、護衛任務はあまり得意ではないという雪菜だが、それでも彼女がずば抜けた戦闘力を持っているのは間違いない。アスタルテの援護があれば、よっぽどの強敵が相手でも、夏音を守りきるのはそれほど難しくないだろう。

明日には、アルディギア本国から派遣された増援の騎士たちが到着するのではないかと淡い期待を抱く古城たちである。

前に那月がひょっこり戻ってくるのではないかと淡い期待を抱く古城たちである。

「俺たちに気を遣ってくれたんだろ。大勢だと、ユウマとゆっくり話ができないしな」

リビングのソファに寝そべってテレビの波朧院フェスタ特番を眺めながら、古城は必死に言い訳した。重度の魔族恐怖症の凪沙も、人工生命体であるアスタルテのことは、それほど気に

していないらしい。前にアスタルテが自分のことを、命がけでテロリストからいれたことも覚えているのだろう。

しかし那月が失踪し、夏音が何者かに狙われる可能性がある以上、部外者である凪沙と優麻は、なるべく引き離しておいたほうがいい。もっとも引き離しておくといっても、雪菜の自宅は古城たちのマンションの隣の部屋だったりするのだが。

「そっか。ユウちゃんも疲れたよね。長旅で。あちこち連れ回しちゃってごめんね」

古城の言葉に納得したのか、凪沙がエプロンを翻して振り返る。

「いや、愉しかったよ。凪沙ちゃんや占城の友達にも会えてよかった」

ソファの上で脚を組みながら、優麻は爽やかに微笑んだ。凪沙は少し得意げに胸を反らし、

「いちおうボクもいるんだけどユウちゃんは誰が好みだった？」

まるで当然のように凪沙に訊かれて、さすがに優麻が苦笑する。

「でも、そうだよね。姫柊さんだっけ。彼女はちょっと気になるかな」

「雪菜ちゃん、可愛いよね。たまにちょっとズレてるけどそこがまた」

うんうん、と腕を組んで同意する凪沙。優麻は一瞬、遠くを見るような表情を浮かべ、

「……それに古城からときどき彼女と同じ匂いがする」

「え!?　なにそれどういう意味？」

凪沙が包丁を握りしめて、古城を睨んだ。同じ匂い、という優麻の発言を、解釈したらしい。もちろん身に覚えのない古城は絶句するしかない。満員電車で雪菜と密着していた直後なら残り香が移っていたかもしれないが、それは昨日の朝のことだ。

「いや、ほら、たまに彼女と二人でこそこそ内緒話をしてたから。仲がいいんだな、と思って」

優麻が慌てて説明を補足する。ああ、と凪沙が包丁を下ろして活き活きと微笑み、

「それは凪沙も前から気になってたんだよね。うん、じゃあ今夜は二人で古城君にそのあたりのことをきっちり問い詰めよう！」

「いいね。わざわざ紘神島まで来た甲斐があった」

妙に乗り気でうなずく優麻。勘弁してくれ、と古城は目元を覆って天井を仰ぐ。

「古城君ってば、晩ご飯の準備、手伝わないのならお風呂入っちゃってよ。もうあたし、ユウちゃんとあとで一緒に入る約束したから」

「わかったー」

面倒だからシャワーで済ますか、などと思いつつ、着替えを持って脱衣所に向かう。

邪魔者を追い払うような口調で凪沙に言われて、古城は気怠そうにベッドから起き上がった。

近所で謎の異変が起きているのに、のんびり風呂に入ってる場合ではない、という気もするのだが、表向きただの高校生に過ぎない古城にはできることがない。今はなにもできることがない。那月なら特区警備隊あたりから情報を引き出すこともできるのだろうが、肝心の彼女が失踪しているの

ではお手上げだ。

せっかく遊びに来てくれた優麻には悪いが、明日になっても状況が変わらなければ、祭りの案内は中止して那月を捜しに行ったほうがいいかもしれない。

そんなことを考えながら、古城はもそもそと服を脱ぎ、バスルームの扉を開ける。

真っ白な湯気の漂うバスルームの扉を――

「って……え？」

目の前で繰り広げられている光景を理解できずに、古城は思わず硬直した。

風呂の中には先客がいた。

頬をほんのりと赤く上気させた人工生命体の少女が、ほっそりとした裸身を浴槽のお湯の中に浮かべている。そして洗い場のシャワーの前では、銀髪の少女がシャンプーを泡立てているところだった。

浴室に入ってきた古城の気配に気づいて、少女たちは一斉に振り返る。

「お兄さん……ですか？」

「第四真祖の侵入を確認」

「叶瀬……とアスタルテ？　なんで……!?」

古城はわけがわからず周囲を見回す。あまりにも異常な状況すぎて、驚くこともできない。

風呂場の構造は、古城の自宅とほぼ同じ。ただし浴槽や蛇口の位置が鏡対称になっていた。

同じマンションの隣（となり）同士の部屋などによくある設計だ。棚に置かれているシャンプーやボディソープは古城（こじょう）の知らないブランドだった。しかし雪菜（ゆきな）の髪と同じ匂（にお）いがする。

これらの情報を総合すると、ここは雪菜の部屋の浴室と考えてほぼ間違いないだろう。それならば夏音（かのん）やアスタルテが入浴しているのも納得だ。

つまり古城は、自宅でシャワーを浴びようとして、うっかりお隣の雪菜の部屋の風呂場に入りこんでしまったらしい。そんな馬鹿（ばか）な、と古城は思う。そんな馬鹿な。

「すみません。先にお風呂をいただいてます」

シャンプー中だったにもかかわらず、礼儀正しく頭を下げて夏音がそう言う。泡まみれの姿でも、透きとおるような彼女の肌の白さはよくわかる。

「あ、ああ……ごゆっくり」

古城も冷静な口調で答える。無表情に見つめているアスタルテの視線が痛い。

そのまま回れ右して浴室を出ると、古城は後ろ手で扉を閉めた。

その瞬間（しゅんかん）、もの凄い勢いで噴き出した冷や汗が古城の全身を濡（ぬ）らした。

「……なんだ、今のは!?　どうなってんだよ!?」

もう一度周囲を見回すが、そこにあるのは見慣れた暁（あかつき）家の脱衣所だ。洗面台の棚にもちゃんと古城の歯ブラシが置かれている。

念のため脱衣所の外にも出てみるが、やはりそこは古城たちの部屋で、キッチンには夕飯の

支度をしている凪沙と、それを手伝う優麻の姿があった。

なにもかもいつもと同じ部屋。違うところがあるとすれば、凪沙たちの表情だ。

「古城君……なに、やってるの？」

「え？」

その……ちょっと、困るかな。まだ夕方だし。それに心の準備が……」

「え!?　あ……！」

耳まで顔を真っ赤にしながら顔面を引き攣らせている凪沙と、掌で目元を覆って苦笑する優麻。そんな彼女たちの反応で、古城は自分がなにも身につけていなかったことを思い出す。

中学生の妹と、四年ぶりに再会した幼なじみの少女の前に、奇声とともに素っ裸で飛び出してきた高校生男子。それが今の古城の姿だ。限りなく変態に近い――というよりも変態だ。

「う、うわあああああああああ！」

古城は絶叫しながら脱衣所へと戻っていく。

その背後では凪沙の悲鳴と、彼女が投げつけた皿の割れる音が鳴り響いていた。

5

その時間、藍羽浅葱はまだキーストーンゲートの中にいた。人工島の底部にある地下十二階。

人工島管理公社の保安部である。

ジェット旅客機の操縦席を思わせる半球状のキーボードやトラックボールなどの原始的な人力デバイスが、パイプオルガンの鍵盤のように何層にも積み重なって並んでいる。まるで機械に埋もれているような、不気味な圧迫感のある部屋だが、浅葱にとっては自宅も同然の快適な場所だ。

正面のモニタフルに色分けされた市街地の二次元映像と、傍目には意味不明な数字の羅列。浅葱が実行したテストプログラムの解析結果である。

夜食がわりのゼリー飲料をすすりながらそれらを眺めていた浅葱は、人工知能との通話用にしてきたIDが割りこんできたことに気づいて苦い顔をする。

『おおっ――！　誰かと思えば、モグワイ殿のご主人ではござらぬか！』

勝手に流れ出してきた通話音声は、電子的に合成された野太い男の声だった。

浅葱とも交流のあるフリーランスのプログラマーで、やはり彼も人工島管理公社に招かれた頭の悪そうな喋り方とは裏腹に、侵入者の撃退を得意とする凄腕の迎撃屋である。いわば公社が雇った用心棒ということか。

「うわ、でやがったよ、また暑苦しいヤツが――」と浅葱は思わず本音をダダ洩らす。

しかし相手はそれを気にした様子もなく豪放に笑った。

『ハッハッハ、〝女帝〟を駆り出すとは人工島管理公社も追い詰められているようでござるな。いや、これは愉快』

「――あんたも呼び出されてたの、〝戦車乗り〟？」

『然り。此度の騒動、なかなかに愉快。よもや貴殿も、この混乱の原因が、単なるウィルスやGPSの誤作動などとは信じておるまい？』

「まあね」浅葱は素直に彼の言い分を認めた。自分と同格のハッカーを相手に、今さら隠し事をしても意味がない。「でもさ、なんなのかしらね、これ。本当に」

『うむ。道路標識に対する苦情、カーナビの誤作動、着陸誘導装置の不具合、迷子の問い合わせは数知れず。人工島内のネットワークになんらかの障害が起きてるのは間違いあるまいな』

思いのほか真面目な口調で〝戦車乗り〟が呟く。さすがに彼の情報は正確だ。

人工島管理公社は、絃神島の隅々まで精細な情報ネットワークを張り巡らせて、島内の生態環境を維持している。水や電力の供給などはもちろんだが、地味に重要な業務が交通ネットワークの制御だった。

ただでさえ土地が狭くて人口が密集し、しかも食料など生活物資のほとんどを外からの輸入に頼る人工島において、流通網の混乱は、即座に島民の生活に悪影響を及ぼす。

だからこそ人工島管理公社は、モノレールの運行や道路情報、さらには歩道の道路標識まで、ありとあらゆる情報を管理することで、円滑な交通網を維持しようと努力しているのだ。

だが、半日ほど前から、その情報ネットワークに多数の障害が発生していた。
道路標識やカーナビの案内は、目的地とまったく違う方角を指し示し、自動操縦装置に誘導された飛行機は島の位置を見失い、商業施設の中では迷子が続出する。
原因不明の大規模ネットワーク障害である。
『祭りで企業の多くが休業していたのは不幸中の幸いでござったな。さもなくば、本日の経済損失は十億や二十億で収まったかどうか』
「……そうね。観光客が多かったから自覚がなかっただけで、実際に道に迷った人数はもっと多かったのかもしれないわね」
『うむ』
浅葱の同意を得た〝戦車乗り〟が、力強い声で言う。
『しかし、ここで貴殿と会えたのは僥倖でござった。正直言って拙者、人の手には余っていたところでござる。〝魔族特区〟の防壁を突破しての電脳攻撃、いかなる手口とお考えか？』
「そうねえ」
シートの背もたれにだらしなく身体を埋めながら、浅葱は気怠い声を出した。
「本当に電脳攻撃なのかしらね、これってさ」
ぬう、と〝戦車乗り〟が低く唸る。
『これは異なことを。現に島内のあらゆる回線や位置情報システムが、異様な数値を示してい

るではござらんか』

「だけど、それのセンサーや中継器に異常は発見されなかった。ウィル浅葱はそう言って、モニタに映し出された解析映像を次々に切り替えた。そこに描かれたすべてのデータは、人工島管理公社のネットワークが現在いる、という事実を示している。

「だったらさ、こうは考えられない？　ネットワークに障害は発生していないのは、この街のほうだ、って言うのでござるか……？』

示されている数値はすべて正しい。いかれているのは、この街のほうだ、って言うのでござるか……？』

『紘神島周辺の空間に異常が発生している、と言うのでござるか……？』

〝戦車乗り〟が沈黙する。同時多発した大規模障害で、プログラム本体のバグや外部からの電脳攻撃を疑うのは当然だ。だからこそ人工島管理公社も、迎撃屋である〝戦車乗り〟を呼んだのだろう。しかし彼の能力をもってしても、侵入者の痕跡は発見できなかった。

だが、もしも障害が発生しているのが、情報ネットワークではなく、現実の空間のほうだったとしたら――

正常に作動しているネットワークと現実が喰い違うのは、むしろ当然のことではないのか？

「あり得ないこと、じゃないでしょ、ここは〝魔族特区〟なんだからさ」

皮肉めいた浅葱の言葉を聞いて、〝戦車乗り〟は呵々と笑い出した。

『さもありなん。されど空間制御の術式は高難度魔術の分類でござろう。完全に使いこなせる

のは練達者級の高位魔法使いか、大魔女か。ましてや人工島全体に影響を及ぼすほどの術式となると、人の手に負えるとは思えんでござる』

「……そこまでして空間を歪めて、なんのメリットがあるんだかわからないしね」

浅葱が不愉快そうに唇を尖らせる。自分の仮説に浅葱が確信を持てずにいたのも、そのことが引っかかっていたからだ。〝戦車乗り〟も同じく苦悶するような声を出し、

『然り。紘神市の経済にダメージを与えるだけなら、爆弾のひとつでも仕掛けたほうが手っ取り早いでござるゆえ』

『いや……待ちな、嬢ちゃん』

会話に割りこんできたのはモグワイだった。

『空間異常ってことなら、十年前にも似たような現象が起きた記録が、特区警備隊の凍結書庫に残されてるはずだぜ。重要機密扱いだがな』

「十年前に凍結された記録って……」

補助人工知能の助言に従って、浅葱は凍結書庫の中身を漁る。もちろん無理やり侵入しての不法アクセスだ。正規の閲覧許可をもらうよりもそのほうが早い。

『なんと闇誓書事件……！　〝背記の魔女〟でござるか!?』

同じように書庫に侵入した〝戦車乗り〟が、胴間声でうめいた。十年前に〝魔族特区〟を震撼させた闇誓書事件。当時まだ小学生になったばかりの浅葱でも、あの騒ぎのことは覚えている。

「ねえ、モグワイ……」

『おう？』

「ここ最近、紘神島への侵入が疑われている犯罪組織の心当たりってない？」

浅葱が、静かな声で相棒に問いかける。モグワイの返事は速かった。

『……そういやLCOの構成員が、防壁をぶち抜いて入ってきたとかで、特区警備隊の連中が追っかけてるはずだが？』

『図書館』とはまた厄介な』

興奮したような口調で、〝戦車乗り〟が言った。ライブラリ・オブ・クリミナル・オーガニゼーション。通称LCO、または〝図書館〟――それは世界的に名を知られた犯罪組織の名だ。

十年前の闇誓書事件でも、彼らは中心的な役割を果たしたといわれている。

「そう……そういうことだったのね」

最悪の予想が的中してしまったことに、さすがの浅葱も焦りを隠せない。

LCO構成員の侵入。おそらくこのふたつが無関係ということはないだろう。

そして明日は、波朧院フェスタ開催日。島外から大量の観光客が訪れて、紘神島全域で起きるキュリティがもっとも脆くなる期間である。

「モグワイ、〝魔族特区〟のセ人工島管理公社に連絡して。たぶん明日は、とても、ひどいことになるわ」

彼女のその言葉は現実になる。予想よりも、もっとひどい形で。

「事情がよく呑みこめないのですが……」

冷たい板張りの床の上で、占城は深々と上座していた。暁家と同じ間取りだが、ほとんど家具のない殺風景な部屋。雪菜のマンションのリビングである。

ひれ伏す占城を見下ろすように、彼の正面に正座しているのは雪菜。

彼女の隣には、洗い髪の夏音とアスタルテの姿もある。

「叶瀬さんとアスタルテさんのお風呂をのぞいたので、自首しにきた、ということですか？」

妙に平静な声で雪菜に確認されて、占城は慌てて顔を上げた。

「違う！　いや、違わないけど、最大の問題点はそこじゃないだろ！」

夏音たちが入浴中のバスルームに乱入してしまったのは事実だが、それよりももっと重要な論点があるはずだ。一瞬とはいえ、暁家の脱衣所が、隣の姫柊家の風呂場につながってしまったのである。那月の失踪に比べれば些細な問題だが、それでも異変には違いない。

「でも、のぞいたんですよね」

雪菜が占城を見つめたまま訊いてくる。あまりにも静かすぎる彼女の口調になぜか不吉な

プレッシャーを感じて、占城はブルブルと首を振り、

「ア、アスタルテは湯船に浸かってたし、はかなり叶瀬はシャンプーの泡とかでほとんどなにも――」

「でも、のぞいたんですよね」

「……すみませんでした」

古城はもう一度額を床にこすりつけた。雪菜が、本当に仕方ない人だ、長い溜息をつく。

一方、謝罪された夏音は、顔を赤くしたまうつむいて、

「お、お粗末様でした」

「いや、お粗末ってことは全然ないけども」

夏音の言葉を、古城は即座に否定する。なにしろ相手は正真正銘の王女だし、その美貌の持ち主なのだ。ほとんど後も夏音は、中等部屈指の美貌の持ち主なのだ。ほとんど後と言わんばかりに彼女の貴重な裸身は、古城の脳裏に鮮烈に焼きつけられているような、雪菜の冷

瞬だけ目にしたと、まるでそれを見透かしたような、雪菜の冷

古城が無意識にその映像を脳内再生していると、

たい視線が突き刺さってきた。

さらに追い打ちをかけるように、アスタルテがいつもの冷淡な口調で、

「謝罪を認承。なお第四真祖には、以前にほぼ同様の姿を目撃された記録があります」

「それは俺のせいじゃないだろ！　おまえが勝手に培養槽から出てきただけで……！」

忘れかけていた事実を指摘されて、古城は激しくうろたえる。

たしかに古城は半裸のアスタルテと遭遇したことがあるが、当時の彼女は見習い教師のもとで調整中だった身の上であり、むしろ古城たちの敵だった。

しかしアスタルテの発言を聞いた夏音は、ますます頬を赤らめてうつむき、

「わたしも、お兄さんには前にも見られたことがあるので……これくらい、大丈夫です……」

「それもおまえが天使化してたときの話だろ！　完全に不可抗力だろ！」

古城は必死で身の潔白を訴える。雪菜は見かねたように首を振り、

「とにかく先輩が自宅のお風呂に入ろうとしたら、わたしの部屋のお風呂に出たわけですね」

「あ、ああ……なにを言ってるのかわからないと思うけど」

「いえ、わかりますし」

雪菜が生真面目な口調で反論する。

「叶瀬さんやアスタルテさんが嘘をつくとは思えませんし……のぞき魔の人はともかく」

「のぞき魔言うな！」

「それに紗矢華さんたちが言ってたこともありますし」

「そうか……あいつらも、飛行機に乗ろうとしたら増設人工島に飛ばされたって言ってたな」

当然ともいえる雪菜の指摘に、古城は、それを思い出せずにいた自分を恥じた。

空港から遠く離れた場所に飛ばされた紗矢華たち。そして隣家のバスルームに乱入した古城。

置かれた状況や深刻さはまったく違うが、瞬間で空間を移動したという意味で、ふたつの事

件は共通している。

「絃神島周囲の空間に、なんらかの歪みが生じているのかもしれません」

雪菜が、慎重に言葉を選びながら呟く。古城はハッと息を呑む。

空間制御と、それを応用した瞬間移動。それは〝空隙の魔女〟とも呼ばれる南宮那月が、もっとも得意とする魔術ではなかったか――？

「空間の歪み……？　もしかして那月ちゃんの失踪と関係があったりするのか？」

「わかりません。でも、偶然にしてはタイミングが出来すぎてる気がしますね」

「だな」古城が唇を歪めてうなずく。「那月ちゃんと連絡が取れればいいんだけど、どこを捜せばいいんだかな」

「この状況で、下手に出歩くのも危険ですしね」

かすかな不安を滲ませた口調で、雪菜が言った。

「とりあえず今は様子を見ましょう。先輩はご自宅に戻ってください。凪沙ちゃんや優麻さんが巻きこまれる可能性もありますし、次も無事に戻れるとは限りませんし」

「そうか。それもあったな」

今回、古城が移動させられたのは、たまたま雪菜のマンションのバスルームだった。だが、次もこの程度で済むとは思えない。転移した先が海の底や成層圏だったりしたら、戻ってくることもできずに最悪即死だ。

それを考えれば、先ほどの占城の体験は、凄まじく幸運だったといえるだろう。
素っ裸で繁華街のド真ん中に放り出されるようなこともなかったし、転移アスタルテだった。
知り合いの夏音（かのん）と無意識に彼女たちの入浴姿を思い出しながら、古城はもう一度自分の幸運を噛（か）みしめる。と、
「先輩……」
そんな古城を、雪菜がまたしても恐ろしい無表情で睨（にら）んでいた。
古城は動物的な本能に従って、再び深々と土下座する。
「本当にすみませんでした……」

7

帰宅した古城を待っていたのは、入浴中の凪沙と優麻だった。
と言っても、古城が玄関ドアをくぐった途端（とたん）、無理やり浴室に転送させられたわけではない。
ただ単に、バスルームにいる凪沙たちの騒々（そうぞう）しい話し声が、古城のいるリビングにまで響いてくるというだけのことである。彼氏の有無や、好きな異性のタイプなどという定番のガールズトーク、さらには聞かせられない生々しい噂話（うわさばなし）など、古城の知らないめくるめく禁断の会話が繰り広げられている。

好奇心を覚えないわけではなかったが、さかと言って、聞こえてるぞ、と警告することもできず、悶々とした気分を飲みかけのペットボトルを持ってベランダに出た。

凪沙たちの不用心な会話も、さすがに部屋の外までは聞こえてこない。ぐったりとベランダの手すりにもたれながら、古城はぬるくなったスポーツドリンクを喉に流しこむ。そして、ふと目にした光景に血相を変えた。

「……え!?」

ペットボトルを持つ手が震えた。古城が見ていたのは、道路を渡った先にある高台の公園だ。直線距離で一キロ近くは離れているだろうか。古城に吸血鬼の視力がなければ、それに気づくことはなかっただろう。今が日没後で、服装をしていなければ、そしてそこにいる人物がそんなにも目立つどうして、あいつが……!?

「うそ……だろ。」

古城は靴を履くのももどかしく部屋を飛び出し、マンションの階段を駆け下りた。敷地のフェンスを乗り越え、道路を突っ切り、最短距離で高台へと向かう。こんなときに、空を飛んだりできない吸血鬼らしからぬ自分の身が呪わしい。

そして古城は息を切らせて、目的の公園へと辿り着いた。

その男は、変わらず高台に立っていた。夜の市街地を冷ややかに睥睨し、うっすらと殺意の

波動すら漂わせている。

「――ルードルフ・オイスタッハ！」

古城は男の名前を呼んだ。金髪を軍人のように短く刈りこんだ外国人だ。

ような金属製の片眼鏡を嵌めている。

百九十センチを超える長身を聖職者のような法衣に身を包み、その下には

んでいる。軍の重装歩兵部隊が使用する装甲強化服である。

そんな特徴的な男の姿を見間違うはずもなかった。

二カ月前に古城たちと死闘を演じ、絃神島を崩壊させる寸前までいった

教師、ルードルフ・オイスタッハ。アスタルテのかつての所有者だ。

「どうしてあんたがここにいるんだ!?　ロタリンギアに戻ったんじゃなかったのか――!?」

古城の声に気づいて、オイスタッハがゆっくりと振り返る。

感情の揺らぎと無縁な醒めた眼差しで古城を眺め、それでも彼の口調は穏やかだった。

「私の俗名を知っている者に出会うとは……何者ですか？」

「とぼけてんじゃねえよ！」

古城が激昂して叫ぶ。

「絃神島の聖遺物は返還が決まってるんだ。あんたの用事は終わったはずだろ。それともアスタルテを連れ戻しに来たのか？」

「私の目的まで把握しているというのであれば、看過できませんね」

オイスタッハが、法衣の背中から武器を取り出す。見覚えのある金属製の半月斧である。

彼の片眼鏡が、占城を見据えて赤く発光を繰り返す。オイスタッハの視界に、分析した情報を直接投影しているのだ。

「血統不明の吸血鬼……？　ふむ……忌まわしき魔族でありながら、我が聖戦を妨げるということですか。ならば殲教師たる我が、誅殺を躊躇う理由はなし！」

「俺のことを覚えてない……のか!?」

オイスタッハとの会話が、どうしようもなく噛み合わない。そのことに占城は絶望的な想いを抱く。占城は彼が絃神島を憎み、滅ぼそうとする理由を知っている。だが、その戦いは終わったのだ。多くの犠牲を払いながらもギリギリのところで絃神島は崩壊を免れ、オイスタッハは矛を収めて帰国した。

「やめろ、オイスタッハ。俺にはあんたと戦う理由は、もう――」

「沈黙せよ、魔族！」

オイスタッハが咆吼する。強化鎧によって加速された彼の肉体が、占城目がけて半月斧を振り下ろす。よけきれる速度ではなかったが、占城はかろうじてその攻撃をかわした。オイスタッハとは以前に何度も戦り合った仲だ。彼の力は知っている。

「オッサン、やめろって……！」

占城が楯にしたコンクリート製のベンチを、オイスタッハが軽々と粉砕する。相変わらずのデタラメな破壊力だ。古城が素手で戦って倒せるような相手ではない。

このままでは彼を説得する前に、古城があっさり殺されて終わってしまう――

「くそっ、この堅物が！　疾く在れ、獅子の……！」

古城は仕方なく、眷獣を召喚しようとした。

吸血鬼が自らの〝血〟の中に棲まわせているという、異界からの召喚獣。それは実体化した巨大な魔力の塊であり、吸血鬼が最強の魔族として恐れられている理由でもある。

実体化するだけで宿主の寿命を根こそぎ吸い尽くすという眷獣を使役できるのは、無限の負の生命力を持つ吸血鬼だけ。だが、それだけに眷獣の破壊力は圧倒的だ。

ましてやそれが、世界最強の吸血鬼〝第四真祖〟の眷獣ともなれば、天災にも匹敵する大破壊を引き起こす。いかにロタリンギアの殲教師といえども、それに抗うすべはない。

だがしかし、それでもオイスタッハの攻撃は止まらない――

「――遅い！」

古城が眷獣を召喚するよりも、オイスタッハの戦斧のほうが速かった。迫り来る巨大な刃を呆然と眺めて、古城は死を覚悟する。

いくら世界最強の吸血鬼の力を与えられても、古城自身は戦闘の素人。やはりロタリンギア

の殲教師は、雪菜の助力もなしに倒せる相手ではなかったのだ。

絶望する古城を、しかし戦斧の衝撃が襲うことはなかった。

「……オッサン……？」

地面にみっともなくへたりこんだままの姿で、古城は呆然と公園を見渡す。

そこに大柄な殲教師の姿はなかった。彼が振り下ろしたはずの半月斧も消えている。

夜の公園にほかに人影はなく、頼りない街灯の光が古城だけを照らす。

幻聴のように聞こえてくるのは、どこか遠くで鳴っている波朧院フェスタ前夜祭の花火の音。

破壊されたベンチの残骸だけを残して、オイスタッハは跡形もなく消滅していたのだった。

疲れた身体を引きずるようにして、古城はマンションに戻ってくる。

今でもなにが起きたのかわからない。悪い夢でも見ていたような気分だ。

オイスタッハとの遭遇は、本来なら雪菜に伝えておくべき情報だった。しかし古城は悩んだ末に、しばらくそれを伏せておこうと決断する。雪菜の部屋に、アスタルテがいるからだ。あの殲教師が実在したという証拠がない今はまだ、彼女に無駄な心配をかけたくはない。

「お帰り、古城」

部屋では、優麻(ゆうま)が一人で古城を待っていた。
いる。時計を見るとすでに深夜零時(れいじ)に近い。
公園をうろつき回っていたせいだ。
「悪い。遅くなった……あれ？」
靴を脱いでリビングに戻ってきた古城は、妹の姿を探して部屋を見回す。
「凪沙(なぎさ)ちゃんなら、もう寝たよ。はしゃぎ疲れちゃったみたいだ」
「……小学生か、あいつは」
凪沙の部屋の電気が消えていることを確認して、古城はやれやれと溜息をついた。
リビングには見慣れない服が散乱している。ヴィクトリア調のドレスや海賊風、バニーガールにネコ耳、天使、吸血鬼、そしてお化けカボチャ風――
「なんだ、この服？」
「試着だよ」
仮装するのが困惑する古城を面白そうに見上げて、優麻が言う。「波朧院フェスタの見物客は、ならわしなんだろ？」
「コスプレ衣装か……凪沙のやつ、いつの間にこんなものを用意したんだか」
古城は半ば呆れながら呟(つぶや)いた。
もともとイベント好きな妹ではあるが、去年はここまで盛り上がってなかったはずだ。優麻が遊びに来るというイベントで、今年は気合いを入れて準備したのだろう。

よく見れば、用意された衣装の半分は男物だ。外出していてよかった、撫で下ろす。もしマンションに残っていたら、
「ユウマはなにを着ることにしたんだ？」
少し気になって古城は訊いてみる。今の優麻が着ているのは、色気のないパジャマ代わりのスウェット上下だ。優麻らしいといえば優麻らしいが、そんな彼女が、いったいどんな衣装を選んだのか、単純に興味があった。
「よかったら見てくれる？　着替えるけど」
優麻がそう言って立ち上がる。おう、と古城は気軽に返事をして、
「悪いな、わざわざ」
「いいよ。そんなに時間はかからないから」
優麻はそう言って、スウェットのズボンに手をかけた。そして古城の目の前で突然、それを脱ぎ落とす。惜しげもなく露になった白い太腿に、古城の視線は吸い寄せられて、
「ユ、ユウマ……!?　着替えるって……え!?　ここで!?」
「今さらだなあ。昔はこれくらい普通だっただろ」
悪戯っぽく笑いながら、優麻はスウェットの胸元のファスナーに手をかけた。そして古城の反応をうかがうように、ゆっくりとそれを下ろしていく。
「昔って、それはガキのころの話だろ!?　今のおまえは――」

「今のボクは、なにかな……？」
クス、と小さく噴き出しながら、優麻は
逸らそうとして、その直前に気づく。彼女
「ユウマ……それって……」
「ああ、魔女のコスプレだよ。驚かそうと思って下に着ておいたんだ。本当はこれにタイツを穿くんだけどね」
いまだに動揺している古城を見上げて、優麻が得意げに種明かしをした。
彼女が着ているのは、胸元をリボンで編み上げた、スカート丈の短い黒のドレス。その上に網タイツを合わせれば、たしかに魔女に見えそうだ。
ご角帽子をかぶったりボクがこんな服を着ると思うけど……」
「変かな。やっぱり
古城の沈黙を気にしているのか、優麻がためらしく不安げな表情で訊いてくる。
「いや、似合ってるのは」
視線をうろうろと彷徨わせながら、古城は答えた。
圧倒的に短いスカートと大きく開いた肩口。そしてぴったりと浮き出た身体のライン。似合うかどうか、ということならば、スタイルのいい優麻にはよく似合っている。だがそれ以上に露出が多すぎる。深夜に二人きりでいるとはいけない恰好という気がする。
「そっか。よかった」

挙動不審に陥った古城の様子を眺めて、優麻はなぜか嬉しそうに呟いた。

そして彼女は、唐突に古城の目の前に顔を寄せてくる。

「古城」

「え？」

「血が出てる。ほっぺたのとこ」

優麻が自分の頬に手を当てる。彼女につられて、古城も自分の顔を撫でた……ベンチの破片で切ったかな。

「うお、本当だ……」

思いがけずべったり血のついた指先を見て、古城は唖然とする。オイスタッハとの戦いでできた傷口が、今の興奮で開いたのかもしれない。

「待ってて。絆創膏あるから」

そう言って優麻は、脱ぎ捨てたスウェットのポケットから携帯用の救急キットを取り出した。

彼女に手招きされて、古城はその正面に座る。

至近距離で見つめ合う形になる。

「なんか、昔を思い出すな。こういうの」

緊張をまぎらわすために古城が軽口を叩く。

「古城はよく怪我してたね。おかげで救急キットを持ち歩くクセがついたよ」

「いつもおまえの無茶につき合わされてたせいじゃねーかよ」

「そうだっけ？」
とぼけたように言いながら、優麻が古城の頬に手を伸ばした。
やばいな、と古城は内心焦る。ただでさえ露出の多い服装に加えて、胸の谷間を、意識せずにはいられない。そんな古城の焦りを見透かしたように彼女は笑い、
「顔が赤いよ、古城」
「おまえが近すぎるからだろ」
かすれた声でそう言って、古城は顔を背ける。優麻が優しく目を細めた。
「よかった」
「なにがだよ？」
「古城の態度が昔のまんますぎて、ボクのことは女の子として見てくれないのかと思ってた。けっこう頑張ってみたんだけどな」
思いがけない優麻の告白に、古城は意外な気持ちになる。
「それは普通に驚いたけど。昔のおまえだったら絶対そんな服着なかったもんな」
「うーん、そういうことじゃないんだけど」
優麻が残念そうに笑って肩を落とした。古城には彼女の落胆の理由がわからない。
「だっておまえはおまえだしな」仕方なく考えていたことをそのまま口にする。「それにユウマは昔から可愛かっただろ」

優麻は一瞬言葉をなくし、大きく目を見開いて古城を見た。

「相変わらずだなあ、古城は」

彼女が浮かべていたのは、ひどく寂しそうな表情だ。

「じゃあ、たとえば、もしボクが人間でなくなったとしても、そんなふうな」

「人間離れした知り合いは大勢いるから心配するな。今さら多少のことじゃ驚かねーよ」

冗談めかした優麻の言葉に、古城はきっぱり断言する。

特務機関の見習い攻魔師、それに人工生命体と、元天使。今このマンションの隣室だけでもそんな連中が集まっているのだ。そしてなによりも古城自身、第四真祖などと呼ばれる化け物に変わってしまった。それ以上の変化が優麻の身に起きるとは思えない。

「そっか……ここは〝魔族特区〟だったね」

満足そうに呟いた優麻が、古城を抱きしめるように手を回す。

「よくわかったよ。やっぱりボクには古城しかいない」

「……ユウマ？」

頬に伝わってくる柔らかな感触に、古城は絶句する。優麻が古城の傷口を舐めたのだ。第四真祖と呼ばれる吸血鬼の血を。

そして彼女は、そのまま古城の唇に、自分の唇を重ねてくる。

「え……!?」

優麻の背後の空間が、ゆらり、と波紋のように揺れた。深い湖の底からその波紋の向こう側から、なにかがゆっくりと顔を出す。

禍々しくも蒼い巨大な影が――

「さあ、お祭りの始まりだよ、古城」

優麻の声が、古城の耳元で優しく響く。

その甘い響きに誘われるように、古城の意識がゆっくりと薄れて闇に落ちていく。

深い深い闇の底へと。

第二章 仮装の日

Fancy Dress Parade

1

深い森の奥にある小さな城に、少女は独りで住んでいた。
そこは完全な部屋。数え切れないほどの上質な衣服。彼女の体調は完璧に管理され、精密なカリキュラムによる学習が義務づけられている。その城では、少女が見る夢すらも管理されているように感じられた。
少女は両親の顔を知らない。生まれた直後に母親から引き離され、組織から派遣された侍女たちの手によって育てられた。そのことを寂しいと感じたことはなかった。少女にとって母親というのはそんな存在だ。少女が十六歳になったとき、今は遠い場所にいる母親と会えるのだと聞かされても、なんの感情もわかなかった。
少女は決められた時間に起き、決められた手順で身支度を調え、決められた順路で学校へと通った。親しい友人はいなかったし、それが必要とも思わなかった。学校とは人々を欺く手段を学ぶ場所だと教えられていた。そこでも少女は完璧な演技をした。同級生は彼女たちに好意を抱き、教師たちは彼女を手のかからない優等生と認識していた。
そして少女は決められた時間に森の中の城へと戻ってくる。なにひとつ狂いのない完全な毎日。計画通りに作られた日々——

その計画に小さな綻びが生まれたのは、夏が始まる直前の、ある日の午後のことだった。

少女の住む森の中に、幼い兄妹が遊びに来るようになったのだ。

彼らは、完全とはほど遠い存在だった。

日焼けした肌。ぼさぼさの髪。膝小僧には擦り傷が絶えず、兄の前歯は抜けている。些細なことで彼らは喧嘩を始め、泣き喚き、そして人手をつないで誰よりも愉しそうに笑った。

彼らの笑顔は、狂いなく制御されていたはずの少女の心を、なぜか強く揺さぶった。

森の中に、幼い兄妹は秘密基地を作っていたらしい。打ち捨てられた段ボールや、拾い集めた木の枝で作ったみすぼらしい小屋だ。組織に管理された私有地には、本来存在してはならないはずのものだった。

兄妹の遊ぶ姿を、遠くから見ていたかったからだ。しかし少女は、それを管理人である侍女たちには報告しなかった。幼い兄妹への憧やがて少女は、美しく手入れされていた長い髪をばっさりと切った。それから出た好意だと気づいたのは、ずいぶんあとになってからのことだった。

それから間もなく、少女は彼らと言葉を交わす。

森の外で、たまたま近くを通りかかった彼女を、兄妹の兄が一方的に呼び止めたのだ。

「悪い、オマエ！　手ェ、握っててくれ。離すなよ！」

「え……？」

困惑する少女の手を勝手に強く握りしめると、少年はそのまま崖下へと身を乗り出した。少女はわけがわからないまま、必死に彼の身体を支える。そうしなければ、になって転落してしまう可能性があったからだ。たいした高さの崖ではないが、尖った木々の枝が張り出している。無傷というわけにはいかないだろう。

やがて少年は崖っぷちから這い上がってきた。彼の手が、風に飛ばされて落ちた小さな帽子をつかんでいる。

「ほら、凪沙」

少年は帽子の汚れをはたいて、涙目の妹の頭にすっぽりとかぶせた。妹、少女はじんわりとした達成感を覚える。その光景に逆らって手に入れた、たひとつのものだった。べる。

「サンキュ、助かった。おまえ、意外に力あるな。えーっと……」

少年が、前歯の欠けた笑顔で明るく話しかけてくる。その表情につられて、少女の口元にも無意識に笑みがこぼれる。

「――優麻だよ。仙都木優麻」

「よろしくな、ユウマ」

つないだままの手に伝わってくる温もりを、しかし、今は少女は今も忘れていない。その温もりが少女を裏切り、彼女の心を苛み続ける。

完全な計画は、完全なまま実行される。少女の願いとは無関係に。

2

古城はベッドの上で目を覚ました。見慣れたいつもの自分の部屋だ。時刻は午前八時を過ぎたあたり。寝坊気味だが、普段よりも目覚めが爽やかに感じられるのは、祭りの朝という高揚感のせいだろうか。

「朝……か」

仰向けに寝転がったまま、古城はぼんやりと呟いた。

昨夜はずいぶんいろんなことがあった気がする。空間の歪みとやらに巻き込まれ、ロタリンギアの殲教師と再会し、そして優麻に押し倒された――ような気がした。

しかしそのあたりの記憶は妙に曖昧だ。ルードルフ・オイスタッハは幻し、古城とも会話が噛み合っていなかった。そして優麻の様子もおかしかった。

不気味な影が出現する幻も見た。それらが現実に起きたこととは思えない。むしろ夢の中の出来事だと考えたほうが素直に納得できる。

「なんか……変な夢ばっかり見ちまったな」

自分自身にそう言い聞かせて、古城はベッドから立ち上がった。

不意に違和感を覚えたのは、身体が妙に軽く感じるせいだろう。吸血鬼以来、慢性的につきまとっていた早朝の気怠さや疲労感が消えている。めずらしく気分のいい朝だった。

「凪沙ー……まだ寝てるのか？」

静まりかえった部屋を奇妙に思いつつ、古城はリビングに出る。しかしたらない。念のために妹の部屋をノックしてみるが、返事は帰ってこなかった。バスルームの照明も消えている。ダイニングテーブルには、一人ぶんの朝食だけが用意されていた。

「あいつら二人だけで出かけたのか……？」

古城は特に焦りもせずに呟いた。散歩に出かけたのかもしれないし、隣の雪菜の部屋に遊びにいった可能性もある。それほど気にする必要はないだろう。

せっかく用意してくれたのだから、朝飯でも食べて待っていよう、と古城は椅子に座ろうとして、そのとき初めて決定的な違和感に気づく。

すらりと細い古城の脚が、短いスカートの裾から伸びていた。

「な……？」

女物の服を着ているのだ、と動揺する古城。黒を基調にした編み上げのワンピースは、昨夜、優麻が着ていたもののはずだ。

どうして自分がやがて入れ替わっているのが服装だけではないことに気づく。

目の前に掲げた両手の指が、驚くほど華奢で細い。見下ろした視界を遮っての意外な膨らみ。素足のふくらはぎは赤ん坊の肌のようにつるつるで、日陰形も残っていない。身長も十センチばかり低くなっているような気がする。

「な……」

古城は洗面所に飛び込んで、その前にある鏡を見た。

そこにはショートボブに寝癖をつけた、端整な顔立ちの少女が映っていた。びっくりしたように見開かれた目がでかい。長い睫毛、細い鼻梁。幼いこの中にいたのは仙都木優麻だ。

旧友の顔立ち。鏡古城はパントマイムを繰り返し、彼女の身体が、白分の思いどおりに動くもはや疑う余地はなかった。古城の精神が、優麻の肉体に入ってしまっていた。古城と優麻の身体が、入れ替わっているのだ。

そして古城自身の肉体は、優麻の意識とともにどこかに消えていた。

「なんじゃこりゃあああああ!?」

絶叫する古城の口から洩れたのは、甲高く澄んだ少女の声だった。

マンションの廊下に飛び出した古城は、真っ直ぐに隣の玄関へと向かった。表示は七〇五号室。二カ月ほど前に雪菜が引っ越してきた部屋である。ドアプレートの

て相談できる相手は、彼女以外に思いつかない
「……昨日のあれは、やっぱり夢じゃなかったのかよ!?」
玄関の呼び鈴を押しながら、古城は荒々しく壁に両手を突いた。
優麻の背後に浮かび上がっていた巨大な影の姿を思い出す。騎士のようなはなく、底知れぬ闇色の空洞が広がっていた。
不吉な蒼い影だ。髑髏に似た奇怪な兜の下に顔の身体を入れ替えたのだろうか。
あの蒼い影の力を使って、優麻は、自分と古城
だが、どうして優麻がそんな力を持っているのか、古城にはわからない。
そんなことをしなければならなかったのかということも。
「……おはようございます、優麻さん。なにかあったんですか？」
玄関のドアが半分だけ開いて、その隙間から雪菜が顔を出す。突然一人で
見て、彼女は少し訝しんでいるようだった。その事実に、古城はあらためて
やはり今の古城の姿は、雪菜の目にも優麻と
って、古城だけが錯覚しているという可能性は
「姫柊、悪い。俺だ」
自分の顔を指さしながら、古城は言った。雪菜が不思議そうに目を瞬く。
「あ、はい……？」
「ああ、あのさ、落ち着いて聞いて欲しいんだが」

訪ねてきた優麻を
動揺する。
の暗示や催眠によ

「優麻さん、すみません……その前に中に入ってもらえませんか。ここではちょっと……」

ドアの隙間からそっと手を伸ばして、雪菜が古城を自宅に引き入れる。思いがけずフレンドリーな態度の雪菜を意外に思いながら、古城は玄関ドアをくぐり、

「え？」

そこに立っていた雪菜の服装に、ぎょっと目を見張る。

照れたように言い訳する雪菜が着ていたのは、パジャマの上衣だけだった。

腰のあたりまでではギリギリ裾で隠れているが、太腿の付け根から下は完全に剝き出しになっている。ちょっと動けば下着やらなにやら見えそうだ。そんな状態で古城を招き入れてしまったのは、女同士だと思って油断したせいなのだろう。

「ごめんなさい。こんな恰好だったので、表でお話をするわけにはいかなくて」

よく見れば姫柊家のリビングでは、同じようにパジャマ姿の夏音たちもいる。

「お祭りの仮装をどれにしようか、みんなで選んでいるところだったんですけど、どれもみんな露出が多くて……」

いろいろ用意してくれたんですけど、どれもみんな露出が多くて……」

「そ、そうか……」

どうやら凪沙ちゃんが、雪菜たちの衣装も手配しておいたらしい。

波朧院フェスタへの参加が初めてだという友人に、祭りを満喫してもらおうという配慮だろう。

なにかと世話焼きな凪沙らしい発想だ。

夏音が選んだのは修道女の衣装。襟元や袖口を白いフリルで彩った、清楚かつ可憐なデザインだ。しかしフアスナーに手が届かなかったのか、全開になったままの背中から真っ白な素肌がのぞいていてエロティックさだ。

必死の努力で、そのギャップがものすごく夏音の存在感がありすぎて、逆に視界に入らなかったのだ。

く。あまりにも古城は、部屋にいたもう一人の少女の存在に気づ

それはいうなれば、巨大なてるてる坊主のようなシルエットをしていた

ばかでかいカボチャお化けのかぶりものに、オレンジ色のケープコート

タイツ姿の少女。可愛らしいといえば可愛らしいが、迂闊に近づくと子ども

可愛らしさである。

「おまえ……アスタルテか？」

怖ず怖ずと古城が問いかけると、カボチャお化けが、うなずく代わりに

光させた。

「肯定。この服装は気に入りました」

「そうか。まあ、たしかに似合うっちゃ似合うが……」

「優麻さんは魔女でした？　可愛いです」

軽く腰が引けている古城を見つめて、夏音がおっとりと汎いてくる。

その言葉で、古城は今の自分の姿を思い出す。胸元編み上げのミニスカワンピース。優麻が

昨夜着ていたまの魔女コスプレである。
「いや……違うんだ。なにから説明すればいいんだ。凪沙もだ！」
「はい？」
古城に肩をつかまれた雪菜が、ぽかんと目を大きくする。優麻本人に自分のことだか理解できないのだろう。その気持ちはよくわかる。
「だから俺は優麻だけど、中身は優麻じゃないんだよ！」
アスタルテと夏音も、突然の優麻の奇行を、不思議そうな表情で見つめている。
「……もしかして……暁先輩ですか？」
古城の態度や話し方から、ピンと来るものがあったのだろう。雪菜が胡乱げに目を細めながら訊いてくる。
「姫柊！」
さすがに巫女だけあって勘が鋭い。
古城は思わず感極まって雪菜の手を握る。どんなに姿が変わっても自分の存在を認めてくれるのは、やはり圧倒的に心強いまだに半信半疑の表情で、しかし雪菜はいまだかった。
「え、本当に？」
「信じられないだろうけどマジなんだよ。そうだ……！　俺の正体が第四真祖で、おまえが俺

を監視に来た獅子王機関の剣巫ってことも、ちゃんとわかってるぞ」

夏音たちに聞こえないように、雪菜の耳元に小声で囁く古城。

「……それくらいのことは調べればわかりますよね。先輩から聞き出した可能性もありますし」

しかし雪菜は慎重な態度で呟いた。古城と優麻が、口裏を合わせて自分をからかっているのではないかと疑っているのだろう。

「そうだ……この子の名前、覚えてますか？」

雪菜が不意に自分のギターケースを指さしていった。ケースの取っ手の部分には、小さな人形が結びつけられていた。招き猫風のマスコットだ。

「たしか……マネキネこん、だっけか？　俺がゲーセンで獲ったやつだろ」

古城は自信たっぷりの口調でいう。その事実を知っているのは、たまたまその場に居合わせた那月を除けば、古城と雪菜だけ。古城が本人であるという証明には十分だろう。

「ネコマたんです」

しかし雪菜は、激しくムッとしたように唇を尖らせる。ご機嫌を損ねた彼女を見て焦る古城。

そこで夏音が遠慮がちに手を挙げてくる。

「あの、私がお兄さんと初めて会った場所は屋上だろ。たしかサッカー部の高清水に拾て猫を渡すとか渡さないとかで」

「中等部の校舎の屋上？」

救われたような気分で意気揚々と答える古城。あのときのことは印象的だったのでよく覚え

ていた。これも当事者でなければ答えられない質問だ。

続けてカボチャお化け状態のアスタルテが訊いてくる。

「質問。教官の好きな紅茶の産地について回答を求めます」

「那月ちゃんの趣味か……たしかセイロンのキャンディとか言ってたっけな……」

つけるとかなんとか……」

担任教師に関するマニアックな質問にも、古城はすらすらと返事をする。

月は極端に不機嫌になるので、生徒指導室常習犯の古城にとって彼女の嗜好は死活問題なのだ。

「ピンポン」

無表情に正解であることを告げるアスタルテに頬を膨らませる。

菜が拗ねたように頬を膨らませる。

とはいえ、この一連のやりとりで、雪菜たちも古城の主張が事実だと認めたらしい。

「もしかして本当に本物の先輩なんですか？」

「だからそう言ってるじゃねーかよ」

「優麻さんの身体の中に、先輩の精神が入ってる、ということですか……？」

体は今どこに？」

雪菜が眉を寄せながら訊いてきた。古城は弱々しく首を振る。

「わからないんだ。普通に考えたら俺の身体の中には優麻が入ってるはずなんだが、あいつ、

どこにも見あたらなくて」

「自発的に出て行った……ということでしょうか。でも、わたしの式神たちの監視に気づかれずに、そんなことができるなんて……」

雪菜がさらに表情を険しくした。彼女の深刻な表情を見て、古城も問題の大きさに気づく。

暁古城の身体は第四真祖の――すなわち世界最強と呼ばれる吸血鬼の肉体だ。それが優麻に奪われて、どこにいるのかわからなくなっている。もしかしたら戦略兵器が強奪されたのと同じレベルの非常事態なのかもしれない。

「いったいどうしてそんなことに？」

「それもわからない。昨日の夜、オイスタッハのオッサンに遭って、殺されるかと思ったら、オッサンは消えてて、部屋に戻ったらもう寝てて、優麻がこの恰好で俺を待ってて……そうだ、あいつにキスされたところで意識が消えたんだ」

「……優麻さんとキスをしたんですか？」

古城の説明を聞き咎めて、雪菜が半眼になる。

冷え冷えとした彼女の声に、古城は無意識に後ずさった。

「いやいや！　問題にするのはそこじゃないだろ！」

ほかにも重要な情報があったはずなのに、なぜ真っ先にそこに反応するのか。

「だいたい今は優麻が俺の身体なわけだし、あの瞬間に身体が入れ替わったのなら、あれは

ノーカウントってことで……」

「そうでした……今の優麻さんの中身は先程……」

雪菜がなにかを大変なことに気づいたようにうめいて、頬が見る間に赤く染まっていく。女同士だと油断して、パジャマの上衣の裾を押さえた。その前にさらしていた、という事実にようやく気づいたらしい。実は雪菜の部屋には、脱ぎたてとおぼしきパジャマのズボンや洗濯中の下着などが出しっぱなしになっているのだが、とてもそれを指摘できる状況ではなかった。

夏音の背中のファスナーを、カボチャお化け状態のアスタルテが無言で締めていく。

三人の少女たちの非難の視線が、一斉に古城へと降り注いだ。古城は必死で首を振り、

「いやいやいや、これは部屋に案内した姫柊のほうにも問題があるだろ……！」

今は女同士なわけだし、特に問題は……ないかと……」

「問答無用です……！」

それにほら、

ゆらり、と燃え上がるような闘気をまとって雪菜が告げる。

無駄に可愛らしい声の古城の悲鳴が、再び朝のマンションに響き渡る

そのころ豪華なダブルベッドの上で、煌坂紗矢華は果然と固まっていた。
窓辺にとまった小型の海鳥が、可愛らしい声で鳴いていた。白いレースカーテンを透かして、明るい朝陽が射しこんでいる。色素の薄い長い髪をシーツの上に散らしたまま、紗矢華はダラダラと冷や汗を流す。
「どうして……こんなことに……」
紗矢華が身につけているのは下着だけだが、そのことは特に問題ではない。服がシワにならないように、寝る前に自分で脱いだのだ。だから彼女が焦っている理由はほかにある。
ベッドに横たわる紗矢華の隣。彼女に寄り添うような姿で、べつの女性が寝息を立てていた。
光り輝くような美しい銀髪の少女。しかも糸まとわぬ全裸である。
「ん」
紗矢華の呟きが聞こえたのか、銀髪の少女が目を覚ました。長い睫毛に縁取られた瞼が開き、水宝玉のような瞳が紗矢華を映す。彼女はどこか悪戯っぽくクスクスと微笑んで、
「おはよう、紗矢華。昨夜のあなたは素敵でしたわ」
「だーっ！」
ブランケットをはねのけて紗矢華は勢いよく起き上がった。寝乱れた髪を乱暴に振り払い、悲鳴じみた声で絶叫する。
「なに言ってるんですか。誤解を招くような発言はやめて欲しいんですけど！」

銀髪の少女――ラ・フォリアは、美しい裸身を隠そうともせずに紗矢華を見上げ、

「あら……日本では同じベッドで朝を迎えた人間に対して、このような挨拶をするのだと侍女たちに教わったのですけれど……違いましたか？」

「違います！　いえ、ある意味、間違ってはないですけど……それはたまたま隣で眠っていた人間に対して使う挨拶ではなくて……ああ、もう！」

頭を抱えてのたうち回る紗矢華。やたらに日本語が達者なこの王女は、天然なのか、わざとやっているのかわからないところが始末に負えない。とりあえずアルディギア王家の人々は、もっと真剣に考えるべきだと思う。

「いったいなにを怒っているのですか、あなたは」

「だからっ、どうして服を着てないんですか、王女!?」

「寝間着の用意がなかったのですから、仕方ないではありませんか」

不思議そうに首を傾げて答えてくるラ・フォリア。シーツを身体に巻きつけただけの彼女の姿に、同性の紗矢華ですら見とれてしまいそうになる。

「ともあれ、無事だったのは幸いでした。朝起きたら見知らぬ場所にいるという状況も覚悟していたのですが」

「……そうですね。あれだけランダムな空間転移を繰り返して、無事だっただけでも幸運かと」

意外にまともな王女の言葉に、紗矢華も真剣な表情でうなずいた。

原因不明の空間の歪みに巻きこまれ、空港から解体作業中の増設人工島へと昨日の朝のことで。それから徒歩で市街地へと戻り、つかまえたタクシーに乗りこもうとしたところで、二人は再び見知らぬ土地に飛ばされたのだった。

王女の護衛の騎士団に連絡し、途中で何度か彼らとの合流にも成功したのだが、そのたびに新たな空間転移に邪魔され、結果的にその試みは失敗に終わった。道路の曲がり角や、建物の入り口、駅の改札や乗り物のドア、空間転移が発生する状況は完全にランダムで、紗矢華たちにも対策の立てようがなかったのだ。

そうこうしているうちに、騎士団や特区警備隊との連絡も途絶えた。どうやら謎の空間異常の影響を受けたらしい。彼らもその現象に巻きこまれてしまったのだ。

やがて陽が暮れて、携帯電話の電池も尽きてきたのが、紗矢華たちが途方に暮れかけたときに転送されたのが、このホテルの一室だった。そしてラ・フォリアの発案で、そのままここに泊まることになったのだ。ラブホテルとしか思えない内装が気にならなかったわけではないが、なぜか王女はこの部屋が妙に気に入ったらしく、紗矢華には拒否することができなくて快適でしたね。部屋の照明がピンク色だったり、お風呂がガラス張りだったりは絶対に違いますから――」

「ベッドも広くて快適でしたね。部屋の照明がピンク色だったり、お風呂がガラス張りだったことには驚きましたが……これが日本独自の温泉文化というやつでしょうか」

「いえ、それは絶対に違いますから――」

紗矢華は、温泉文化の名誉に懸けて、きっぱりと王女の言葉を否定する。

「携帯電話の充電は終わりましたか？」

「あ、はい。ラ・フォリアに訊かれて、紗矢華は充電中だった携帯電話を手に取った。そうでした」

この客室には、携帯電話の充電器が備えつけてあったのだ。そのことも紗矢華が指摘しなかった理由のひとつである。

「王女宛のメールも届いてますね。今ならこちらの位置情報を元に、アルディギアの騎士団や特区警備隊の救援も要請できますけど」

「いえ、おそらくそれは無駄でしょう」

ラ・フォリアが素っ気なく首を振る。

「たとえ合流から脱出できる可能性は絶望的です。わたくしたちのために余分な人員を割いたところで、無事に絃神島から脱出できる可能性は絶望的です。わたくしたちのために余裕はないはずです」

「そうですね。それは、たしかに」

紗矢華も王女の意見に同意した。

一般市民には公表されていないが、空間の歪みは、絃神島のほぼ全域で発生しているらしい。市内の交通にはかなりの影響が出ているという。

死傷者が出るほどの事故は発生していないが

それが表だった問題になっていないのは、人工島管理公社の情報操作と、波瞰院フェスタ目当てで押し寄せた大量の観光客たちで、そもそも最初から交通が混乱しているせいだった。

「それに今回の空間異常は、わたくしたちを直接狙っているわけではなさそうですから」

王女が冷静に分析する。普段の奔放な言動のせいで誤解されがちだが、こうは見えて彼女は凄まじく明晰な知性の持ち主なのだ。

「それにしては、多すぎますね。私たちが空間転移に巻きこまれた回数だけが突出して」

「そのとおりです、紗矢華」

紗矢華の反論を受けて、ラ・フォリアは愉快そうに微笑んだ。

「ですから、こうは考えられませんか。わたくしたちの持つ霊力や魔力が、この現象を引き寄せているのではないか、と」

「強い霊力に反応して空間の歪みが起きている、ということですか」

紗矢華は真顔になって考えこむ。

突飛な印象を受ける王女の仮説だが、たしかにそれならば、紗矢華たちだけが特に強く歪みの影響を受けている事実に説明がつく。

舞威媛であるラ・フォリアは、さらに桁外れに強力な霊媒だ。紗矢華は優れた巫女の素質を持つが、アルディギア王族であるラ・フォリアは、そもそも最初の異変が起きたとき、紗矢華たちの近くにはディ

ミトリエ・ヴァトラーがいた。彼は〝戦王領域〟の貴族。第一真祖に連なる純血の吸血鬼だ。

魔力の強大さについては疑う余地がない。

「この絃神島は、海面を流れる竜脈の上に建造された人工島です。強い魔力に反応して空間の歪みが生じるのも道理でしょう」

王女の呟きを聞きながら、紗矢華は無意識に肩を震わせる。嫌なことを思い出してしまったのだ。

「恐れながら、王女……霊力や魔力の強さに比例して、歪みの影響を強く受けるという仮説が事実だとすると――」

「ええ。わたくしたちよりも、もっと深刻な影響を受けそうな殿方がいますね。いえ、むしろ、今回の異変の一因であるという可能性も――」

あの方の存在がめずらしく物憂げな表情を浮かべて言う。無数の魔族がひしめく絃神島でも、ラ・フォリアの魔力の持ち主が誰か、考えるまでもなく答えは明らかだった。

もっとも強大な――

世界最強の吸血鬼――〝第四真祖〟暁古城だ。

「あ……あの男は……私がちょっと目を離すとすぐこれだから……！」

紗矢華は携帯電話の〝お気に入り〟から、目当ての番号を即座に呼び出して発信する。幸いにも電話はすぐにつながった。

「もしもし、聞こえる!?　暁古城!?」

『煌坂か？　おまえらのほうは無事なのか？』

「……え？」

電話口から聞こえてきた女の声に、紗矢華は言葉を失った。やけになれなれしい口調だが、聞き覚えのない声だった。

「あなた、誰？　暁占城は？」

『あー……えーと、それは……だな……話すと長くなるんだが……』

回線の向こう側で、もごもごと言い淀んでいる気配がある。紗矢華は自分がひどく不機嫌になっていることを自覚していた。どうやら紗矢華の知らないところで、あの男はまた新たな女性がらみのトラブルに巻きこまれているらしい。

『あの、紗矢華さん？　しばらくして電話機から、さっきとは違う少女の声が聞こえてきた。今度は紗矢華が聞き間違えるはずがない。

「雪菜？」

『はい。すみません、先輩は諸々の事情で電話に出ることができないので、わたしが』

「そ、そうなの？　大丈夫!?　あの変態真祖に変なことはされてない？」

「はい？」

懐かしい元ルームメイトの声を聞いて、紗矢華は興奮のあまりわけのわからないことを口走

り始める。雪菜を溺愛するあまりのいつもの暴走だ。

見かねたラ・フォリアが、慣れた手つきで紗矢華の手から携帯電話を引ったくる。

「そちらではなにか変わったことは起きていませんか、雪菜。特に古城の周辺で」

『そ、そうですね。先輩の周囲に限れば、とてつもない異常事態が起きているのではないかと』

雪菜が婉曲な言葉で状況を伝えてくる。どうやら向こうも、かなり混乱しているらしい。それを確認してラ・フォリアは独り笑みを洩らす。

「まあ」

『……どうしてそんなに愉しそうなんですか？』

「いえ、なんでもありません。古城が電話に出られないのも、それが原因なのですね」

『はい。あの、いろいろとややこしいことになってまして』

そう言って雪菜が溜息を洩らす。察するに、なんらかの異変には巻きこまれているが、差し迫った危険があるわけではない、という状況なのだろう。それが確認できれば十分だった。

『ところで、お二人は今どちらに？』

雪菜が心配そうな口調で確認してくる。ラ・フォリアは淡々と事実だけを告げた。

「ホテルです。紗矢華もわたくしの隣で寝ています」

ああああっ、と苦悶の声を上げたのは紗矢華だった。

「違うの、雪菜！　本当に昨夜は王女とはなにもなかったの！」

『……はい？』

「こちらのことは気にしないでください」

電話を奪い返そうとする紗矢華を乱暴に突き放して、ラ・フォリアは続けた。

「今回の異変、どうやら魔力の強い存在ほど大きく影響を受けるようです。わたしや古城と合流できる可能性も高そうですし」

この現象の原因を調べてみます。そのほうがあなたの短い説明だけでラ・フォリアの考えを察したらしい。余計なことは訊き返さずに、凛然と言った。

聡明な剣巫は、そうかお気をつけて』

『わかりました。どうも』

「ええ、あなたがたも」

フォリアが電話を切る。紗矢華はそんな王女の涼やかな横顔を、うう、と呻きながら、恨みがましく見つめている。

「どうやらこれで仮説の裏付けは取れましたね」

頬にかかる銀髪を払って立ち上がり、ラ・フォリアは昨夜脱ぎ捨てた下着を手に取った。優雅な仕草でそれらを順番に身につけていく。

「はい。ですが、この現象の原因を調べるといっても、どうやって？」

紗矢華が気を取り直したような表情で訊く。さすがに獅子王機関の舞威媛。落ちこみながらも、ちゃんと会話の内容は理解していたらしい。

「この現象が発生したタイミング、あなたはどう見ますか、紗矢華？」

「波朧院フェスタ……ですか？」

そう言って紗矢華は窓の外を見る。絃神市の巨大な祭典は、今日からが本番だ。街の華やいだ雰囲気は、建物の中にいてもしっかり伝わってくる。

この祭りの最大の特徴は、島外からの観光客が多く押し寄せてくることだ。絃神島への上陸には厳しい審査があるし、特区警備隊も人員を増員して対応しているが、それでも不法上陸を完全に防げているという保証はない。

「まさか、この異変は、外部からの侵入者……？」

「そう考えるのが妥当でしょう。だとすれば、今回の異変は、何者かが意図的に引き起こしていることになります。そんなことをして、どのような利得があるのかがわかればよいのですが」

王女の問いかけに、紗矢華は黙考する。

無秩序な空間の歪みと、魔力の強さに影響を受けるランダムな空間転移。そんな馬鹿げた魔術を仕掛けてメリットがあるとは思えない。無差別テロを起こすにしても、もっとマシな方法がいくらでもあるはずだ。

しかし、悪ふざけやお遊びで引き起こすには、空間制御の魔術は大がかりすぎる。危険な高難度魔術を使える人間が、意味もなくそんなことをするとは考えにくい。

否――

空間の歪みそのものは無意味でも、その結果として生じる〝なにか〟に意味があるとしたら？

「もしかしたら犯人の目的は空間異常を起こすことではないのかも……」

紗矢華はぼそりと呟いた。美しい髪を梳いていた王女が、ハッとしたように。

「なるほど。空間異常はただの副産物で、本来の目的はなにかほかにあるということですか。それは十分に考えられますね。だとすれば――」

王女は獰猛に瞳を輝かせながら、ベッドサイドに置いたホルスターに手を伸ばした。ホルスターに収められているのは、単発式の黄金の拳銃だ。宝石で出来た弾薬筒を装塡し、その状態を確認する。

「紗矢華、人工島管理公社と、空港で待機している聖環騎士団に連絡を。この異変、思いのほか根が深いかもしれません」

使います。

「お、王女？　いったいなにをするつもりなんです……？」

長い髪をポニーテールにまとめながら、紗矢華も立ち上がる。いつにないラ・フォリアの姿に、不吉な予感を隠せない。

そんな紗矢華を愉しげに見返して、王女は華やかに微笑んだ。

「どうやら今日は騒がしくなりそうです」

4

暁家のリビングは、古城が飛び出したときのままの姿で、ひっそりと静まりかえっていた。

優麻や凪沙が帰ってきた気配はない。もちろん古城自身の肉体も戻ってきてはいなかった。

「――本当に誰もいませんね」

部屋の中を見回して、雪菜が呟く。

今の彼女は、童話の主人公を彷彿とさせる、水色のエプロンドレスを着ていた。頭にも同じ色の大きなリボン。波朧院フェスタの仮装のつもりらしい。

ただし右手に握られているのは、航空機を連想させる銀色の槍だ。獅子王機関の秘奥兵器、〝七式突撃攻魔機槍(ノエル・ヴァルノア)〟である。メルヘンな雰囲気をぶち壊しにする、全金属製の長槍だ。

「ユウマの荷物も消えてるな」

客間の中を確認して、占城は落胆したように息を吐いた。

優麻の旅行鞄や着替え、それに昨日の島内観光のときに買ったおみやげ類は、綺麗さっぱり持ち出されている。彼女がこの部屋に残していったものは、コスプレ用のミニスカ魔女ドレス一式と、彼女自身の肉体だけだ。

それでも雪菜は、優麻の痕跡を探るように無言でその場に立っている。

やがて彼女はなにかの啓示を得たように、深々とうなずいた。
「おおよその事情はわかりました。たぶん優麻さんの背後に見えたという、なにかが、跡形もなく砕け散ってしまうような気がした。
「え？」
確信に満ちた雪菜の声に、占城はなぜか不安を覚えた。その続きを聞くべきではないと、動物的な直感が告げている。彼女の言葉を聞いてしまえば、占城が旧友に対して抱いていた大切なものだと思います」
「ラ・フォリア王女も、たぶんわたしと同じことを考えているはずです。を確認するためのことだ？」
「……どういうこと」
占城は思わず訊き返してしまう。ラ・フォリアは優麻のことを知らないが入れ替わっていることも、まだ知らないはずだった。
王女はただ、紘神島に起きている空間異常と魔力の関係について調べていただけのはず——
「まさか紘神島の空間を歪めているのも、ユウマの仕業なのか？」
「そうですね。あるいみでは。ですが、それは優麻さんの本当の目的じゃない意味では。ですが、それは優麻さんです」
「……目的……か」
自分の掌を見つめて、占城は沈黙する。身体が入れ替わるという異常な状況に惑わされて、そこまで頭が回っていなかった。

優麻の正体が何者であるにせよ、意味もなく自分自身の身体を、他人のものと交換するわけがない。当然、彼女には目的があったのだ。

「ところで、先輩……このお料理を作ったのは、ししゃもと納豆、焼き海苔、白米をまとめて突然、雪菜が話題を変えた。占城を騙さなければならないのは凪沙ちゃんですか？」

「ああ、たぶんいつも凪沙が作ってるやつだから」

ダイニングテーブルの上に置かれているのらも占城はうなずく。

具材としてぶちこんだ巨大オムレツだ。時間がない日の朝食メニューとして、凪沙が編み出したものである。こんな独創的な料理を作る人間が、彼女以外にいるとは思えない。

念のためにオムレツの一部を口に運んでみるが、やはりいつもの味だった。見た目に反して意外にまともな日本の朝食の味わいだ。

「朝ご飯の準備をして出かけた、ということは、優麻さんに無理やり連れていかれたわけではないということですよね」

「そうだな……俺もそう思う」

占城は、少しだけ緊張を解いてうなずいた。

凪沙の失踪は占城にとって、自分の身体が奪われたことと同レベルの大問題だ。それでもパニックにならずに済んでいるのは、この朝食の存在が大きい。彼女は、優麻の件とは無関係に、自分の意思で出かけたのだと思う。

それに優麻が凪沙を傷つけるとは、古城に
「凪沙ちゃんの携帯電話は？」
「駄目だった。何度も試したんだが」
携帯の発信履歴を眺めて、古城は嘆息する
「まさか煌坂たちみたいに、空間の歪みでど
「……いえ、魔力の強い者ほど影響を受けや
が巻きこまれた可能性は低いです」
古城を励ますように雪菜は微笑んだ。
「それに優麻さんは、凪沙ちゃんには手を出
「……どうしてそう言い切れる？」
「凪沙ちゃんは優麻さんの目的とは無関係だ
迷わず即答する雪菜を、古城は少し驚いて
「姫柊にはわかってるのか？　なんなんだ、
「先輩の身体です」
「……か、身体が目的……って……え!?」
古城は意味もなく自分の胸元を両腕で押さ
この状況では当然、まったく嬉しくもなんと
もない。
それに優麻が凪沙を傷つけるとは、古城は今も思えないのだ。
「凪沙ちゃんの携帯電話は？」
「駄目だった。何度も試したんだが」
携帯の発信履歴を眺めて、古城は嘆息する。
「まさか煌坂たちみたいに、空間の歪みでどこかに飛ばされたんじゃないだろうな？」
「……いえ、魔力の強い者ほど影響を受けやすいという王女の仮説が正しければ、凪沙ちゃんが巻きこまれた可能性は低いです」
古城を励ますように雪菜は微笑んだ。
「それに優麻さんは、凪沙ちゃんには手を出さないはずですから」
「……どうしてそう言い切れる？」
「凪沙ちゃんは優麻さんの目的とは無関係だからです」
迷わず即答する雪菜を、古城は少し驚いて見つめた。
「姫柊にはわかってるのか？　なんなんだ、あいつの目的は？」
「先輩の身体です」
「……か、身体が目的……って……え!?」
古城は意味もなく自分の胸元を両腕で押さえた。意外に大きな膨らみの弾力を感じるものの、
この状況では当然、まったく嬉しくもなんともない。

優麻は、なにか淫らな行為をするために古城の身体を奪ったというのだろうか。

それとも女体化した古城に、みだらな行為をするつもりなのか。

「ち、違いますよ！　なにを想像してるんですか！」

青ざめる古城の誤解に気づいて、雪菜が慌てて首を振った。ホントにいいのか。

と責めるような雪菜の目つきに、古城はさすがにムッとして、

「おまえが言い出したんじゃねーかよ！」

「だからそうではなくて、先輩の身体というのは、つまり第四真祖の肉体という意味です！」

……と、古城は今度こそ本気で息を呑む。

ころである。

優麻と最後に会ったのは四年前。古城が、吸血鬼の力などとは無縁の、普通の小学生だったはずがないのだ。

「どうしてあいつがそんなことを……!?」

「それ以外にはあり得ないんです」

雪菜が真剣な表情で答える。

「こう言っては失礼ですけど、優麻さんみたいな可愛らしい人が、わざわざ先輩なんかの身体と入れ替わる理由がほかに考えられますか？」

「……本当に失礼だなおい」

古城は地味に落ちこむが、雪菜の主張の正しさを認めないわけにはいかなかった。

客観的にみても、優麻の肉体スペックはずば抜けて優秀だ。容姿に恵まれ、運動神経も抜群。老若男女問わずモテまくりなのも納得できる。一方、古城に特筆すべき点は特にない。たまま吸血鬼の肉体を手に入れたという以外、なんの変哲もないありふれた男子高校生だ。由はなかった。四年前に別れた旧友なんかよりも、もっといい男はいくらでもいるだろう。なんらかの事情で、優麻が男の身体を必要としていたとしても、あえて古城「だけど吸血鬼の真祖の肉体なんて、そんなに簡単に奪えるものなのか……？」ふと奇妙な引っかかりを覚えて、古城は呟いた。真祖に限らず、吸血鬼という種族は、それ自体が最強の魔族と呼ばれているはずだ。いちおうは不老不死ですらある。奪えるものなら、その力を奪いたいと考えてもおかしくない。しかし古城は、そうやって吸血鬼の力を手に入れた人間の存在を知らない。それどころか、同じ吸血鬼同士ですら、自分より格上の吸血鬼を喰おうとしないはずだ。を取りこまれてしまうといわれていたはずだ。「他人の肉体を乗っ取るだけなら、魔術的にはそれほど難しいことではありません。識を眠らせて、精神感応で遠隔操作すればいいだけですから」真面目な雪菜が、いちいち丁寧に答えてくる。その理屈なら古城にもわかる。他人の離れた場所から操作する——いわゆる〝憑依〟と呼ばれる種類の呪術だ。「魂の入れ替え、つまり互いに相手の肉体に憑依している状態を作り出すことも、理論的に

は不可能ではないと思います。ただ、例外があるんです」

「……例外？」

はい、と雪菜は口にした。

「吸血鬼の肉体をあっさり言い切られてしまうなずいて、意外な言葉だが、占城は唇を歪めた。吸血鬼とはどうして、と古城は疑問に思う。なぜ吸血鬼だけがそんなにも特別なのか、それ以外の人間が操るそのものが、ほぼ確実に無効化されますし、仮に成功したとしても、逆流してきた呪いによって術者自身が吸血鬼の〝血〟に取りこまれます。わかりやすくいえば、自我を喰われて廃人になります。わかりやすくいえば、自我を喰われて廃人に

「は……!?」

あまりにもシンプルで非情な結論に、古城はゾクリと寒気を覚えた。

「だったらユウマは、どうやって俺の身体を奪ったんだ？」

「おそらく彼女は、実際には先輩の身体を奪ったわけではないんです」

雪菜の声が、硬さを増す。

「優麻さんは空間を歪めただけです。空間同士を接続して先輩の五感と自分の五感を入れ替え、

本来なら先輩の肉体に伝えられるはずだった神経パルスを、自分のものでユウマの目に映ったものを自分で見てると錯覚して、いつの身体を操作してるつもりで、あ……ってことか？」

自分の――すなわち優麻の頬に触れながら、古城がうめく。

雪菜は黙ってうなずいた。

「それなら吸血鬼の肉体に直接干渉しているわけではありませんから、呪ん。それでいて、見た目の上では魂を入れ替えたのと同じ効果を得ることが雪菜の説明は難解だったが、わかってしまえば、理屈そのものは単純だった。吸血鬼の身体を魔術的に乗っ取ればいい優麻はその無理やりな発想を、空間を歪めるという荒技によって現実化できないのなら、物理的に乗っ人間には、自分の魂が見えない。自分の中に本当にそんなものが入ってるのか、頭蓋骨をで、実際に確認するすべはない。逆に言えば魂が入ってなくても、それを割ってみたところ意識は、優麻の中に入っているということになる。古城の本来の自分の身体を知覚することができないだけ「電化製品の配線をつなぎ替えたみたいなものか。だけど、それって俺の間、常に空間を制御し続けなければならないって話だろ？　そんなことが無理です、と雪菜が首を振る。

「電化製品の配線をつなぎ替えたみたいなものか。だけど、それって俺の身体を乗っ取ってるのだ。

間、常に空間を制御し続けなければならないって話だろ？　そんなことができるのか？」

無理です、と雪菜が首を振る。

「空間制御は超高等魔術です。たった一カ所の〝門〟を固定するだけでも、膨大な魔力と、高位の魔術師による儀式が必要ですから。ましてや、そうやって無数にある神経同士を一本一本接続するなんて、ただの人間には不可能です」

「なんか……それって矛盾してないか？」

空間制御による神経接続が無理なのに、どうやって優麻は古城の肉体を奪ったというのだ？

「ただの人間には無理だ、って言ったんですよ」

雪菜が、少しだけつらそうな表情を浮かべて告げた。その言葉がなにを意味しているのか、〝魔族特区〟の住人である古城には一瞬で理解できてしまう。

「ユウマが普通の人間じゃない……ってのか？」

「先輩……空間制御の使い手といわれて、思いあたる知り合いはいませんか？」

雪菜の質問に、古城は愕然とする。

常夏の島にあるまじき暑苦しいゴシックドレスを着た、小柄な女教師の姿が脳裏をよぎる。

普通の人間には扱えないはずの空間制御を、まるで呼吸するように乱用する人物。彼女は、とある不吉な肩書きで呼ばれていたはずだ。〝空隙の魔女〟――と。

「まさか、同じ……なのか。那月ちゃんと……？」

雪菜が重々しくうなずいた。

「魔女というのは、悪魔と契約して力を得た女性のことです。叶えられぬ望みを叶えるために、

自らの魂を代価にした人々――」

古城は、昨夜、優麻の背後に浮かび上がった〝顔のない青騎士〟の姿を思い出す。あの不気味な影の正体は、悪魔と呼ばれる存在ではなかったか？

そして雪菜は、その決定的な言葉を口にする。銀色の槍を強く握りしめながら。

「仙都木優麻の正体は魔女です――南宮先生と同じタイプの」

5

矢瀬基樹は、高等部の校舎の屋上で、ドーナツを片手にノートPCを広げていた。昨日から一睡もしていない彼の顔には、さすがに疲労の色が濃い。

およそ二十四時間前から断続的に発生している空間の歪みは、今や絃神市内に様々な混乱を引き起こしている。対症療法的な問題処理と各種の隠蔽工作、原因の究明、そして〝魔族特区〟が抱える潜在的な危機の対策、おまけに波朧院フェスタの開催が重なって、人工島管理公社の内部はほとんど戦時下のような騒ぎだった。

そんな中、密偵である矢瀬は、今回の騒動の黒幕を探るために、単独行動中だったのだ。

『よお、ずいぶん派手なことになってるみてえだな』

ネット上の噂をチェックしていた矢瀬のPC画面に、不細工な縫いぐるみ型の3Dモデルが

割りこんでくる。
「おまえか、モグワイ。浅葱はどうした？」
やたらになれなれしい人工知能に向かって、矢瀬が顔をしかめながらあしらう。
ワイが好きではない。この狡猾な人工知能は、あまりにも高性能すぎて危険な代物なのだ。
浅葱以外の誰にも使いこなせないという厄介で危険な代物なのだ。
その浅葱に身分を隠して密偵活動にいそしむ矢瀬にとっては、いわば取引先の部下に弱みを握られているようなものだった。
そんな矢瀬の気持ちを知ってか知らずか、ケケケッとモグワイが皮肉っぽく笑う。
『さっき寝たところだ。ギガフロート・ネットワークのバックエンドを一晩でスクラッチだらけの可愛い顔で寝てるぜ。写真見るか？』
「要らん。占城の携帯にでも送りつけてやれ」
『ククク……そいつはいいな。ついでに待ち受け画面にも設定しといてやるか』
本当にこいつはいやりかねんな、と思いながら矢瀬は舌打ちする。機械のくせに人間以上に人間臭い人工知能なのだ。
「技術的な話はよくわからんが、とりあえず人工島管理公社のシステムは安定したんだな？」
『空間の歪みが原因の誤作動は、いちおう解消したはずだぜ。ミリ秒単位で地形をスキャンし

直してるから、交通機関の混乱も、信号待ちが長くて苛つく程度の影響で収まってる。歩行者が道に迷うのはどうにもならんが、そっちは迷子センターの増員でまかなうしかねえな」

そうか、と矢瀬は息を吐く。空間の歪みがランダムに発生する、という無茶苦茶な状況下でまともに動く交通管制システムを、浅葱は一晩で構築したらしい。相変わらずの無双っぷりだ。

「空港の機能も回復したのか？」

『おうよ。要請してた国家攻魔官の増援も着いたとさ」

「頼もしい話だ、と言いたいところだが、今回は相手が悪かったな」

『ＬＣＯ第一隊〝哲学（フィロソフィ）〟のメイヤー姉妹か』

「ああ」

画面に表示された資料を眺めて、矢瀬は自嘲気味に笑う。

ＬＣＯは高位の魔導師、そして魔女だけで構成される巨大犯罪組織だった。〝図書館〟という通称はそこから命名されたと言われている。メイヤー姉妹は、そのＬＣＯでも有数の武闘派として知られていた。

実戦経験の少ない本土の攻魔師が、太刀打ちできる相手とは思えない。正面から戦闘になれば、甚大な被害が出るだろう。強力な魔女を相手に、数で対抗するのは愚策だ。同等以上の魔女か魔導師をぶつけるしかないのだ。

『しかし妙だな。空間を歪めるような大がかりな技を使うのは、第七隊〝芸術（アート）〟や第五隊

〝科学〟のやりだと聞いてたんだがな』

モグワイが、のらりくらりと指摘する。矢瀬の目的が〝暮記の魔女〟なら、連中も同盟のひとつやふたつ結んでいるはずである」

『管理公社の執行部も、浅葱嬢ちゃんと同じ意見か。てことは、魔女姉妹が歪みを引き起こしてる理由は――』

「ああ。連中はまだ手こずっているみたいだが」

島全体に広がるアレを探してるんだ。今のところ逆に魔女たちの目的を明確にする無秩序な空間の歪み。それが広がれば、見つかるのも時間の問題だろう。

ることで、そこに隠れているものを探し当てようとしているのだ。このペースで空間の歪みが

空間を歪めることが、彼女たちの目的なのではない。魔女の姉妹は絃神島周辺の空間を歪め

『なるほどな、南宮那月を動かせないのは、それが理由ってわけか、ククッ』

モグワイが世間話のような口調で言った。

「認めたくはないが、おかげで深刻な戦力不足というと、吸血鬼の貴族か、獅子王機関の剣巫クラスだが……」

撃破できる手駒表情で頭をかく。姫柊雪菜ならありとあらゆる結界を切り裂き、魔力を無効化するという彼女の槍は、魔女た

矢瀬が苦悩の

はないだろう。

ちにとっては天敵のようなものだ。
しかし雪菜を引っ張り出すということは、古城が事件に関わるということでもある。それだけは避けなければならなかった。ただでさえ空間が不安定になっているこの状況で第四真祖の眷獣に出てこられたりしたら、それこそ収拾がつかなくなる。
吸血鬼の貴族のほうは論外だ。あの戦闘狂が魔女たちの真の目的に気づいたら、嬉々として連中の手伝いを始めかねない。それは考え得る限りで最悪の想像だった。
『そういや聖環騎士団の近衛部隊が、上陸許可を求めてるらしいぜ』
葛藤する矢瀬を嘲るように、モグワイが語りかけてくる。
「アルディギアのお姫様の護衛か。本土の攻魔官よりは役に立ちそうだな」
うらやましいことだ、と矢瀬は嘆息する。
戦王領域と国境の一部を接するアルディギアの騎士たちは、魔族相手の実戦経験も豊富だ。そして彼らには疑似聖剣という切り札もある。楽勝とはいかないまでも、魔女相手にも十分戦力として計算できるだろう。
『姫さんは、事態の収拾に手を貸してもいいと言ってるそうだぜ。ただし条件つきだがな』
「条件？」
戸惑う矢瀬のPC画面に、ラ・フォリア王女からのメールが転送されてくる。絵文字だらけのふざけた文体に軽い頭痛を覚えながらも、その内容に矢瀬は唖然と目を見張った。

「……あの女、正気か？」

『噂以上のじゃじゃ馬だな。ケケッ、そういうのは嫌いじゃないがな』

モグワイが心底愉しげに笑う。なまじ難解な問題を解決するために作られた人工知能は、他人が困っている姿を面白がっているような印象がある。

実際のところラ・フォリアからの提案は、到底受け入れられるはずがない内容だった。下手すれば、日本と彼女の国との外交問題にもなりかねない。だが、と矢瀬は顎を撫でる。

「ラ・フォリア王女には獅子王機関の舞威媛がお目付役としてくっついてたな。上手くいけば、この異変、案外あっさり片がつくか。ここは乗ってみるのも手だな」

『ケケッ……』

モグワイの笑い声を聞きながら、矢瀬は携帯電話を取り出した。

そう。魔女を相手にするには、同等以上の魔女か魔導師をぶつけるしかない。幸いなことにここは〝魔族特区〟だった。そういう連中の一人や二人、矢瀬にも心当たりはある――

6

魔導書（グリモワール）と呼ばれる書物が存在する。

それらはかつて、呪文（しゅもん）や魔術儀式の手順、霊的存在の制御法などを記録した実川書だった。

だが膨大な知識を集積する過程で、それ自体が強力な魔性を帯びるようになった。やがて読み手に人智を超える力を与え、大いなる災いを呼ぶようになったもの――それが魔導書。

魔導を探求する者ならば、誰もが魔導書を手に入れることを望む。

だが、実際にそれを読みこなし、蓄積された巨大な魔力を制御できる者は少数だ。

これまでに数知れぬ研究者が魔導書の制御に失敗し、破滅した。流出した魔導書が災厄はいくつもの都市を滅ぼし、何万という人々の魂を汚染した。その過程で多くの魔導書が失われた。

その状況を憂いた魔導師たち、そして魔女たちが設立したのがＬＣＯ――〝図書館〟と呼ばれる組織だった。

彼らは世界各地から魔導書をかき集め、その用途に応じて厳密に分類し、封印した。

そして選ばれた研究者だけに、それらを貸し与えることにした。魔導の発展のためではなく、世界の安寧を守るためでもなく、ただ自分たちの好奇と欲望を満たすためだけに――

〝図書館〟とは極めて身勝手で独善的な魔導研究者の集団であり、設立された当初から犯罪組織としての性質を帯びていたのだった。

そんなＬＣＯが所有する魔導書の一冊〝Ｚ－０．５３９〟が解放された場所は、〝魔族特区〟の中心地、キーストーン・ゲート・ビルの頂上部だった。

逆ピラミッド型の巨大な建物の屋上には、
護する結界だ。魔法陣が描かれている。
魔法陣を描く材料として使われていたのは
を警護していた彼らに重傷を負わせ、絞り出
負傷した警備隊員たちは苦痛にうめきながら
ち捨てられている。
「綺麗だとは思わなくて、オクタヴィア？
魔法陣の中央に立っていたのは、メイヤー
彼女が見守る占い洋書が、生け贄である警
放っている。魔導書の動力源とするために、
「さすがですわ、お姉様。意味のないものか
倣っておられるのね」
緋色の魔女――オクタヴィア・メイヤーは
表情を浮かべていた。姉と違って彼女には、
もっとド派手に脳漿や内臓を撒き散らす、
「ねえ、お姉様。塔の上に残っている愚民た
殺してきてもいいかしら、と姉にねだるよ
血塗られた魔法陣を眺めて、どこか蔑むような
死にかけの人間を見て愉しむ趣味はない。
スプラッタな殺戮が好みなのだ。
ちが日障りではありませんこと？」
うな態度で、緋色の魔女は頭上を見上げる。

彼女の視線の先には電波塔を兼ねた鉄塔と、ガラス張りの展望ホールがあった。姉妹が屋上を占拠したために、観光客たちは、ホールに閉じこめられたまま出られない。窓際の魔女が繰り広げられている惨劇を呆然と眺め続けるしかない。

「放っておきなさい、オクタヴィア」

漆黒の魔女が絶望で、私たちの悲願が成就する瞬間を彩ってもらうのも一興よ」

「彼らの恐怖と絶望で、私たちの悲願が成就する瞬間を彩ってもらうのも一興よ」

「……素敵な趣向ですわ、お姉様。いかなる祈りに対しても神が奇跡をもって介入することはない――理神論を試しておられるのね」

緋色の魔女が、不服そうに息を吐きながらそう言った。彼女たちがこのビルの上に陣取って、すでに半日近くが経っている。さすがに退屈してきたのだ。

「空間の軋みが、心地好いわね」

慎重に魔導書をめくりながら、エマが呟いた。

普通の人間の空間には、今や蜘蛛の巣のような無数の亀裂が走っている。

亀裂が強い魔力の持ち主に影響を及ぼすこともあるが、それは単なる副作用に過ぎない。

空間の歪みに巻きこまれた人間がどこかに飛ばされても、あるいはほかの時間軸から誰かを引き寄せたとしても、取るに足らない些末な出来事だ。これから押し寄せる巨大な混沌に比べ

れば、退屈しのぎの余興にもならない。

「ええ、本当に。それにしても凄まじい力ですわね、〝蒼の魔女〟――」

無意識に悔しげな表情を浮かべて、オクタヴィアが呟く。

LCOより借り受けた魔導書〝No.539〟――しかし実のところ、それを制御しているのは、彼女たち姉妹ではなかった。メイヤー姉妹の所属は第一隊〝哲学〟だ。因果律や存在論を操る強力な一派だが、一方で空間制御などの物理的な魔術には疎い。

〝No.539〟の本来の読み手は、LCOが派遣してきたもう一人の魔女だった。

術を極め、〝蒼の魔女〟の称号を与えられた新参者だ。

「当然よ。彼女は、このためにだけに設計された生まれながらの魔女なのですもの。せいぜい利用させてもらいましょう。あれが見つかるまでは」

負け惜しみのように言いながら、エマは笑った。そう。あの小娘は使い捨ての道具。ただの便利な人形だ。追従するように、オクタヴィアも笑みを浮かべる。が、

次の瞬間、姉妹の笑みは凍りついた。自分たちに向けられた、冷酷な殺気に気づいたのだ。

「何者ですか!?」

「せっかくの芸術的な風景を、土足で穢すとは無礼でしょう　！」

柳眉を吊り上げて二人が振り返る。すでに彼女たちに先ほどまでの余裕はない。

鮮血で魔法陣を描いた彼女たちの結界に、堂々と踏みこんできた侵人者がいる。桁外れの凄

まじい魔力の持ち主だ。

魔法陣から瘴気の霧が立ち上り、その霧の中から半透明の触手がずるりと這い出した。

一昨日、特区警備隊の部隊を瞬く間に壊滅させた、アッシュダウンの怪物。メイヤー姉妹の〝守護者〟である。結界に入りこんだ異物に反応して、自動的に迎撃を開始したのだ。無数の触手が侵入者へと殺到し、その肉体を押し潰す。

そう思われた次の瞬間、凄まじい爆風が放たれて〝守護者〟の触手が消し飛んだ。

「なっ!?」

魔女の姉妹が、驚嘆に表情を歪める。

ズタズタの肉片と化した触手が降り注ぐ中、侵入者は、何事もなかったかのように歩き続けながら、彼女たちを冷ややかに睥睨する。

純白のメリービースを着た、金髪碧眼の美しい男だ。不敵に微笑む口元からは、巨大な牙がのぞいている。

「やれやれ、もう少し愉しませてもらえるかと思って泳がせておいたんだが、こんなところに引き籠もって、こそこそ時間稼ぎとはね。〝アッシュダウンの魔女〟も評判倒れだったかな」

「あ……あなたは……っ!?」

「ディ……ディミトリエ・ヴァトラー……!?」

魔女たちが、掠れた声で男の名前を口にする。

欧州〝戦王領域〟の貴族――〝蛇遣い〟ディミトリエ・ヴァトラーの威名は、成員たちにも広く知られている。

彼が〝旧き世代〟の吸血鬼の一人だから、というだけではない。争乱を好み、己の快楽のためになら、同族の吸血鬼すら喰らうという稀代の戦闘狂。彼の存在は、欧州で活動する魔族や魔女にとって、恐怖の代名詞なのだ。

こんな辺境の〝魔族特区〟での〝蛇遣い〟との遭遇――考え得る限りで最悪のイレギュラーだった。退屈した彼の気まぐれで、いつ殺されても不思議はない。

「紘神島周辺で起きている空間異常の原因はそいつか……」

ヴァトラーは、姉妹の存在には目もくれず、稼働中の魔導書〝No.539〟を一瞥する。だが、彼がそれに興味を示したのは、ほんの一瞬のことだった。

「たいした魔力だが、要は遠見の水晶球の応用か。察するに〝魔族特区〟の中に封印された貴重品の類を探してるといったところだね。残念だ……期待外れだヨ」

落胆したように呟いて、ヴァトラーは無造作に肩をすくめた。

彼の右腕から濃密な魔力の波動が迸り、それに干渉された魔導書が機能を停止する。

ヴァトラーに、紘神島を救うという意識はない。ただ足元を飛び回っている目障りなハエを踏みつぶそうとしているだけだ。だがそれは、メイヤー姉妹の計画がここで潰えることを意味していた。それまで恐怖に震えていた緋色の魔女が咆哮した。

「おやめなさい、オクタヴィア！」

エマが妹を制止しようとする。しかし緋色の魔女は、怒声とともに自らの魔導書〝No.193〟――過去に〝アッシュダウンの惨劇〟を引き起こした、〝モナドは窓を持たず、ただ長象するのみ――！」

オクタヴィアの詠唱に反応して、魔法陣から瘴気の霧が噴出した。その姿に変わる。ただし触手の色が前とは違っていた。漆黒と緋色のおぞましい斑模様だ。

魔導書からの魔力の供給を受けて、今や〝守護者〟の触手は特殊な属性を帯びている。〝No.193〟の能力は『予定調和』。いかなる攻撃も〝守護者〟を傷つけることはできず、いかなる防御も〝守護者〟の攻撃を防ぐことはできない。

たとえディミトリエ・ヴァトラーといえども、無敵と化した斑の触手を打ち破るすべはない。

オクタヴィアがそう確信した直後だった。

「〝徳叉迦〟！」

ヴァトラーの冷淡な声が、緋色の魔女の耳を刺す。

次の瞬間、吸血鬼の貴族が撒き散らした凄まじい衝撃に、オクタヴィアは戦慄した。魔導書が紡ぎ出すものとは比較にならないほどの、圧倒的な魔力の奔流。

それはやがて一体の、巨大な蛇の姿を形成する。ディミトリエ・ヴァトラーが従える九体の眷獣のうちの一体。天災にも準じる力を持つという、異界からの召喚獣だった。

全長数十メートルに達する禍々しい緑色の大蛇が、瞳から閃光を放ち、斑の触手を焼き払う。

それは一瞬の出来事だった。魔女姉妹の〝守護者〟は消滅し、鮮血で描かれた魔法陣も焼け落ちる。魔導書〝No.193〟の能力を、ヴァトラーは、膨大な魔力で力任せに突破してみせたのだ。

「なっ……」

エマに背中を支えられながら、オクタヴィアは弱々しくうめいた。悪夢のような光景だった。人間の魔術師が操る使い魔の中でも、魔女の〝守護者〟とはすなわち悪魔の化身であり、並の吸血鬼の眷獣となら、互角以上に戦える。魔導書による援護があれば、〝旧き世代〟の吸血鬼に対抗することもできるといわれている。その〝守護者〟がひとたまりもなく粉砕されたことで、魔女姉妹は完全に戦意を喪失していた。ヴァトラーはそれほどまでの怪物なのだ。

「もう少し足掻いて欲しかったんだけどねェ……まあいいや、バイバイ」

失望したような表情を浮かべて、ヴァトラーは自らの眷獣に攻撃を命じた。

不老不死である吸血鬼の貴族にとって、殺し合いは、自らの生を実感できる数少ない娯楽だった。それゆえにヴァトラーは強敵を好む。単に強い魔力を持った相手であるに必要はない。重要なのは意思の力だ。知謀や策略、ありとあらゆる手段を使って運命に抗う強い意思。それをヴァトラーは高く評価する。

特にあの第四真祖や、彼の周りにいる少女たちは実にいい。獅子王機関の巫女たち、そしてアルディギアの王女――いずれ本気で暁古城と殺し合うことになったとき、彼女たちがどんな手段でヴァトラーを追い詰めようとするのか、想像するだけでも痛快だ。

彼女たちに比べれば、あっさり戦意を喪失した魔女の姉妹など、生かしておく価値もないと思える。それゆえにヴァトラーは、一切の手加減をしなかった。が――

彼の眷獣の攻撃は、魔女姉妹を呑みこむ寸前に弾かれる。

「ほう」

唇の端を上げて、ヴァトラーは愉快そうに呟いた。

魔女の姉妹を庇うように、虚空から出現したのは、黒いスーツを着た少年だったのだ。気怠そうな顔をした高校生だ。

「古城……じゃないな。誰だい、キミ」

眷獣を待機させたまま、ヴァトラーが挑発的な声で問いかけた。

黒いスーツの少年は、暁古城と同じ顔をしている。流れている血の臭いも、古城のものと同じだ。しかし明らかに雰囲気が違う。まるで別人が乗り移っているようだ。

そして彼が使った術は、空間制御。〝空隙の魔女〟と同じ技である。

黒いスーツの少年は、その場に恭しく膝を突いてヴァトラーに一礼した。

「僭越ながら申し上げます、アルデアル公。我が名は仙都木優麻。〝書記の魔女〟仙都木阿夜

の娘にございます」

「〝書記（ノタリア）の魔女〟……LCOの〝総記（ジエネラル）〟の娘か」

へェ、とヴァトラーは微笑する。〝書記（ノタリア）の魔女〟は、犯罪組織LCOを統べる大司書だ。第一隊の構成員に過ぎないメイヤー姉妹などとは格が違う。

しかし彼女は、この紘神島（とかみしま）で逮捕され、今はある場所に収監されているはずだった。

彼女の収監先は紘神島――〝魔族特区（ぞくとっく）〟内の監獄結界である。

「御身（おんみ）の同族、第四真祖（たいよんしんそ）の肉体をお借りしたのは、〝魔族特区〟に隠された監獄結界の在処（ありか）を突き止め、結界内に封印された我が母を解放するため。しばしお目こぼしいただきたく」

「LCOは、監獄結界に収監された囚人たちを解放するために動いてるというのか」

優夢（ゆうま）の言葉を聞いたヴァトラーが、眷獣（けんじゅう）を消す。

彼が浮かべていたのは、歓喜の笑みだった。

監獄結界とは、通常の刑務所では手に負えない、凶悪な魔族や魔導犯罪者を収監するための施設だ。LCOの目的は、そこから大司書である〝書記（ノタリア）の魔女〟を救い出すことだという。

だが、監獄結界が破れれば、その中にいる伝説的な犯罪者たちの多くも同時に解き放たれることになるだろう。魔族特区は、ほぼ確実に戦場と化す。

それは、強敵を求めるヴァトラーにとって、願ってもない状況のはずだ。だから見逃せ、と優夢はヴァトラーに取り引きを持ちかけているのだった。

そんな彼女の不遜な態度もまた、ヴァトラーには小気味いい。

「第四真祖の膨大な魔力と、私が極めた魔女の技があれば、難攻不落の監獄結界を陥落することも可能でありましょう。閣下を退屈させることはありますまい」

優麻は微笑んでそれで顔を上げると、足元に落ちていた魔導書〝No.539〟を手に取った。

本来の持ち主の手に戻った魔導書が、第四真祖の魔力を注ぎこまれて輝きを放つ。

ヴァトラーは獰猛に牙を剝きながら、笑ってその光を眺めていた。

7

そのころ古城たちは、西地区の繁華街のカフェにいた。

時刻は正午をすぎたあたり。お祭りムード一色になった街には、色とりどりの屋台や露店があふれ、道路は仮装した観光客でごった返していた。

イベントステージでは、女装男子によるミスター美少女コンテストが開催されているらしく、その様子がビル壁面の大型液晶で中継されていた。今の自分が出場すれば、ぶっちぎりで優勝できるな、などと古城は自虐的な気分で考える。

「美味しいですね、このカボチャプリン」

「私もさっき食べたところでした。こちらのパンプキンパイもなかなかです」

同じテーブルに座った雪菜と夏音は、大皿に山盛りにしたスイーツをせっせと取り分けていた。四人が注文したのは、九十分間限定のケーキバイキング食べ放題。コースプレ姿の二人が、かつてない勢いで菓子を食べている姿は、それはそれで微笑ましい感じではある。

「おかわりをどうぞ、第四真祖」

「ああ……サンキュ」

アスタルテが運んできたドリンクバーの紅茶を受け取って、古城は物憂げに溜息をつく。

「一緒に菓子の追加はいかがですか、と提案。この店舗の通常価格とケーキバイキングの料金を比較すると、あと三品注文する必要がありますが」

損益分岐点を超えるためには

「そ、そうか。だったら、シフォンケーキとスコーンを……じゃなくて！」

古城は思わずテーブルを叩いて声を荒らげる。雪菜たちが、驚いたようにマイペースに紅茶を飲んでいる。

顔を上げた。アスタルテだけは表情を変えずにマイペースに食事の手を休めている。

「なんで俺たちはこんなところでのんびりケーキバイキングに挑戦してるんだよ!?　ユウマが俺の身体を奪った月的だって、まだわかってないんだろ！」」

「そ、そうでした。でも、ほかのお店はどこも満席で……」」

「補足。この店舗のケーキバイキングは、彩海学園新聞部の調査でも、有効回答者四十二人中、二十七人が満足と答える高評価」

「だからっ、ケーキの味に文句をつけてるわけじゃなくてだな……！」」

優麻の身体に入ったままの姿で、古城は頭を抱えてうめく。雪菜がそんないケーキを差し出して、

「とりあえず、これでも食べて落ち着いてください」

「だーっ！」

古城はやけくそになってケーキを受け取るとそれを一息で口の中に放り込んだ。

こうしている間にも、優麻は、古城の肉体を使った陰謀の準備を進めている。その証拠に、紘神島周辺の空間異常が発生頻度を増していた。すでに一般市民の間でも呪い、などと噂になり始めているらしい。凪沙、波朧院フェスタの行方もわからないままだし、那月からの連絡もない。とてもですけど、とこれ以上落ち着いていられる状況ではなかった。

「優麻さんの行方を探すといっても、なんの手がかりもないですし。それに、下手に移動するのは危険過ぎますから」

雪菜がそんな古城の前に、新しく、と古城は言葉に詰まった。雪菜の指摘もっともなのだ。

人工生命体のアスタルテはともかく、剣巫の雪菜と、アルディギア王家の血を引く夏音は強い霊力の持ち主だ。二人の存在は空間の歪みを引き寄せる。迷宮と化した現在の紘神市内を、迂闊に歩き回るのは危険だった。

事実、夏音は姫柊家の風呂場で、空間の歪みに古城を一度巻きこんでいる。二度目がないと

いう保証はなかった。もちろんあれは古城自身の魔力が原因だった可能性もあるわけだが。

「それに……実は、優麻さんの魔術を今すぐに破る方法もあるんです」

「え？」

雪菜の唐突な告白に、古城は軽く呆気にとられていた。そんな便利な解決法があるのなら、どうして今まで黙っていたのだろう、と困惑する。そして気づく。

雪菜の視線は、隣に立てかけた銀色の槍に注がれていた。

「〝雪霞狼〟か……！」

はい、と雪菜が小さくうなずく。

彼女の槍は魔力を無効化し、あらゆる魔術の術式を無差別に消滅させる。

どんなに強力でも、それが魔術で維持されたものである以上、一撃で破壊するだろう。その結果、古城たちの意識は、それぞれの肉体に戻ることになる。雪菜はそれに気づいていたから、のんびりケーキバイキングに挑戦していられた、ということらしい。

「ですけど、これだけ緻密な空間制御の術式を強制的に無効化すれば、術者には相当な反動があるはずです。接続されている神経に回復不能なダメージを与える可能性も」

「は？」

さらりと恐ろしいことを口にする雪菜を、古城は戦慄しながら見つめ返した。ここにある優麻の身体に〝雪霞狼〟を突き刺せば、優麻は今すぐにでも止められる。ただし、優麻の全身の

神経はズタズタに引き裂かれてしまう、ということか。

たとえ優麻が魔女だったとしても、彼女の肉体は普通の人間と変わらないのだ。それだけのダメージを受ければ、彼女はほぼ確実に死ぬ。たとえ吸血鬼の古城とはいえ、二度と目覚めることはないだろう。

命は助かったとしても、二度と日覚めることはないだろう。

「だ、駄目に決まってるだろ、そんなやり方！」

「はい。できればこの方法は使いたくありません」

激昂する古城を見つめて、雪菜が言う。

「どうしても〝雪霞狼〟を使わなければならないとしたら、優麻さんに体を狙うしかないですね。先輩なら、ちょっとくらい死んでも復活するよな。ていうか、俺の肉体への反動も最小限で済むはずです」

「いや待て。それきに死ぬほど痛い思いをするのかよ!?」

が死ぬのは前提なのかよ!?」

テーブルに頬杖をついて、古城がぼやく。

恐ろしくて想像したくもないが、ほかに方法がないなら仕方がない。

優麻が古城の身体を使って異変を起こすのを待つ。

その異変に気づいたら、直ちに現場に急行する。そして雪菜が古城の全身の神経をズタズタにされた場合の痛みなど、実に行き当たりばったりで頼りない作戦だが、ほかに対策を思いつかないのも事実だった。

槍で突く。

今はケーキでも食べながら、ひたすら待つしかないらしい。

「あの、なんとなくですけど、優麻さんは先輩の身体を手荒に扱ったりしないと思うんです。優麻さんも、先輩のことを信頼しているから、自分の身体を残していったんじゃないかと」

肩を落とす古城を気遣うように、雪菜がぼそぼそと呟いた。

雪菜の不器用な励ましに、古城はそっと苦笑する。

彼女の直感は、おそらく間違っていない、と思う。

「……そうかもな」

優麻がなんのために古城の身体を奪ったのかはわからない。

だがそれでも、優麻に古城を傷つける意思はないはずだ。なんの根拠もない憶測だが、その程度には古城は今も優麻を信じていた。彼女は古城の友人なのだから。

「事情はよくわかりませんけど、お兄さんには、無事にいつものお兄さんに戻って欲しいです」

それまで黙って話を聞いていた夏音が、古城の横顔を見つめて言った。少し照れたように目を伏せて小声で付け加える。

「優麻さんの姿も素敵ですけど、私にとってのお兄さんは、お兄さんですから」

じわじわと温かい気持ちが広がって、古城は思わず涙ぐみそうになる。いくら親友の身体と

はいえ、慣れない他人の肉体に入れられたことで、不安に感じる気持ちはあるのだろうか、と。

古城が元の身体に戻るのを待っていてくれる人がいる。それだけでも救われた気分になる。

「同意」

カボチャお化けのかぶり物で顔を隠して、人工生命体の少女が口を開く。

「アスタルテ……？」

「比較検討した結果、第四真祖がオリジナルの肉体に復帰することを私は主観的に望んでいると判断しました。総合的には不合理な選択ですが」

「そ、そうか……」

「比較検討した結果は優麻の身体のほうが上だが、スペック的にアスタルテ個人は前の古城に戻って欲しいと思っている、という意味だろうか。あまり褒められた感じはしないが、アスタルテにとって、それが精一杯の好意の表現だということは伝わってくる。

なんとなく気分を良くして、古城は隣にいる雪菜を見た。そのあたり彼女はどう思っているのだろうか、と。

「え？　な、なんですか!?」

期待のこもった古城の視線に気づいて、雪菜が少し慌てる。

「わたしはただの監視役ですから……先輩がどんな姿でも任務を果たすだけですけど」

「……だよな」

雪菜らしい優等生的な回答に、古城は苦笑。まあここは、古城の姿が変わっても態度を変えない彼女に感謝するべきところなのだろう。

「お兄さん……それは夏音（かのん）が不意に目つきを鋭くして古城を見た。めずらしく厳しい表情だ。

「お食事中に肘（ひじ）をついたままだった古城が、夏音に叱（しか）られて背筋を伸ばすのも駄目です」

「え？　あ、ああ」

だらしなく頬杖（ほおづえ）を正した。夏音は意外にスパルタなのも駄目です」

「座るときに脚を開くのも駄目です」

「そ、そうか。悪い。夏音の指導に戸惑いながら、古城は言われるままに姿勢を正した。夏音は幼い頃（ころ）から修道院で暮らしていたのだ。躾（しつけ）に厳しいのはそのせいかもしれない。

これまで何気なく見逃していたが、そう言えば夏音も雪菜も姿勢がいい。大変だな、と古城は他人事（ひとごと）のように思う。

見た目に気を遣って大変だな、と古城は他人事のように思う。

そんな自分の考えがまだまだ甘かったと思い知らされたのは、その直後のことだった。

「補足。髪の手入れと身だしなみの確認も必要と助言します」

「おぅ？」

そう言ってアスタルテがコートの下から、魔法（まほう）のように鏡とブラシを取り出してくる。

同時に雪菜があっ、と声を上げて古城の横顔に手を伸ばした。

「まさか日焼け止め、塗ってこなかったんですか。駄目ですよ、こんなにくださいお化粧ポーチでしたら……おまえらなにを……!?」

「え、ちょっ……」

アスタルテと雪菜にがっしりと両腕をつかまれ、連行されていく古城。

いる先は店内のトイレだ。淡いピンク色の壁紙に気づいて、古城は狼狽した。

「ちょっと待て！　これって女子トイレだろ!?」

「仕方ないじゃないですか。優麻さんの姿で男子トイレに入るつもりなんですか？」

「いや、そうだけど、ええっ……!?」

女子トイレの中は、食後の化粧直しに訪れた女性客たちで混み合っている。綺麗なお姉さんたちが怒濤の勢いで口紅やマスカラを塗り直している姿は、正直あまり見るところだった。あまりにも冷徹すぎる彼女たちの印象について、無関係の古城までしかもそのうち何人かは合コン途中の作戦会議タイムらしく、相手の男情報交換していたら、立ち直れなくなってしまいそうだ。

悲しい気持ちになる。このままこの場に留まっていたらどうすればいいんだ？」

「……そういや、この身体でトイレに行きたくなったら、と思って古城は独りごちた。何気に深刻な問題ではないか、

ふと気になって雪菜は、そんな古城を見つけ、

作法など、当然のことだが古城は知らない。そして

「駄目です」
「や、駄目って言われても、生理現象だから、これについては俺の意思ではどうにも」
「絶対に駄目です」
「ええっ……!?」
思いがけず横暴な雪菜の発言に、古城は軽く絶望する。この肉体が尿意をもよおす前に、元の身体に戻らなければならない、ということか。どうやら古城に残されている時間は、そう長くはなさそうだった。
やはり、優麻が問題を起こすのを、のんびり待っている場合ではないのかもしれない。どうせなにか仕掛けてくるなら、早いとこやってくれないだろうか、と古城は身勝手に考える。と、まるでその願いが通じたかのように、ズン、と低い衝撃が人工島の大地を揺さぶった。優麻の肉体に入った今の古城にもはっきりわかるほどの、強烈な魔力の波動だ。
「なんだ、この感覚!?」
「キーストーンゲートの方角です！」
真っ先に反応したのは雪菜だった。銀色の槍を引っつかんで店の外に飛び出す彼女を、古城が慌てて追いかける。
路上にいた人々は、皆、驚いたように目を見開いて上空を見上げていた。
絃神島の中央に位置する、逆ピラミッド型の建物。島内でもっとも高いそのビルの屋上で、

なにかが蠢いている。全長数十メートルにも達する、斑模様の不気味な触手だ。

「姫柊！　あれは――!?」

「悪魔の眷属！　魔女の〝守護者〟です！」

「使い魔みたいなものか……！　だけど、あのゲートから感じる圧迫感は、キーストーンゲートから感じる圧迫感は、巨大な使い魔よりもさらに凄まじい魔力……!?」

あの場所にはある意味、懐かしいとすら感じられる禍々しい波動――

「はい、あれは先輩の――第四真祖の魔力の波動です」

「ユウマか！」

彼女の存在を確信して、古城は走り出そうとする。

でもある。優麻が魔術儀式の舞台としてそこだが、ゲートは〝魔族特区〟の中心地。そして優麻が島に来て、真っ先に訪ねた場所を選ぶのは、むしろ当然のことだと感じられた。

「――!?」

そんな古城の行く手を遮るように、見知らぬ人々が立ちはだかる。

死神のような黒いローブを包んだ男たち。その数は少なく見積もっても十数人。彼らの顔は明らかに、敵意はなく、武器らしい武器を持っているわけでもない。しかし彼らは明らかに、古城がキー

ストーンゲートへと近づくのを阻止しようとしていると感じられた。

「先輩、下がってください！」

槍を構えた雪菜が前に出る。仮装した人々が街にあふれている今なら、人前で〝雪霞狼〟を使っても目立たないと考えたのだろう。

「なんだ、こいつら……!?」

「わかりません。ユウマの仲間かでも、たぶんわたしたちの足止めが目的だと思います」

古城は、自分の……ずっと俺たちを見張ってたんだな」

予想できたことだ。冷静に考えれば、優麻が古城の行動を監視するのは彼女は当然警戒し間抜けさに歯噛みする。冷静に考えれば、優麻が古城の行動を監視するのは

「アスタルテ、叶瀬を頼む！」

「命令受諾」

無防備に立ち尽くしている夏音を守るようにして、古城は人工生命体の少女に指示を出す。アスタルテはうなずいて、自分の眷獣を召喚した。彼女の背中に出現した翼が、左右一対の巨大な腕の姿へと変わる。

それを見た周囲の人々がなぜか、おおっ、と歓声を上げた。次々に拍手が巻き起こる。

「完全に祭りのアトラクションだと思われてるぞ！」

「さ、騒ぎにならないのは好都合ですけど……この人混みでは……！」

古城と雪菜が、途方に暮れたように顔を見合わせる。

いつの間にか路上にいた観光客たちは、半径十メートルほどの距離を開けて、古城たちと黒装束の集団を取り巻いていた。エスタの路上パフォーマンスかなにかだと勘違いされてしまったらしい。あからさまに悪者っぽい集団と、見目麗しいコスプレ少女たちが戦っているのだから、そう思われても仕方がないところだ。

だが、そのせいで古城たちは逃げ場をなくしてしまう。

一対一の戦いなら、雪菜が手こずるようなことはないのだろうが、今は敵の数が多すぎた。

これだけ周囲に人が多くては、強力すぎるアスタルテの眷獣も、本来の能力を発揮できない戦闘力のない夏音や今の古城を庇いながらの戦いは、彼女たちに負担が大きすぎる。しかも、こうして古城たちが足止めされている間に、優麻は魔術儀式を完成させようとしている。

完全な八方ふさがりの状況に、古城は苦悩を噛みしめた。その直後、

「えっ……!?」

ホアァァーッ、という怪鳥のような雄叫びとともに鈍い打撃音が鳴り響き、黒装束の男の一人がものすごい勢いで吹き飛んだ。

唖然として振り返った古城たちが見たのは、赤髪のおだんごヘアに二つ編み、チャイナ服の若い女だった。彼女が繰り出した中段蹴りが、さらにもう一人の黒装束を悶絶させる。

「おー、教え子たち。ようやく会えたな。怪我してたりしないかー？」
彩海学園中等部の体育教師、笹崎岬が、のんきな口調で訊いてくる。
まさかの担任教師の乱入に、雪菜は困惑を隠しきれない様子で、
「笹崎先生！　どうして……!?」
「那月先輩に頼まれたりしてたのよ。自分がいなくなったときに、あんたや暁兄のフォローをしてやってくれって。私が知らないうちに、ずいぶんヤバいことになってたりするの？」
「……はい。かなり」
雪菜が正直にうなずいた。彼女の素直な態度を見て、岬が満足そうにニヤリと笑う。
「了解。叶瀬たちのことはこっちに任せて、先に行きな」
そう言って象形拳などと呼ばれる、獣の動きを象った中国拳法の技法を持つ攻魔官である。
南宮那月の後輩である彼女もまた、国家資格を持つ攻魔官であった。
した、素手で地面を割った、手から気功波のビームを出したなどなど、数々の都市伝説に事欠かない女拳士なのだ。
「笹崎先生、この相手は死体です。どこかに彼らを操っている死霊魔術師がまぎれているはずですが――」
「無問題！　全員ぶっ倒せば済むこと！」

そう言い放つなり、岬は言葉どおりに、片っ端から目についた黒装束をぶっ飛ばし始める。呆れた力押しである。しかし強い。時折飛んでくる魔術攻撃も、気合い一閃で消し飛ばす。黒装束たちの包囲が崩れた隙を衝いて、古城と雪菜は見物客たちの輪を抜け出した。

「笹崎先生、那月ちゃんは……!?」

「無事だよ、今のところはまだね」

古城の最後の質問に、ウィンク混じりに岬が答えてくる。

彼女に深々と頭を下げ、古城は今度こそ振り返らずに走り出した。

「じゃあね。先輩のこと、よろしく、とか言ってみたりして」

教え子たちの姿を見送って、岬は口の中だけで小さく呟く。

そして彼女は、闘志に燃えた眼差しを黒装束たちに向けた。

意思を持たないはずの死体兵が、その闘気に圧倒されたように後ずさる。獰猛な笑みを浮かべた岬の口から、キシャアアーッと再び怪鳥音が漏れ出した。見物客たちの歓声が響き渡る。

祭りはまだ始まったばかりなのだった。

第四章

監獄結界

Hidden Prison

1

少女は、占い城の地下室で生まれた。
子守歌の代わりに聞かされたのは魔術の詠唱
侍女たち。母の腕の温もりの代わりに与えられ
液だけだった。
少女には六歳よりも前の記憶はない。日常生
契約。それが彼女の思い出のすべてだ。
少女は六歳の姿で生まれたのだ。城の地下室
どこにいるの？
――お母様は
人工生命体の侍女に、少女は訊いた。
「監獄結界にいらっしゃいます」
そのたびに侍女たちは、そう答えた。
――監獄結界？　それはなに？
「東京都絃神市、極東の〝魔族特区〟にある監
永劫の流刑地。
出口の存在しない時間の迷宮。
この世界とは異なる空間に封印された、
あの忌々しき〝空隙の魔女〟の裏切りによって、

お母上は暗闇の底に囚われているのです」

生まれたばかりの幼い少女に、侍女たちの言葉は呪いのように降り積もる。

「阿夜様は、その牢獄から脱出するための切り札として、あなたをお産みになられました。青の騎士に守護されし〝蒼の魔女〟よ」

まれながらに悪魔との契約を果たした純血の魔女。自分の母親が、どこか遠くに閉じこめられている少女にはなにもわからない。わかるのは、自分を必要としているということだけだ。

ということ。そしてそこから抜け出すために、

しかし、少女は疑問に思う。

その目的が果たされたとき、自分はどうなってしまうのだろう。囚われの身ではない母親は、自分を必要としてくれるのだろうか――？

「あなたのお身体はいまだ幼く、十全の魔力を振るうためには成長のための長い歳月が必要となりましょう。十六の誕生日を迎えた後、暗闇の季節の始まり、篝火の祭典の日に、あなたは〝魔族特区〟へと赴き、そして監獄結界の封印を破るのです」

侍女たちは、少女の疑問には答えない。ただ繰り返される彼女たちの言葉が、少女の精神に、母親を救うための詳細な手順を刻んでいく。

それもまた母親が彼女に仕掛けた呪いなのだろう。すべては遠大な魔術の一環。脱獄のための道具を生み出す、精密なプログラムの一部なのだ。

「案ずることはありません。我ら〝図書館〟が、あなたの手足となってお支えいたします。す

べてはお母上の御心のままに――」

侍女たちの言葉どおり、少女が十三歳になった日を境に、城には大勢の魔導師たちが訪れるようになった。

彼らは少女にあらゆる知識を伝えた。

わる情報。魔導書の解読手段。そして〝守護者〟の制御法と、魔女の力のLCOと呼ばれる組織のこと。

生まれながらの魔女である彼女の素養は群を抜き、やがて組織の〝司書〟の地位を手に入れた。しかし少女の疑問に答えてくれる者はどこにもいなかった。

――与えられた役目(プログラム)以外で、自分に存在する価値はあるのか？

少女は、自分の背後にたたずむ〝守護者〟にそれを問いかける。

しかし、顔のない騎士からの答えはない。答えはない――

2

祭りで混み合う大通りから外れて、古城(こじょう)と雪菜(ゆきな)は狭い路地裏を走っていた。

絵本から抜け出してきたようなエプロンドレス姿の雪菜はもちろん、優(ゆう)人の組み合わせは、麻(ま)の身体(かいた)に入っている今の占城も、見た目だけならかなりの美形だ。脇目(わきめ)もふらずに疾走するだらけの市内でも、あからさまに目立って人々の注目を集めている。

仮装した観光客

だが、路地裏を抜けて辿り着いた広場には、それ以上に異様な集団の姿があった。
楯を持った警備隊員と装甲車で造られた灰色の壁。特区警備隊によるバリケードである。
「ああ、くそっ……！　こっちも封鎖されてるのかよ！」
日の前にそびえる巨大な建物を見上げて、古城がギリギリと奥歯を噛む。結界島の象徴というべき逆ピラミッド型ビルの屋上を占拠しているのは、大海魔を思わせる不気味な触手の群れだ。雪菜が、魔女の〝守護者〟と呼んでいた怪物である。
その怪物と交戦しているのは、特区警備隊の機動部隊。四機の攻撃ヘリがビル上空を旋回し、機関砲弾や浄化ロケット弾を容赦なくばらまき続けている。
「あんな軍用機まで出てきてんのか……!?」
爆散する炎を呆然と見上げて、古城がうめく。
攻撃の余波で砕けた建物の破片が、上空からバラバラと雹のように降り注いでいた。跳弾や流れ弾によって、周辺のビルにもかなりの被害が出ているようだ。そんな苛烈な戦闘に、市民が巻きこまれないようにするための交通封鎖とバリケードなのだろう。だが、
「これでは……近づけませんね」
「あっちも任務でやってんだし、この対応の早さはむしろ褒めるべきなんだろうけどな……」
もどかしげな口調で呟いた。さすがに特区警備隊の封鎖は厳重で、彼らを突破して雪菜と古城が、破してキーストーンゲートに近づくのは、どう考えても無理だった。たとえ雪菜が攻魔師資格

を持つ剣巫でも、武装ヘリが飛び回っているような戦場に入れてもらえるとは思えない。

さらに地上の機動部隊も、屋上の怪物に向かって砲撃を開始していた。高い浄化能力を持つ銀イリジウム合金の破片が、榴弾の一斉砲撃だ。

身体を襲う。が、怪物の動きに目に見えるほどの変化はない。

「……無傷!?」

「あの〝守護者〟……おそらく魔術で強化しています。攻撃無効の属性かもしれません」

雪菜が冷静な口調で分析する。

あれだけの巨大な触手を魔術強化するには、尋常ではない量の魔力が必要なはずだが、それを可能にするのが、悪魔の加護を受けた魔女の力なのだろう。

砲撃を余裕で耐え抜いた怪物が、反撃を開始する。

鞭のように伸びた斑模様の触手が武装ヘリの一機をとらえて、その機体を一瞬でへし折った。

制御不能に陥ったヘリは、炎を吹き上げながら地上へと落下。地面に激突して凄まじい爆煙を噴き上げる。人工島の大地が不気味に振動し、ビルの谷間を轟音が吹き抜けた。まるで怪獣映画を見ているような光景だ。

「くっ……」

漂ってくる焦げ臭い空気に、古城がうめく。

攻撃ヘリは無人機だが、爆発に巻きこまれて負傷者が出ている。この調子で戦闘が続けば、

民間人にまで被害が及ぶのも時間の問題だろう。

しかもビルの屋上から放たれている魔力は、ますます勢いを増している。古城たちがこうして手をこまねいている間にも、優麻の魔術儀式は完成に近づいているのだ。

雪菜は無言で唇を噛んでいた。それがわかっていても、魔術によって強化されている相手ではどうしようもない。彼女の槍なら、数百メートルも離れたビルの上にいる怪物が体も易々と斬り裂ける。それがわかっていても、数百メートルも離れたビルの上にいる怪物が相手ではどうしようもない。

「どこか抜け道はないのか――」

古城は地図を検索するために携帯電話を取り出す。この際、地下道でも人工島のメンテナンス用通路でも構わない。特区警備隊の検問をくぐり抜けて、キーストーンゲートに近づけるルートさえ見つかれば――

「なんだこれ……!?　……浅葱か？」

しかし待ち受け画面に表れた写真を見て、古城の緊張感がごっそりと日滅りする。

そこに映っていたのはクラスメイトの女子のあどけない寝顔だった。すっぴんのせいで幼く見えるし、唇の端には涎の垂れた跡が残っているが、それが逆に可愛らしい。

していている幸せそうな子猫を見ている気分だ。

「先輩、どこでこんな写真を……」

呆然と待ち受け画面に見とれている古城を、雪菜が冷ややかに睨んで訊いてくる。

「ち、違う！　俺じゃねえ！　知らないうちに誰かが勝手に……って、え？」

古城は必死で首を振り、ふと気づく。待ち受け画面の隅っこに、見慣れないアイコンが追加されていた。キーストーンゲートを象った画像に、ルート検索の文字。

「姫柊、こっちだ！」

「せ、先輩――？」

古城は雪菜の手を握ると、まったく無関係の方角へと走り出す。不意を突かれて混乱したまま、引きずられるように古城はナビゲーション画面の表示に従って、見知らぬビルの中へと飛びこんだ。

勝手にインストールされていた怪しげなアプリを信用したわけではなかったが、ほかに追い詰められた現状を打開できそうな手がかりもない。駄目で元々だと試してみたのだ。

だが、その結果として起きた現象は、古城の予想外のものだった。目眩を伴う不快な浮遊感と、軽い衝撃。視界の揺れが収まったとき、古城たちは見知らぬ商店街の中にいたのだ。

「空間転移――!?　先輩、これは？」

状況を素早く理解して、雪菜が呆然と古城を見上げた。古城は携帯の画面を睨んで首を振り、せば、ゲートの中に出るはずだ」

「このナビ、キーストーンゲートまでのルートが表示されてやがる。あと何回か転移を繰り返

「空間の歪みを利用して道順を逆算した、ということですか？　いったい誰がそんな……」

「浅葱の仕業か……？」

わけがわからないまま、古城はそういうことに利用して、目的地までの最短ルートを導き出す。紘神市内に張り巡らされたネットワークを利用すれば、技術的には不可能ではないだろう。

刻一刻と変化する不安定な空間の揺らぎを逆に利用すれば、技術的には不可能ではないだろう。

だが、それを実現するためのシステム構築には、桁外れに高度な技術が必要なはずである。

そんなものを一晩で作り出せるプログラマーは、古城の知る限りでは彼女だけだ。

とはいえ、浅葱がそんなアプリを　よもやつけてくるとは思えない。そもそも古城が自分の寝顔の写真と一緒に、知っているはずもない。どこかに裏で糸を引いているものは使わせてもらおう。次あるいは獅子王機関か――この追い詰められた状況を乗り切るために、古城としている誰かがストーンゲートに向かっている人間がいるのだろう。

だが、今は彼らの正体を詮索している暇はない。

「とにかく使えるものは使わせてもらおう。次は二百メートル先の交差点を右折だ」

「はい」

雪菜が古城の指示に素直に従って走り出す。

きた。昨日から古城たちをさんざん悩ませてくれた空間の歪みだが、それを利用するキーストーンゲートに辿り着くための抜け道が生まれるのだ。

きれば、封鎖され

四度目の転移が終わった瞬間、古城たちの視界に飛びこんできたのは、製の塔だった。紘神島でもっとも高い場所。ガラス張りの展望ホールのあるまり、キーストーンゲートの屋上だ。

「――って、ここまで怪物に占領されてるのかよ!?」

屋上に着地した瞬間、周囲を取り囲む触手の群れに気づいて、古城はたじ間近で目にした斑模様の触手は、想像以上におぞましい姿をしていた。皮は不気味に節くれだって、それらが脈打つ姿は大蛇の群れを連想させる。数え切れないほどの触手は、幾重にも複雑に絡み合い、古城たちを押し潰そうと殺到する。それらを引き裂いたのは、凛冽とした銀光の一閃だ。

「〝雪霞狼〟――！」

雪菜が突き出した銀色の槍が、直径数十センチに達する触手を、紙も同然に引き裂いた。

攻撃ヘリの三十ミリ砲弾や、炸薬を満載した抗魔榴弾でも傷ひとつつけられなかった怪物を、非力な少女の持つ槍が易々と斬り裂き、消滅させる。それが獅子王機関の秘奥兵器、〝七式降魔突撃機槍〟の能力なのだ。

「――ユウマ！」

魔女たちの〝守護者〟による壁が破れて、その中で行われていた儀式の風景が露になる。

鮮血で描かれた魔法陣。その左右に立つ二人の魔女。

そして魔法陣の中央には、黒い礼服を着た少年が立っている。吸血鬼をイメージした燕尾服。

それは、凪沙が占城のために用意した仮装用の衣装だった。

「早かったね、古城」

振り返った少年が、古城の名前を呼ぶ。どこにでもいそうな、ありふれた顔立ちの高校生だ。

前髪の色素だけが、月光にさらされたように白く抜けているのが、特徴といえば特徴か――

そこに立っていたのは、暁古城の肉体だ。

「キミは昔からそうだったよ。なにもわかってないのに、本当に大切な場所に現れる」

「ユウマ……おまえは……」

自分自身の身体を見つめて、古城が苦悩の表情を浮かべる。

優麻の手の中には、一冊の魔導書が握られている。そして、彼女の指先から流れこむ膨大な魔力が、その魔導書を駆動して、空間の歪みを引き起こしている。その事実に古城は絶望する。

こうして直接向き合うまで、やはり心のどこかで願っていたのだ。優麻が今回の事件とは無関係であって欲しいと。ただ巻きこまれただけの被害者なのだと。

しかし、ようやく実感する。彼女は本当に古城の幼なじみで、彼女が事件の首謀者だったのだということを。

「心配しないで。この身体はすぐに返す。だから、少しだけ待っていてくれないか。もうすぐ見つけられそうなんだ」

苦悩する古城をいたわるように、優麻が優しい表情で笑う。
「見つける……って、なんのことだ……？」
「ボクの母親だよ。母親……って……生まれてから、まだ一度も会ったことはないけどね」
古城の混乱が激しくなる。
幼い優麻が母親と離れて暮らしていたことは、古城もうっすらと覚えていた。
優魔が魔女だというのなら、母親が同じように魔女だったとしても不思議ではない。〝魔族特区〟である絃神島（いとがみしま）に優麻の母親がいる可能性も高い。
そこまでは古城にも理解できる。だが、理解できるのはそこまでだ。
ただ母親に会うために、これほどの事件を起こさなければならない理由はないはずだ。
その疑問を優麻に問い詰めようと、古城が魔法陣に足を踏み入れる。それを制止するように、笑い含みの声が突然聞こえてきた。聞き覚えのある皮肉っぽい口調だ。
「――そこまでだよ、古城。それ以上は彼女に近づかないでくれないかな」
「っ!?　なんでおまえがこんなところに……!?」
古城は愕然（がくぜん）としながら、声のした方角へと視線を向ける。そこに立っていたのは金髪碧眼（へきがん）の青年貴族だ。鉄塔の上台に背中を預けて、無駄に爽（さわ）やかな笑顔を浮かべている。
「やァ。古城、しばらく見ないうちに、ずいぶん可愛（かわい）らしい姿になったじゃないか」

舌なめずりするようなヴァトラーの声音に、古城はゾクリと悪寒を覚えた。

相手が〝旧き世代〟の吸血鬼だから怯えているわけではない。古城にとってこの青年貴族は、ある意味、第一真祖〝忘却の戦王〟よりも危険な相手なのだ。なにしろ、男の古城に対して愛を捧げると言ってはばからない、見境のない人物なのである。優麻の身体に入った今の自分が、彼の目にはいったいどう映っているのか、想像するのも恐ろしい。

だから古城は、慌てて話題を変える。

「今回の騒ぎ、まさかおまえも一枚噛んでるのか!?」

「いやいや、ボクはただ待ってるだけサ……彼女たちが監獄結界をこじ開けるのをね」

「監獄結界……!?」

ヴァトラーの口から出てきた意外な単語に、古城は唖然と呟きを洩らす。

監獄結界の噂なら、古城も聞いたことがある。凶悪な魔導犯罪者を封印する幻の監獄。幽霊刑務所。それがどこにあるのか、本当に存在するのか、誰も知らない。

殺された犯罪者の魂が成仏できずに彷徨っている場所だとも、あるいは海の底に沈む邪神の神殿の別名だともいわれている。紘神市にまつわる、有名な都市伝説のひとつである。

「そんなもの、ただの怪談じゃなかったのか……!?」

「いや。監獄結界は〝魔族特区〟を流れる竜脈の力を使って造り出された、人工的な異世界だ。その存在は見えない。それを造り出した理事会の連中にさえ、どこにあるのかわからない。

だが、たしかに存在する。この絃神市のどこかにね」

「そうか、この空間の歪みは……監獄結界の在処を探るために、優麻は、絃神市全域の空間を歪めた。メモ用紙に残された筆跡を、鉛筆で黒く塗りつぶすことで浮かび上がらせるようにして探し当てようとしていたのだ。

「ついでに言うと、監獄結界の封印を解くためには、優れた空間制御の術式と、竜脈を上回るほどの膨大な魔力が必要だけどね」

ヴァトラーの種明かしを聞き終えて、古城は、無言で立っている優麻に再び視線を戻す。

今なら、彼女の言葉の意味が理解できる気がした。

優麻は空間制御を得意とする魔女だ。しかし、いくら悪魔の加護があるといっても、竜脈に逆らうほどの魔力は彼女にはない。そんなものを持っているのは、天災と同じ扱いを受ける吸血鬼の真祖――すなわち古城だけだ。

イレギュラーな形で第四真祖の力を手に入れた古城は、吸血鬼としては不完全な存在だ。魔族としての特殊能力をほとんど持たず、体内に棲まわせている眷獣も、どうにか手懐けられたのは三体だけ。しかし古城の肉体には、たしかにありあまるほどの魔力がある。

古城にはまったく制御できない無駄な魔力だが、魔術の知識を持つ優麻なら、それを操ることもできるのだろう。だから優麻は、古城の身体を必要としていたのだ。

「そういう……ことかよ」

優麻は、彼女の母親を捜していると言った。

る。なぜなら彼女の母親は、監獄結界の中にい

魔導犯罪者として

だが、娘に監獄破封印された純血の魔女――それが仙都木優麻の正体だ。

界の中にいる犯罪者りを強要するような母親が

は、おそらく優麻の母親だ、まともな人間だとは思えな

「楽しみだねェ……異世界の迷宮に封じこめなければならないほどの魔導犯罪者たち。そいつらが一斉に街に解き放たれたらどうなるか。安心してくれ。脱獄囚たちは、このボクが責任をもって再び捕まえてみせるとも」

浮き浮きとした口調でヴァトラーが呟き、

「アホかあぁあっ――！　安心できるかっ、ボケ！」

古城は青筋を立てて絶叫した。ヴァトラーが、優麻たちの行動を大人しく見守っている事情もよくわかった。戦闘狂であるヴァトラーは、ただ自分が戦いたいというだけの理由で、魔導犯罪者たちが解放されるのを待っているのだ。

言いたいことだけ言い終えると、ヴァトラーは黄金の霧へと変化して姿を消した。古城と違って、完全体の吸血鬼である彼は、そんなふうに好き勝手にどこへでも移動できるのだろう。

だが、もはやその傍迷惑な男の相手をしている場合ではなかった。

監獄結界の解放のために、優麻は古城の身体を必要としている。ならば古城が自分の身体を取り戻せば、彼女を止めることができるはず――

そう考えて古城が優麻を睨みつけた、その直後だった。

「――先輩！　下がって！」

雪菜の鋭い声が、古城を呼んだ。ハッと顔を上げた古城の視界が、巨大な触手に埋め尽くされる。古城の動きを止めるため、魔女たちが〝守護者〟に捕縛を命じたのだ。

「――っ!?」

迫り来る触手を、雪菜の槍が薙ぎ払う。しかし触手たちは動きを止めない。代わりの触手が次々に出現して、古城たちのほうへと圧力をかけてくる。

触手を操っているのは、優麻の左右に立つ二人の魔女。穏やかな態度の優麻とは対照的に、彼女たちは暴力的な興奮と蹂躙の喜びに表情を歪めていた。特区警備隊（イフリート・ガード）の街地に甚大な被害をもたらしているのも彼女たちだ。

「漆黒と緋色の魔女姉妹……！　まさか〝アッシュダウンの惨劇〟の……!?」

二人が使う術式に気づいて、雪菜がかすかに眉を動かす。

魔女の姉妹は、どこか満足げな様子で甲高く嘲り笑った。

「なるほど……私たちの〝守護者〟に牙を剝くだけあって、小娘にしてはよくお勉強しているようですわね」

「――察するに巫女の類といったところでしょうか。どうなさいます、お姉様？」

手にした魔導書を撫でながら、緋色の魔女が姉の意向をうかがう。漆黒った仕草で大きく肩をすくめ、

「できることなら手足を引きちぎり、腹を裂き、我らが儀式の贄として使ど、〝蒼の魔女〟の本体にもしものことがあってはいけませんわね……例で、せいぜい丁重にお相手して差し上げましょう」

「残念ですわ。死体にしたら映えそうな、綺麗な娘ですのに――」

魔導書が禍々しい輝きを放ち、〝守護者〟の攻撃が激しさを増した。

「ぐっ！」

「――姫柊!?」

押し寄せる触手の勢いに抗いきれず、雪菜がジリジリと後退する。雪菜まとう防御結界を無効化するが、実体化した怪物の質量までは防げない。どうにか攻撃をしのいでいるが、雪菜自身は小柄な中学生の少女でしかな流して触手を切り裂く。そのたびに疲労が蓄積し、彼女の体力が削られて

そして古城には、それを為すすべもなく見ていることしかできない。第四真祖の眷獣が使えれば、この触手を根こそぎ消滅させることもできるだろうが、本来の肉体から切り離されてしまっている今の古城には、眷獣を呼び出す方法がないのだ。

魔術の知識を身につけた優麻は、肉体から切り離されても魔術が使える。

しかし古城の能力は、たまたま手に入れた吸血鬼という体質に依存するものから切り離されてしまった古城は、なんの力も持たない一般人だ。

そして事実、古城は優麻を止めるどころか、彼女に近づくことすらできない特区警備隊の無人攻撃ヘリはすべて撃墜されてしまっていたし、地上からの砲撃は〝守護者〟の防御を破れない。屋上の入り口はすでに触手に埋め尽くされて、地上からの救援を期待することもできなかった。

「くそっ……！　こんなの……どうすりゃいいんだ……」

古城は弱々しくうめきながら周囲を見回すが、武器になりそうなものはなにころか雪菜の背後から離れることもままならない。迂闊に動けばたちまち触手雪菜の負担を増やすだけだ。己の無力さに、古城は絶望するしかない。

それを嘲笑うように、古城たちの背後に新たな触手が出現する。屋上の床をの死角へと回りこんだのだ。さすがの雪菜もそれを迎撃する余裕はない。

逃げ場をなくした古城が、立ちつくしたまま、唇を噛む。

古城の眼前に殺到していた触手の群れが、光の奔流に焼かれたのは、その直瞬遅れて銃声が轟き、押し寄せて来た爆風にあおられた古城が転倒する。

「なっ……!?」

呆然と顔を上げた古城が見たのは、長い銀髪を風になびかせながら、黄金の銃を構えている異邦人の少女だった。そして、銀色の長剣を振り上げた長身長髪の少女が飛び出してくる。

「――〝煌華麟〟！」

少女が振り下ろした銀色の剣が、無数の触手を、なんの抵抗もなくまとめて両断した。それは獅子王機関の制圧兵器〝六式重装降魔弓〟第一の能力――疑似空間切断の効果だった。

「ラ・フォリア!?」

「――紗矢華さん!?」

思いがけない援軍の出現に、古城と雪菜は喜ぶよりも呆気にとられる。

キーストーンゲートの周辺は特区警備隊に封鎖されたままだし、屋上に続く通路は触手に埋め尽くされているはずがない。彼女たちが入ってこられるはずがない。

「おまえら、いったいどこから……!?」

ピンポイントで出現した紗矢華たちを眺めて、古城が訊く。まるでその質問を待ち構えていたかのように、長いポニーテールを揺らして紗矢華は振り返り、

「助けに来てやったわよ、暁古城。本当に世話がやけるっていうか、私がついてないとあなたはいつもそうやって雪菜に迷惑ばかり……」

そして彼女は、困惑顔で動きを止めた。

雪菜の隣にいるのが、古城ではなく、見ず知らずの少女だとは思っていなかったのだろう。

「えーと……誰？」

混乱している紗矢華を見つめて、古城はやれやれと頭をかく。そう言えばまだ知らなかったのだった。

リアは、古城が優麻の身体に入っていることを

「あの……今はその人が暁先輩なんです。いろいろあって女の子になってまか迷っている古城の代わりに、雪菜が言う。かなりざっ

どう返事するべきるものでもない。

細かく答えてどうなまあ、と驚いたように目を大きくする。

ラ・フォリアが、

紗矢華はまるで放心したように硬直し、そしてなぜか泣き出しそうな表情で叫んだ。

「なんじゃそりゃあああああ!?」

それは奇しくも古城が半日前に口にしたものと、ほとんど同じ絶叫だった。

3

紘神島西地区（アイランド ウエスト）――

センターの屋上駐車場に、矢瀬基樹は携帯電話を握って立っていた。

電話の相手は人ではなく、妙に人間臭い口調の人工音声である。

『どうにか上手くいったみてェだな』

明らかに顚末を愉しんでいるような人工知能の口調に、矢瀬は渋い表情を浮かべる。

「こっちも危ない橋を渡ってるんだ。そうでなければ困る」

『ケケッ……叶瀬賢生か。ずいぶんとまた、ヤバい相手を引っ張り出してきたもんだな』

モグワイの言葉に黙ってうなずき、矢瀬はキーストーンゲートへと目を向けた。

空間転移で出現した紗矢華とラ・フォリアの背後にはもう一人、僧衣のような黒服を着た陰気な男が立っている。叶瀬賢生。元アルディギアの宮廷魔導技師だ。紗矢華たちを魔女姉妹のもとへと送りこんだのは彼だった。

「空間制御の魔術は、魔女の専売特許ってわけじゃない。ハイクラスの魔術師なら、転移や物質転送くらいはやってのけるさ。アルディギアの宮廷魔導技師なら余裕だろう」

投げやりな口調で矢瀬が言う。

紘神島を覆う空間異常の原因は、キーストーンゲートで行われている魔術儀式だ。ならば、その儀式を破壊する。そう提案してきたのは、ラ・フォリア王女だった。

大がかりな魔術儀式を実行する際には、強力な結界によって邪魔者の侵入を防ぐのが鉄則だ。しかし、空間制御の魔術を使っているLCOの魔女たちは、それを妨げるような結界を張れない。その脆弱性を突いて、空間転移で儀式場を急襲する。それがラ・フォリアの狙いだった。

それを実現するにあたって、彼女が出した条件はふたつ。

ひとつは先日の模造天使事件で逮捕され、勾留中だった叶瀬賢生を保釈すること。白分自

身の強い霊力が災いし、空間の歪みに移動経路を寸断されていた王女にとって、キーストーンゲートへの急襲には、空間転送術が使える強力な魔術師が必要だったからだ。

そしてもうひとつの条件は、特区警備隊からの要請という形で、アルディギア聖環騎士団を市街地での戦闘に参加させることである。

法的には認められるはずもない条件だが、それが実現すれば戦況は一気に覆る。

そしてここは〝魔族特区〟だ。代償を覚悟すれば、多少の無茶はまかりとおる。

「騎士団は？」

『とっくに配置についてる。今は精霊炉の起動中だ。稼働開始まであと九十秒ってとこだな』

「……そうか。これでこっちの手札は揃ったな」

満足そうに呟く矢瀬だが、彼の表情に余裕はない。

獅子王機関の剣巫と舞威姫、おまけに精霊使いであるラ・フォリア王女本人を投入したのだ。

メイヤー姉妹のほうは、これでどうにかなるだろう。

だが、真の脅威は彼女たちではない。問題なのは、第四真祖、暁古城の肉体がいまだに奪われたままだということだ。彼の身体を奪った人物こそ、今回の事件の首謀者たる魔女なのだ。

『けど、まさか第四真祖の兄ちゃんが女になってたとはびっくりだったな』

矢瀬の苦悩を皮肉るように、モグワイが愉快そうに笑う。

「浅葱が知ったら卒倒するな。古城が吸血鬼だと知らされるよりショックかもな」

まったく世話のやける連中だ、と矢瀬は溜息をつく。不器用な友人たちのためにも、古城を早く本来の身体に戻してやるべきだろう。

しかし実際、驚いたのは矢瀬も同じだった。

暁古城の本当の監視者である矢瀬だが、波朧院フェスタのせいで彼の機能していない。おまけにＬＣＯの騒ぎに昨日から忙殺されていた。そのせいで、古城の異変に気づくのがすっかり遅れたのだ。

本土から来た古城の幼なじみの正体をもっと早く見抜けていれば、穏便な対策も取れたはずだった。だが、今となっては後の祭りだ。

「仙都木優麻か。まさか本名で堂々と乗りこんでくるとはな。わずか半年前に第四真祖の力を偶然手に入れた暁古城の旧友が、ＬＣＯ大司書の血縁……偶然にしては出来過ぎてるが」

〝書記の魔女〟仙都木阿夜。十年前に封印され、公的記録が抹消された犯罪者の苗字までは、紘神市の上陸管理局もチェックすることができなかった。

しかも優麻には魔導犯罪者としての活動歴がない。人工島管理公社はもちろん、獅子王機関ですら彼女を警戒していなかった。それをいいことに優麻は正規の手続きで紘神島に乗りこみ悠々と儀式の準備を済ませたのだ。

しかし犯罪者としては無名の優麻が、ＬＣＯの幹部という地位を手に入れているのも奇妙な話だった。古城と出会う前の優麻の経歴は不明だが、それから現在に至るまで、彼女が大きな

事件を起こしたことはない。犯罪者になるような動機もない。

そう。仙都木優麻にはなにもない。彼女に与えられているのは、今回の力だけ。彼女の存在のなにもかもが、まるで仙都木阿夜を脱獄させるために用意されたものであるように感じられる。

「気に入らない話だが、今は調べている時間がない。あっちもどうやら限界だ」

そう言って矢瀬は、絃神島の北の海上を見た。

魔女たちの魔術儀式によって、絃神島の全域は、陽炎のようにゆらめくベールに覆われている。その陽炎を透かして、時折、蜃気楼のようになにかがうっすらと見える。

鉛筆で黒く塗りつぶした紙に、占い筆跡が浮かび上がるように、異空間の歪みに隠された建造物がその輪郭を露にしつつあるのだ。

『監獄結界か……これはさすがにバレるな』

「……やむを得ん。仙都木優麻の身体を潰す」

モグワイの言葉にうなずいて、矢瀬は吐き捨てるようにうなずいて、矢瀬は吐き捨てるように苦々しげに呟いた。

暁古城と仙都木優麻の精神は、たしかに入れ替わっているように見えるが、それはあくまでも表面上のこと。優麻が魔術でそう見せかけているだけだ。

魔術の基盤となっている優麻の肉体を破壊してしまえば、古城は自動的に元の身体に戻る。

雪菜が〝雪霞狼〟を使ってやろうとしたのと同じ理屈だが、手段としてはより悪辣だ。

魔術を破った後遺症で、優麻の身体が傷つくことを心配していた雪菜に優麻の身体を傷つけることで、魔術を破ろうとしているのだ。

もちろん優麻は確実に死ぬ。だが、監獄結界を守るためには、それ以外の選択肢がない。

『狙撃か？』

「いや。その手の物理攻撃は、あの姉妹が張った結界には効かない。これは俺の重気流躰の出番だな」

矢瀬が、ポケットから小さな薬品カプセルを取り出す。彼の過適応能力者としての能力を時的に増幅させるケミカルドラッグだ。

『予定調和』の魔術書を使ってメイヤー姉妹ほぼ完全に遮断する。しかし、もちろん例外界に存在し、術者が脅威と認識していないもだからといって、狙撃用のレーザーや毒ガとっては本来あるべき調和を外れた異物だか

矢瀬は過適応能力者――魔術に頼らない天すでに結界の中に存在する大気を操って突風れが矢瀬の選んだ解決策だった。

「悪いな、古城。少々痛い思いをしてもらうぞ――」

死ぬのは慣れてるだろ、と身勝手に呟きながら、矢瀬がカプセルを口に放
自分自身が味わう苦痛よりも、友人を失うことに苦しむであろう古城の性
目を背け、矢瀬は、カプセルを噛み砕いて能力を発動――
『いや……時間切れだぜ』
「なに!?」
モグワイが告げたその瞬間、キーストーンゲートから常軌を逸した莫大な
同時に吹き荒れた凄まじい突風が、矢瀬の能力を無効化する。
異世界に隔離されていたはずの巨大建造物が、世界の境界を引き裂いて、
割りこんだ。
なんてこった、と矢瀬は呟く。絃神島北端の海上に出現したのは、岩塊で
その頂上にそびえ立つのは、石造りの聖堂だ。
「監獄……結界……!」
その聖堂を覆われた小さな島。
「ほ、本当にぁ暁古城なの……わけがわかんないんだけど!?」

4

「ほ、本当にぁ暁古城なの……わけがわかんないんだけど!?」

監獄結界出現の直前になっても、煌坂紗矢華は驚きから立ち直れずにいた。古城の女体化は、彼女にとってそれほどまでに衝撃だったらしい。遺憾そうに顔を伏せる雪菜を見て、ほとんど涙目になっている。

前にも似たようなことがあったな、と古城は思う。生来の思いこみの激しさに加えて、普段、雪菜の先輩として無理に冷静を装っている反動か、いったん動揺すると紗矢華は意外なメンタルの脆さを露呈してしまうのだ。

そして彼女は、魔法陣の中心に立っている優麻を指差し、

「じゃあ、あっちにいるあなたはなんなのよ!?」

「あー……いや、あれはなんていうか……」

「あれは偽物ですね」なぜか確信に満ちた声で断言するラ・フォリア。

凛々しい顔をしているはずがありません」

「ハッ！」真顔で納得したように紗矢華がうなずく。「そうですね、そういえば！」

「いや、あの身体はいちおう俺の本体なんだが……」

ハッじゃねーよ、と古城はふてくされたように言う。王女はそんな現在の古城の姿を、頭のてっぺんから爪先までじっくりと検分し、ミニスカートの裾の部分にふと目を留める。

「ですが……困りましたね、紗矢華」

「はい」紗矢華は重々しくうなずいたあと、自らの失言を悟って慌てて首を振り、「え!?　あ、

いえ、私はべつに！」
「これでは、わたくしが世継ぎを作れません」
「はい!?　いま、今なにかサラッととんでもないことが聞こえたんですけど!?」
「……」
とりあえずこいつらのことは放っておこう、と決心して、古城は優麻のほうへと向き直る。
ラ・フォリアと紗矢華の攻撃によって、魔女の〝守護者〟は大きく数を減らしていた。今なら優麻に近づいて、彼女の手から魔導書を奪うこともできるはずだ。
だが、そんな古城の思考を読みとったように、優麻がこちらを見て微笑んだ。
次の瞬間、溶岩にも似た濃密な魔力が彼女から流しこまれ、魔導書が眩く発光した。
大気を軋ませる轟音とともに、凄まじい爆風が襲ってくる。
爆風の源は、絃神島北端の海上。そこに突然、見覚えのない島影が浮かび上がっていた。
それは岩山の一部のような、ごつごつとした小島だ。島の直径は二百メートル足らず。高さ八十メートル程度だが、そのほとんどが人工的に造られた聖堂になっている。
その姿は、やがて要塞として使われるようになり、〝聖ミカエルの山〟と名付けられたヨーロッパの修道院によく似ていた。その修道院は、やがてのち数多くの聖職者や政治犯を収監する監獄に変わったという歴史を持っている。
「なるほど……LCOの狙いは監獄結界の解放か」

背後から陰気な声が聞こえてきて、占城はその男の存在に気づく。
「叶瀬賢生……!?」
声の主は、僧衣のような黒服を着た中年男性だ。占城は彼のことを知っていたが、驚きはなかった。元アルディギアの宮廷魔導技師である叶瀬賢生は、意外ではあったが、驚きはなかった。元アルディギアの宮廷魔導技師である叶瀬賢生は、ラ・フォリアの知り合いだ。王女が、キーストーンゲートへの移動手段として、この男を利用しようと考えるのは、それほど突飛な発想ではない。
「あれが監獄結界なのか……？」
古城の問いかけに、賢生がうなずく。
「どうやら異空間との境界が揺らいでいるようだな。今はまだ完全に実体化したわけではないようだが――」
「まだ封印が破れたわけじゃないんだな？」
「そうだ。喩えるなら、海の底に沈んだ遺跡を水面から眺めているような状態だ。遺跡そのものを海底から引き上げるためには、桁外れに大きな労力が必要になる」
賢生の言葉を聞いて古城が青ざめる。
監獄結界を実体化させるには、膨大な魔力が必要だとヴァトラーも言っていた。すでにその力を手に入れている。あとは監獄結界の在処がわかればよかったのだ。それがどこに沈んでいるかさえわかれば――

「ぐっ……!?」
「先輩!?」
突然、右手に灼けつくような痛みを覚えて、だが、占城が操っているはずの優麻の白いしなやかな傷を負っていたのは、占城の本来の肉体——すなわち魔法陣の中に立っている少年だった。
「おっ、と……どうやらここまでか」
優麻の手の中で、魔導書が燃えていた。第四真祖の膨大な魔力を注ぎこまれて、ついに限界を超えたのだろう。たちまち原形を留めぬまでに燃え尽き、灰になる。
「〝No.539〟が……!」
ああっ、と儚げな悲鳴を上げたのは、漆黒と緋色の魔女姉妹だった。
彼女たちは、魔導書を保護するために結成された犯罪組織の構成員だ。
れることは、魔女姉妹にとって耐えがたい哀しみなのだろう。
だが、同じ組織の幹部であるはずの優麻は、
「この魔導書はもう用済みだ。悪いがボクは行かせてもらうよ」
ゆらり、と優麻の眼前で景色が揺らぐ。水面に広がる波紋のような空間転移の歪み。
ための門を開いたのだ。
「お待ちを——〝蒼の魔女〟」

漆黒の魔女が、慌てて優麻を呼び止めようとする。しかし優麻は振り返らずに、

「キミたちはここで彼らの足止めを」

そう言い残して、虚空に吸いこまれるように消えた。

「ユウマ……！」

占城は無力に立ち尽くしたまま、海上の一点を見つめていた。

空間転移で移動する優麻を止めることはできないが、彼女の行き先はわかる。

完全に解除するために、優麻は監獄結界へとするはずだ。

「賢生、彼女を追えますか？」

ラ・フォリアが黒衣の魔導技師に訊く。

「残念ですが」

賢生は静かに首を振った。無意識レベルでは、転移前に慎重な座標計算が必要だ。誰かを追跡するような便利な使い方はできないらしい。

「ただし、監獄結界の近くにゲートを開くことは可能です」

「わかりました。では、それで」

銀髪の王女が艶やかな微笑みを古城たちに向けた。

「古城。あなたと雪菜は先に行ってください。わたくしたちはそこの魔女を片付けます」

「だけど、ラ・フォリア……」

彼女たちを敵の前に残していくことに抵抗を覚えて、古城は行動をためらった。しかし王女は、涼しげな表情で首を振り、

「第四真祖の無尽蔵の魔力を手に入れた魔女が相手では、わたくしや紗矢華には打つ手がありません。対抗できるとしたら、魔力を無効化できる雪菜の槍と、古城――本来の第四真祖であるあなただけですす」

「わかった。助かる」

「――感謝します、ラ・フォリア」

古城と雪菜は口々に礼を言って、賢生を見た。どうやらそこが転移先らしい。黒衣の魔導技師は無言でうなずき、手に持っていた小瓶から水を撒いた。彼の足元にできた水溜まりが、見知らぬ場所の風景を映し出す。

よく見れば水溜まりの周囲には、チョークでびっしりと細かな呪文が書かれている。どうやらそこが転移先らしい。

那月のように自在に空間を操ることはできないのだろうが、これも十分に驚異的な魔術である。

「くっ！」

覚悟を決めた古城。雪菜もすぐに彼を追った。

残された賢生は、唇を噛んで、水面に映る景色の中に飛びこんでいく。

空間転移のような高位魔術師は、彼ほどの魔術師

にも相当な負担をかけるのだろう。だが、少なくとも賢生は自分の役目を果たし終えた。あとは古城たちに託すしかない。

「私たちを片付けるんですって、お姉様」

「さすがに王女殿下はユーモアのセンスにも長けてらっしゃいますこと」

屋上に残った漆黒と緋色の魔女姉妹が、蔑むように言う。王女のお付きの〝賛〟になるために残ってくださるなんて、光栄の至りですわ！」

呪式銃や紗矢華の剣の威力を目の当たりにしてもなお、彼女たちには余裕があった。

「わざわざ私たちのお上品な穴という穴から、我らが〝守護者〟の枝をぶちこんで、引き裂いて内臓をかき混ぜて、綺麗なお肉の塊に変えて差し上げますわ！」

「この上は、そのお上品な穴という穴から、我らが〝守護者〟の枝をぶちこんで、引き裂いて

挑発的にそう言い放ち、二人の魔女は甲高い声で哄笑を続ける。

この、と紗矢華が眉を吊り上げて剣を構えた。

呪詛と暗殺を司る彼女は、それゆえに相応の畏敬をもって敵を遇する。獅子王機関の舞威媛にとって、敵とはすなわち祓い鎮めるべき荒御魂と同義なのである。

そんな潔癖な紗矢華にとって、王女を嘲弄する魔女姉妹の態度は、到底容認できるものではない。しかし激昂する紗矢華を制止するように、悠然と微笑んで前に歩み出た。

「あまりお笑いになると小じわが目立ちますよ、おばさま方。それにお肉のたるみも少々」

ピキ、と音を立ててその場の空気が凍りつく。若く美しい王女の無造作な言葉に、二人の魔

女の表情が憤怒に染まっていく。

しかしラ・フォリアは、怒りに震える魔女たちにもまったく気づかない口振りで、

「いやしくも悪魔と契約した身でありながら、不老延命の肉体を得ることも叶わぬとは、よほど素養に恵まれなかったのか、それとも度を過ぎた無能なのでしょうか。人生の先達の方々に対して、無理な若作りは滑稽ですと忠告するべきかどうか迷ってしまいますね。ねえ、紗矢華」

「そ……そうですね」

いきなり話を振られて、表情を引き攣らせる紗矢華。女神のように優しげな王女の笑顔が、なぜか異様に恐い。思わず魔女姉妹に同情してしまいそうになる。

陰謀渦巻く宮廷内の虚々実々の駆け引きで鍛えられた腹黒王女を、田舎魔女ごときが挑発するべきではなかったのだ。

そして口では敵わないと知った魔女たちは、プライドをかなぐり捨てて咆哮し、

「ぐ……が……この小娘がアアアア……！」

「わ、私たちがどれほどの苦労をしてきたのかも知らずに……あな、悄しや！」

「そ、そこまで……!?」

魔女姉妹の錯乱ぶりに、紗矢華が再び愕然とする。ラ・フォリアの言葉は、どうやら決して触れてはならない魔女たちの傷口を抉ってしまったらしかった。

「行きますよ、紗矢華」

黄金の拳銃を構えた王女が、何事もなかったかのように紗矢華に呼びかけてくる。

「は、はあ……」

これじゃやどっちが魔女だかわからないんだけど、と心の中で呟きながら、紗矢華は剣を振り上げた。

5

仙都木優麻は、人工島の突端にある、錆びた橋の上に立っていた。

そこから監獄結界までの距離は数百メートルほど。聖堂のある小さな岩山橋で絃神島と連結されている。蜃気楼のように揺らぐ不安定な道だ。監獄結界は、いまだ完全には実体化していないのだ。

海面にそそり立つ岩山を目がけて、優麻はそっと右手を伸ばす。

その直後、彼女の背後の空間を揺らして、甲冑をまとう騎士の幻像が出現した。顔のない青い騎士。優麻が〝蒼〟と名付けた悪魔の眷属。魔女の〝守護者〟だ。

監獄結界はすでに目の前にある。あとは第四真祖の膨大な魔力を借りて、それをこちら側の世界へと引きずり出すだけでいい。そして最後の封印を破れば、彼女の任務は達成される。

だが、優麻がそれを〝守護者〟に命じる前に、背後から彼女を呼ぶ声がした。

「ユウマ！」

振り返ると、そこには見慣れた自分自身の身体が立っていた。すなわち優麻の身体に入った暁古城が。彼の隣には、銀色の槍を持った少女も立っている。

「もうボクに追いついたのか」

優麻は素直に感心して呼びかける。

今の古城は、なんの力も持たない普通の人間だ。少なくとも彼ひとりの力では。

くことはできないはずである。

「いい友達に恵まれたんだな、古城」

「――他人事みたいに言ってんじゃねえよ。おまえだってその中の一人だろうが」

古城が苦々しく唇を歪めて答えてくる。優麻は面喰らったように目を瞬いて彼を見返した。

「嬉しいな。まだボクのことを友達だと思ってくれるのかい？」

「言っとくけど、こっちは魔女なんか見慣れてるし、その程度じゃなんとも思わねーよ。こいつが島に来たあたりから、おかしな知り合いばかり増えてるからな」

古城はそう言って、隣にいる雪菜を指さした。

銀色の槍を構えていた少女が、心外だ、と言わんばかりに目を大きくして古城を睨む。世界最強の吸血鬼から、おかしな知り合い呼ばわりされたら、文句を言いたくなるのも無理はない。

しかし彼女は、あえて古城の言葉を否定しようとはしなかった。

「どうしておまえが刑務所破りの手伝いなんかやってるんだ」
古城が真剣な表情で優麻に訊く。優麻の返答は簡潔だった。
「ボクはそのために作られたからだよ」
「……作られた？」
「ボクの母親は仙都木阿夜――ＬＣＯという犯罪組織の元締めなんだ。紘十年前から監獄結界に収監されている。彼女が用意しておいた脱獄の道具が占城に操られて、優麻は自嘲するようにキミと出会うほんの少し前のことだよ。ボクも、最初からお母様が設計したことさ」
「ボクは急速成長させられた試験管ベビーだったのも、おまえの母さんの計画どおりだったってのか？」
占城が表情を険しくして訊き返す。優麻は、迷いなく首を振った。
「違うよ、占城。それだけはボクが選んだことだ。言っただろ、ボクにはキミしかいないんだ。ボク自身の持ち物と呼べるようなものは、キミに出会えたこと以外になにもない」
「そんなことっ……！」
否定しようとした古城を手で制し、優麻は彼に背中を向けた。
「キミが第四真祖の力を手に入れたことを知って、ＬＣＯは計画を少し変更した。本当は監獄

結界の封印を破るために、絃神島の住民を十万人ばかり生け贄に使う予定だったんだ。だけど古城のおかげでその必要もなくなった……ありがとう、古城」

「〝雪霞狼〟――！」

優麻の言葉が終わる前に、雪菜が槍を輝かせて飛びこんでくる。

剣巫の名に恥じない、凄まじい速度だった。だが、その前に優麻は空間を歪めて十数メートルほど離れた場所へと移動する。目標を見失った雪菜の槍が、空を切る。

優麻の背後に浮かんでいた顔のない青騎士が、ギシギシと甲冑を軋ませて両手を掲げた。〝守護者〟の両手の隙間に生まれたのは、黄金の輝きだ。轟音をともなう眩い雷光。その光の正体に気づいたのだろう。古城と雪菜の表情が凍りつく。

実体を持つ巨大な魔力の塊。稲妻をまとう黄金の獅子――

「獅子の黄金……!?」

「第四真祖の眷獣!?　そんな……!?」

「眷獣の支配権を奪い取ったわけじゃない。時空を歪めて、古城が過去に使った眷獣の一部を呼び出したんだ。ほんの一瞬、このときのためにね――」

制御しきれない魔力の余波に苦悶しながら、優麻は笑った。

古城の身体を乗っ取っているだけの彼女には、肉体そのものが持つ魔力は引き出せても、第四真祖の眷獣を喚ぶことはできない。吸血鬼の眷獣とは、独立した意志を持つ異界からの召

喚獣だからだ。彼らの支配権を持たない優麻に、扱えるようなものではない。

しかし第四真祖の無尽蔵の魔力と、優麻の持つ魔女の力を組み合わせれば、このようなイレギュラーな魔術操作も可能になる。古城の肉体が持っている記憶を頼りに、彼が過去に眷獣を使った瞬間と、現在のこの時空を連結する――

その結果として生じるのは、空間の裂け目から流れこんでくる破壊的な灼熱の奔流だった。

優麻の魔術と、そして〝守護者〟の加護をもってしても、その術式を維持できたのは、数百分の一秒にも満たない刹那の時間だ。

洩れ出した眷獣の力が優麻の術式を破壊し、空間の接続が失われる。逆流してきた魔力が優麻の神経を灼き、破壊力の反動が〝守護者〟を襲った。

やがて雷光が消滅したとき、そこには両膝をついてうずくまる優麻と、傷ついた青騎士の姿だけが残っていた。錆びた鎧はひび割れ、砕け、青白い火花に包まれている。

「さすがに第四真祖の眷獣……ボクの〝蒼ルー〟でも制御しきれないか……だが、どうやら犠牲を払った甲斐はあったみたいだ」

優麻の弱々しい呟きを、古城と雪菜は呆然と立ち尽くしたまま聞いていた。

彼らの眼前で、監獄結界が燃えていた。

蜃気楼のように不安定だったはずの島が完全に姿を現して、燃え上がり、崩れ落ちようとしている。島へと続く浮き橋も実体化して、波飛沫に洗われていた。

監獄結界の封印が解けて、通常空間に復帰したのだ。
封印を破ったのは、第四真祖の眷獣の攻撃だった。あらゆる術式を圧倒する横暴な破壊力を使って、強引に島を覆う結界をぶち壊したのだ。魔術とすら呼べない力任せの荒技である。
「監獄結界が、実体化した……のか？」
崩落する聖堂を見上げて、古城がうめく。眷獣の雷撃の余韻が消え去ると同時に、空間の揺らぎも完全に消滅していた。残されたのは現実の風景だ。
そこにあるのは、まぎれもなく絃神島の一部。古い岩山を模した人工島だ。
「だけど……これって……」
破壊された壁の隙間から、聖堂の内部が見えていた。
そこにあるのは空洞だ。聖堂の中身は完全に空っぽ。がらんどうの空間が広がっていただけだ。そう。ただの空隙だけが――
「たとえ結界を失っても、監獄が解放されたわけじゃない、ということか……だけど、やはりそこにいたね」
傷ついた青騎士の破片を撒き散らしながら、優麻が聖堂へと近づいていく。
まるで聖堂の中身を最初から知っていたかのような彼女の言葉に、古城たちは困惑する。
油断なく槍を構えたまま、雪菜は、優麻の無防備な背中を眺めていた。
今の優麻には、大きな魔術を使うだけの体力はもう残っていない。それでも彼女を攻撃する

べきかどうか、判断できずに戸惑っているらしい。

やがて優麻が立ち止まる。彼女の視線の先にあるものに気づいて、古城と雪菜が息を呑む。

「馬鹿な……なんであんたがこんなところに……」

そこに置かれていたのは、椅子だった。

聖堂の中の空っぽの広間に、一脚の椅子が置かれている。ベルベット張りの豪華な肘掛け椅子だ。眠るように目を閉じたまま、そこに座っていたのは、人の女性。

美しくも幼い、人形のような顔立ちの魔女だ。

「お目にかかれて光栄です、監獄結界の鍵――〝空隙の魔女〟よ」

眠り続ける南宮那月に、優麻が恭しく一礼する。

古城たちは声も出せぬまま、ただ呆然とそれを眺めていた。

6

「ああもうっ！　しつこいんだけど、こいつら――！」

キーストーンゲートの屋上に、紗矢華の怒声が響き渡る。

彼女の視界を埋め尽くしているのは、不気味に蠕動する触手の群れだった。

強力な魔術に守られた触手たちを、紗矢華の剣は容易く斬り裂く。しかし、あまりにも数が

多すぎた。魔法陣から無尽蔵に湧き出てくる魔女の姉妹に近づくことができない。

「たしかに、これではキリがありませんね」

ラ・フォリアも、めずらしく不機嫌そうな表情を浮かべている。

彼女の呪式銃は、触手の防御魔術の影響で、本来の威力を発揮していない。

戦車を貫通し、深さ数メートルのクレーターを抉る規格外の銃なのだ。

それが今は襲ってくる触手を迎撃することしかできずにいる。そのせいで王女もストレスを溜めこんでいるのかもしれなかった。

「〝守護者〟の枝……と言いましたね」

そのラ・フォリアが、不意に思い出したように呟いた。

それはメイヤー姉妹が何気なく口にした言葉だった。彼女たちは、自らの〝守護者〟を枝と呼んだのだ。触手ではなく、枝だと――

「軟体動物ではなく、植物ですか……」

ふふっ、と愉快そうに王女が笑う。

「なるほど。メイヤー姉妹が引き起こした事件で、巨大な森が一夜にして消滅した出来事がありましたね」

「〝アッシュダウンの惨劇〟ですか」

紗矢華はその事件の名前を思い出す。

今から十年以上も前、欧州の西北、北海帝国の都市アッシュダウン近郊で、メイヤー姉妹は謎の魔術儀式を行った。その際に発生した異常現象によって、都市周辺の森がおよそ二百へクタール消失。荒廃したアッシュダウンの街は、それから間もなく放棄されてのメイヤー姉妹の名を、世界に知らしめた事件である。

だが、その事件に関しては、現在でもふたつの疑問が残されている。

漆黒と緋色の魔女姉妹が、アッシュダウン近郊で行っていた魔術儀式とはどのようなものか。

そして消滅した森は、どこに行ったのか――

「まさか……じゃあ、この〝守護者〟の正体は……」

「ええ。失われた森の木々すべてが、悪魔の眷属として怪物化した姿だと考えれば、この圧倒的な質量にも得心がいきます。いくら斬り倒しても、無駄でしょう」

唖然と唸る紗矢華を見返して、ラ・フォリアが肩をすぼめる。

「……ですね」

紗矢華はうなずいて、構えていた剣を降ろした。攻撃を続けても無駄だと悟ったのだ。

そんな紗矢華たちの様子を眺めて、喜色を浮かべたのは魔女の姉妹だった。

「あらあら。小娘どもが何か囀っているみたいですわ、お姉様」

「ええ、本当に。命乞いの相談でも始めたのかしら」

無駄なことを、と二人の魔女が耳障りな声で笑う。
勝ち誇る彼女たちを憐れむように眺めて、銀髪の王女は首を振った。
「いいえ。思ったよりも、つまらない仕掛けでした、と申しているのです」
「そうですね。属性がわかってしまえば、打つ手はいくらでも」
紗矢華も平静な声で同意する。トリックのばれた退屈な手品を眺めているせっかくの挑発を軽くあしらわれてしまったことで、決定的にプライドが魔女の姉妹が、と猛々しい怒号を撒き散らす。
彼女たちの怒りぬがあ、に反応して、〝守護者〟の攻撃が激しさを増した。
ラ・フォリアは優艶な微笑を浮かべたまま、黄金の拳銃を構えて前に歩み
「任せます、紗矢華。それまで前衛はわたくしが」
「はい」
、紗矢華が剣を下ろしたまま後退した。ちょうど王女に攻撃を任せて、ポジション
形になる。
迫り来る触手を怯むことなく見つめたまま、王女は拳銃を逆手に持つ。黄
彼女の拳銃には、銀色の銃剣が装着されていた。それをナイフのように構
アは祈りの詩を詠う。
「――我が身に宿れ、神々の娘。楯の破壊者。雹と嵐。勝利をもたらし、死
を運ぶ者よ！」

ほっそりとした王女の身体へと、不気味な触手たちが殺到した。餓えた大蛇の群れを思わせる凄愴な光景だ。勝利を確信した魔女たちが、口唇を歪めて笑い、

「なっ!?」

その笑顔が、一時に眩い閃光に照らされて凍りつく。

光の源はラ・フォリアの銃剣。青白い輝きが炎のように噴き上がり、巨大な剣の姿へと変わる。刃渡り十数メートルにも達する光の大剣だ。

その剣は押し寄せる触手の群れを、干涸らびたパン屑を潰すように粉砕した。

「お、お姉様！」

「精霊の加護の光……そんなこと、ありえるはずが……」

無抵抗に斬り裂かれていく〝守護者〟を見つめて、魔女姉妹はパニックに陥っていた。

王女が振るう閃光の正体は、アルディギア王国の騎士団が誇る疑似聖剣（ヴェルンド・システム）だ。大量の霊力を武器に注ぎこみ、武器の霊格を、一時的に聖剣クラスにまで引き上げるという戦術支援兵器。本来は大型の精霊炉による霊力供給を必要とする装備だが、霊媒であるラ・フォリアは自らの体内に精霊を召喚し、単独でそれを再現する。

魔族にとって致命的な精霊の輝きが、魔導書の防御魔術を無効化し、触手の群れを刈り取っていく。雑草をむしっていくような、圧倒的な破壊だ。

「――獅子の舞女たる高神の真射姫が讃え奉る」

そして新たに聞こえてきたのは、紗矢華が紡ぎ出す荘厳な祝詞だった。

紗矢華の剣は、いつの間にか弓へと形を変えている。近未来的なフォルムの洋弓だ。つがえているのは伸縮式の金属矢。その武器は、〝六式重装降魔弓〟と呼ばれていた。獅子王機関の誇る試作型可変制圧兵器である。

「極光の炎駒、煌華の麒麟、其は天楽と轟雷を統べ、憤焔をまといて妖霊冥鬼を射貫く者なり――！」

紗矢華が、自らの頭上へと矢を放つ。飛翔する鳴り鏑矢が、慟哭の声に似た遠鳴りを放つ。

魔弓〝六式重装降魔弓〟が放つ鏑矢は、人間の声帯や肺活量では唱えられない、高密度の呪文詠唱を可能にする。矢ではなく、そこから放たれる呪文こそが、攻撃の本体なのだ。

獅子王機関の舞威媛は、呪詛と暗殺の専門家だ。

紗矢華の放った凶悪な呪いは〝守護者〟にかけられた魔術を解除し、その本体を炎に包む。

呪いは〝守護者〟の根を経由して、二百ヘクタールを超えるアッシュダウンの森すべてに、致命的な効果を及ぼした。

浄化の炎が森を焼き払い、メイヤー姉妹の〝守護者〟を消滅させるまでに、かかった時間はわずか数分足らず。焼け焦げた魔法陣の痕跡だけを残して、すべての怪異は消滅する。

「森が……消えた……なんて、そんな……」

「わ、私たちの……アッシュダウンの守護者が……」

敗北を悟った魔女姉妹は、魔導書を後生大事に握りしめたまま、我先に逃げだそうとした。

しかし彼女たちの表情は、すぐに絶望で引き攣った。

階下で待機していた特区警備隊の隊員たちが、触手の消滅に気づいて雪崩れこんできたのだ。

〝守護者〟を失った魔女たちに、高度六十メートルを超える屋上から逃走するすべはない。足元に威嚇射撃を浴びて、二人の魔女はその場にへたりこむ。

「お、お姉様……!?」

「嘘……私たちが、こんな愚民どもに捕まるなんて……」

震えながら抱き合う魔女姉妹を、警備隊員たちが捕縛する。

呪文の詠唱を妨害する鼻栓と念話を防ぐ頭巾の装着。

――〝魔族特区〟の治安維持を任務とする彼らは、魔女を拘束するためのノウハウを蓄積し、充実した対魔女用装備を与えられている。メイヤー姉妹程度の能力で、逃走するのはほぼ不可能といっていいだろう。

「……」

それでも紗矢華は、警戒を解かずに王女の傍らに立っていた。

成り行きで魔女と戦う羽目に陥ったものの、紗矢華の本来の任務は、あくまでエラ・フォリアの護衛である。王女が絃神島を出るまでは、紗矢華には彼女を守る義務があるのだ。

絃神島全域が空間異常に覆われていたころとは、すでに状況が変わっている。空間を歪めて

いた魔導書は失われ、王女が危険にさらされる可能性は消滅した。仙都木優麻はいまだに健在だが、ラ・フォリアにはもう彼女と戦う理由はない。

そして、義務に縛られているのはラ・フォリアも同じだ。王女という立場が邪魔して、今の彼女は自由に動けない。古城たちの援護をしたくても、彼女にはそれができない事情がある。

その結果、紗矢華もこの場を動けない。監獄結界と古城たちの危機を知りながら、どうすることもできない。その事実に紗矢華が内心、葛藤を覚えていると、

「姫様、ご無事で――？」

突然、彼女たちの背後から、野太い男の声が聞こえてきた。

ホバリングを続ける特区警備隊のヘリから、仰々しい装甲戦闘服を着こんだ男たちが降りてくる。アルディギアの騎士団員。ラ・フォリアの部下である。

「あなた方も大儀でした。首尾はいかがですか？」

騎士たちを労うように微笑み、ラ・フォリアが訊いた。特区警備隊との密約で、アルディギアの騎士たちは市街地での特殊任務に就いていたのだ。

「LCOの残党四組を撃破。魔導書七冊を押収しました。陛下へのいい手土産になりましたな」

無事に任務を果たした騎士団の小隊長が、やや得意げな表情で報告する。

「そうですね。勝手に騎士団を動かした言い訳くらいはできそうです」

ラ・フォリアは悪戯っぽく笑ってうなずいた。

アルディギアの騎士団が、絃神島に上陸したLCO構成員の確保に協力する。その代わりに彼らが所有する（それがラ・フォリアの提示した条件だ。

特区警備隊（アイランド・ガード）は魔導書（どうしょ）を引き取らせてもらう

交慣れしたラ・フォリアらしい、絶妙の取りきだといえた。

戦力不足が解消され、アルディギア王国は貴重な魔導書を手に入れられる。外

王妹殿下のご健在も確認できました。現在は笹崎岬（ささざきみさき）攻魔官（こうまかん）の保護下にあるとのこと」

「……笹崎岬？　四拳仙（しけんせん）の〝仙姑（せんこ）〟ですか？」

「どうやらそのようで」

小隊長が厳（おごそ）かに、紗矢華（さやか）もよく知っていた。

武術と仙術を極めた近接戦闘（せんとう）の達人だ。その中の一人は、獅子王機関（ししおうきかん）にも武術教官として雇われていた。見習い時代とはいえ、紗矢華と雪菜（ゆきな）が、二人がかりで仕合を挑み、指一本触れることもできなかったという化け物である。

その化け物と同格の人物が、叶瀬夏音（かなせかのん）を保護している。その事実を知って、ラ・フォリアが安堵（あんど）の表情を浮かべた。彼女らしからぬ、裏表のない素直な表情だ。

そして王女は出し抜けに紗矢華のほうへと向き直り、

「もう少し事の成り行きを見守っていたかったのですが、どうやら時間切れのようです。わたくしは、すぐにこの国を離れます」

「あ……はい」

性急とも思えるラ・フォリアの発言に、紗矢華は一瞬、怪訝な表情を浮かべた。

しかし、すぐに彼女の真意に気づく。

王女が日本を出れば、紗矢華の任務は終わる。自分の判断で自由に動くことができるのだ。

獅子王機関から新たな任務を命じられるまでは、古城と雪菜の援護に回ることも可能なはずだ。

「あなたにはずいぶん苦労をかけてしまいました。次の任務までに十分な休養が得られるよう、わたくしからも獅子王機関にお願いしておきましょう」

ラ・フォリアは、そう言って不思議な表情を浮かべる。

秘密を共有する者同士だけに伝わる、意味深な微笑。

「感謝します、王女」

紗矢華は力強くうなずいて長剣の柄を握りしめる。彼女たちの事件はまだ、終わっていない。

7

崩れかけた聖堂の中へと、古城たちは移動する。優麻の空間転送だ。古城と雪菜は、激しい目眩とともに、埃まみれの硬い床の上に投げ出される。

優麻が、どうして自分だけでなく、古城や雪菜まで連れて空間転移したのかはわからない。

だが、ぼんやりと想像することはできた。
優麻は誰かに見届けて欲しかったのだと思う。
彼女の目的が果たされる瞬間を。自分がこの世に生まれてきた意味が潰える瞬間を――
「那月ちゃんが……監獄結界の鍵？」
どういうことだ、と古城が訊く。
聖堂の広間に置かれた椅子の上で、南宮那月は眠り続けている。
彼女が身につけているのは、レースアップされたフリルまみれのドレス。常夏の絃神島にはあるまじき暑苦しい衣装だ。しかし人形のように眠り続ける今の彼女には、恐ろしいほどによく似合う。
優麻が力ずくで監獄結界の封印を破ったのだろうか。
だが、波朧院フェスタの前日に失踪した那月が、どうしてこんな場所に一人きりでいるのか、占城にはまったく理解できない。そもそもここで眠っている那月は、本当に古城の知っている彼女なのだろうか。
「――考えてみればいいよ。人工島管理公社ですら所在地を確認できない異空間にある監獄に、誰がどうやって囚人たちを送りこんでいるのか」
優麻が、眠っている那月を冷ややかに睨んで言った。

「〝空隙の魔女〟南宮那月は、監獄結界の看守であり、門番であり、そして鍵だ。そもそも監獄結界というのは、凶悪な魔導犯罪者を封印するための魔術の名前――その唯一の使い手が彼女なんだ」

占城は、無言で優麻の説明を聞く。言われてみれば、単純な理屈だ。

監獄結界とは、那月が維持していた魔術。だから彼女はこの聖堂の中にいた。そして結界が破壊された衝撃を、その身にまともに受けることになった。

魔女とは、悪魔と契約を交わした女性の異称だ。悪魔の従属である〝守護者〟を経由して、彼女たちは悪魔と同じ力を使う。人間の身でありながら上位魔族に匹敵する魔力を操り、魔術の技量は最高位の魔術師をも凌駕する。

ただし悪魔との契約には、代償が必要だ。

優麻が支払った代償は、監獄結界の解放という絶対命令の刷りこみ。彼女はその命令を果たすためだけに生み育てられ、それと引き替えに空間制御の力を与えられた。

それでは、那月が支払った代償とはなんなのか――

その答えが、監獄結界ではないのか？

この巨大な空っぽの監獄を、たった一人で、死ぬまで封印し続けること。

それが彼女に科せられた呪い。悪魔と交わした契約なのだとしたら――？

「この聖堂は、南宮那月の居城なんだ。彼女はずっとここで暮らしていたんだよ。十年前から

一度も外に出ることなく。たった一人きりで薄暗い聖堂の中を見回して、優麻が言う。

「そんなの、おかしいだろ。那月ちゃんは、南宮那月は彩海学園の英語教師。占城たちずっと俺らの学校で教師として働いてたぞ」

屋敷を構えて、アスタルテと夏音を引き取って暮らしている。異世界に封印されていた殺風景な聖堂に、彼女が寝泊まりしなければならない理由はない。

しかし優麻は、哀しげに微笑んで肯定することはできなかった。

「キミが知っている南宮那月は、本物の彼女が魔術で生み出した幻影だ。ここにいる哀れな少女が見ていた、ただの夢だよ」

「幻影……だと……？」

優麻の言葉に、占城は呼吸を忘れる。

あり得ない、と否定することはできなかった。那月ほどの魔女ならば、造作もないだろう。

りだして、普通の人間のふりをすることなど異様に若々しい——というよりも、那月が幼いまま歳をとらない理由もそしてなによりも、那月がいた那月そっくりの少女が誰なのか、ほかに納得できる説明を古城は思いつけない。

「幻影をいくら壊しても意味がない。だからこれまでＬＣＯは彼女に手が出せなかった。監獄

結界の封印が解けて、彼女の本体がこちらの世界に戻ってくるまでは」

優麻が、眠り続ける少女に向かって歩き出す。彼女の背後に浮かび上がった青騎士が、鉄槌のように巨大な拳を振り上げた。その〝守護者〟の一撃は、無防備に眠り続ける小柄な少女を、易々と絶命させるだろう。

優麻が、喉から絞り出すように声を出し、

「監獄結界の犯罪者たちは、この少女の夢の中に囚われているんだ。彼女を破壊せば、囚人たちは解放されるんだろ？」

「――解放して、どうする？」

唐突な古城の問いかけに、優麻の足が止まった。

「監獄結界を解放するためだけに生み出されたおまえが、役目を果たし終えたらどうなるんだ？　母親がおまえを褒めてくれるのか？」

「古城……」

「違うだろ……さっきの燃え尽きた魔導書みたいに、ゴミみたいに捨てられて終わりなんじゃないのかよ!?」

それが本当におまえの望むことなのか、ユウマ!?」

眠り続ける那月を背後に庇って、古城が優麻を睨みつける。

今にも泣き出しそうな表情で微笑んで、優麻は首を振った。

「わかってるよ、古城。ボクの行動になんの意味もないことは、ボクが誰よりもよく知ってる」

「だったら――！」

「だけど決められた運命には逆らえない！　それが悪魔との契約の代償だ！」

優麻が悲痛な声で絶叫した。古城の肉体に入っているはずの優麻の面影が、なぜか幼いころの彼女と重なる。

「ボクにはこの運命しかないんだ。これを無意味だと認めてしまったら、ボクがここにいる――ボクのすべてが無意味になってしまう！」

「違う！」

古城が、一歩、足を踏み出す。それに気圧されたように、優麻が一歩後ずさる。

「おまえが自分で言ったんだ。おまえには俺がいる。俺が、おまえの生きてる意味を認めてやる。だからおまえは、そんなくだらない運命になんか従わなくていいんだよ！」

第四真祖の能力を奪われ、それらを奪った本人に向かって、それでも古城は迷いなく断言する。優麻の目元に、瞬だけ泣き笑いのような表情が浮かんだ。

「……まるでプロポーズの言葉だな」

「え？」

「昔から、そういう言葉を平気で口にできるやつだったよ、古城は。それでずいぶん苦労したくせに、いまだに自覚がないんだな……でも、ありがとう。嬉しいよ……もう、それだけで、それだけで十分だ、と優麻の唇が動いた。

やめろ、と古城は叫ぶことすらできなかった。
なぜならそのとき、すでに優麻の姿は消えていたからだ。
彼女は古城の死角に出現する。眠り続ける那月の背後へと。
そして傷だらけの青騎士が、彼女を叩き潰そうと鋼の拳を振り下ろし
「ぐっ!?」
その拳を真正面から受け止めたのは、光り輝く銀色の槍だった。メルヘン風味の青いドレスを着た少女が、頭上に振りかざした槍で、巨大な騎士の腕を防いでいる。
「――姫柊!?」
青騎士の身長は、小柄な雪菜の倍近く。鎧に包まれたその重量は、彼女の十倍にも達するはずだ。まともに受けきれる攻撃ではない。
しかし雪菜の槍は、魔女の〝守護者〟の甲冑を易々と貫通し、その拳を破壊する。
「その槍、そうか……七式突撃降魔機槍〟か……」
優麻が表情を強張らせた。あらゆる魔力を無効化する破魔の槍。魔力で実体化を保っている魔女の〝守護者〟にとっては、この上なく相性の悪い武器である。
「獅子王機関より派遣された、第四真祖の監視役です」
キン、と大気を切り裂く音を鳴らして、雪菜が槍を旋回させた。ニつ又の穂先が、優麻の心臓に向けられる。その構えが、雄弁に彼女の立ち位置を表明していた。古城による優麻の説得

が失敗した以上、手加減はしない、と言っているのだ。

「――暁先輩の肉体、回収させてもらいます！」

「甘いな……」

優麻が淡く失笑しながら、立ち尽くしている古城のほうへと、瞬、

「その槍の力なら、ボクの本来の身体を攻撃すれば、簡単にケリをつけられるのに……それをしないのは、古城に感化されたのか。やっぱりきみも古城にたぶらかされた口かな？」

「違います！」

雪菜が妙にムキになって言い返す。

「げ、現状ではこれが最善だと判断しただけです！　空間制御術式が破魔力が暴走する可能性がある以上、優先してその身体を回収する必要があるという、極めて合理的な分析の帰結です！　それに――」

「っ!?」

言い終える前に、聖堂の床を蹴りつけて雪菜が跳んだ。颶風と化して放たれた彼女の槍が、正確に優麻の胸元へと突きこまれる。

「――どちらも難易度は大差ありませんし」

雪菜の言葉はハッタリではない。獣人すら圧倒する雪菜の攻撃速度に、近接戦闘能力を持たない優麻は反応できない。

「〝ルルー〟！」

優麻が〝守護者〟を斬り裂いた。青白い火花を撒き散らし、青騎士の分厚い装甲を、雪菜の槍は空気も同然に優麻は舌打ちして防御を命じた。しかし空間を歪めた。空間転移が苦悶の咆哮を放った。

「無駄です！」

雪菜が、最初からそれを知っていたかのように反転し、優麻の出現地点へと斬撃を放った。

剣巫の未来視能力を持つ戦闘中の彼女に、単純な奇襲攻撃は通用しない。

破壊された装甲の破片を散らして、青騎上の巨体がよろめいた。

「その肉体を操っている限り、あなたの〝守護者〟は、魔力の大半を空間接続に使わなければなりません。戦闘能力はほとんど残されていないはず」

「たしかに……今の状況で獅子王機関の剣巫を倒すのは難しいだろうね」

優麻はあっさりと自分の不利を認めた。剣巫は、吸血鬼の真祖とも互角に戦い得る、対魔族戦闘のプロだ。魔女ごときが無策で太刀打ちできる相手ではない。

「だけど、忘れてないか。ボクはキミと馬鹿正直にやり合う必要なんてないってこと――！」

そう言い残して、優麻が空間転移する。転移先は、雪菜が追撃できない聖堂の上空だ。

「しまっ――!?」

優麻の狙いに気づいて、雪菜が表情を凍らせた。

青騎士が攻撃魔術を起動する。初歩的な火球の魔術だが、魔女の魔力でそれを放てば、ちょっとした爆弾並みの威力になる。そして優麻が攻撃対象として選んだのは、雪菜でも那月でもなかった。眠り続ける那月の頭上。石造りの聖堂の天井だ。

あらゆる魔力を無効化する〝雪霞狼〟も、降りそそぐ石塊に対しては無力である。

重力に引かれて落下する数トンもの質量から、那月を守る手段はない。

だが、雪菜が絶望を覚えた瞬間、その場所にはすでに古城が走りこんでいた。

「だあああっ――！」

那月の小柄な身体を担ぎ上げ、そのまま床へと転がる古城。一瞬遅れて落下してきた石塊が、那月の座っていた椅子を粉々に押し潰す。

「先輩……!?」

雪菜が驚愕に目を瞬いた。剣巫である彼女の未来視よりも早く、古城は優麻の攻撃を予知していた。その事実に驚いたのだ。

彼女が抱いた疑問の答えは、古城の口から語られる。

「悪いな、ユウマ。おまえがスリーポイントを狙ってるときの顔は、よく覚えてるぜ」

埃まみれの顔を上げて、古城は不敵に笑ってみせた。懐かしい幼なじみの得意技を、古城はまだ忘れていない。優麻の奇襲を、彼は最初から警戒していたのだ。

「古城……っ！」

着地した優麻が、ひどくつらそうに顔を
「どうしてまだそんなふうに笑うんだ!?
生まれながらの魔女なのに！　キミの住んでいる街を破壊して、キミの
していると――――！」
「優麻……」
悲痛な叫びを洩らす旧友を、古城は呆然と見つめ返す。その視界が突
自分自身の額から流れ出した鮮血が、目
「なんだ……これは……!?」
血まみれの自分の姿に気づいて、古城は
転倒の際に負った傷ではない。痛みもな
そこから激しく出血している。
考えられる可能性はひとつだった。優麻
強引な空間接続で古城の身体を乗っ取り
呼び出そうとした。雪菜との戦いで彼女の
いくら魔女でも、とっくに限界を超えて
崩壊を始めている。
「優麻さん！」雪菜が声を震わせた。「も

あなたの身体は――」

「関係ない……！」逆流してくる苦痛に唇を引き攣らせながら、それでも優麻は凄絶に笑った。

「あと少しで、ボクの役目は終わる。これでようやく……白田に……」

雪菜が無言で唇を噛む。そして彼女は深々と息を吐き出した。銀色の槍が音もなく旋回し、艶やかな髪がさらりと流れる。もはや優麻を救うために残された方法は、ただひとつ――

一刻も早く勝負を決着させることだけだ。

「――獅子の神子たる高神の剣巫が願い奉る」

雪菜の唇が、肅々と祝詞を紡ぎ出す。銀色の槍とともに、彼女が舞う。神に勝利を祈願する剣士のように。あるいは勝利の預言を授ける巫女のように。

「破魔の曙光、雪霞の神狼、鋼の神威をもちて我に悪神百鬼を討たせ給え！」

これまでに倍する爆発的な霊力が流れこみ、銀色の槍が閃光を放った。その閃光をまとって雪菜が疾った。優麻には雪菜の動きが見えていない。〝雪霞狼〟の一撃は、狙い違わず優麻の心臓を刺し貫く。

――古城の肉体の心臓を刺し貫く。

そう思われた瞬間、雪菜の攻撃が止まった。銀色の槍の先端は、古城の胸には届いていない。瞬きするほどの刹那の時間、雪菜は攻撃を躊躇してしまったのだ。

そのわずかな隙を見逃さずに、優麻が動いた。

青騎士の巨大な拳が、横殴りに雪菜を襲ってくる。雪菜はかろうじてそれを槍で受け止めた。

だが、衝撃までは止められない。小柄な彼女の身体が吹き飛び、数メートルも離れた床の上に叩きつけられる。

「姫柊！」

「……大丈夫、です……これくらい……」

駆け寄ろうとする古城を制止して、雪菜がふらふらと身体を起こす。銀色の槍に手を伸ばし、拾い上げたその槍が再び床に転がる。青騎士の攻撃をまともに受け止めたせいで、腕の感覚が麻痺しているのだ。

「優しい子だな、キミは」

優麻が、膝立ちの雪菜を眺めて言った。嘲るような口調ではなかった。むしろ隠しきれない羨望の響きが滲んでいる。

「あらゆる魔力を無効化する獅子王機関の秘奥兵器――いくら吸血鬼が不老不死でも、〝七式降魔突撃機槍〟に貫かれて、本当に復活できるかどうかはわからない。だからキミは攻撃を止めた。殺せなかったんだ、古城の身体を――」

「……なんのことだか、わかりません。今のは、少し油断しただけです」

槍を杖代わりに使って、雪菜がどうにか立ち上がる。

しかし今の彼女はもう、戦えるような状況ではない。少なくとも本来の戦闘力は望むべくもないだろう。なにしろ武器を構えることもできないのだ。

「何度やっても同じことだよ。それは自分でもわかってるんじゃないのか？」

傷ついた雪菜を哀れむように、優麻が言う。たとえ何度立ち上がっても、古城の身体を傷けられない以上、雪菜に勝ち目はない。

だが、勝利を確信していたはずの優麻の表情が、不意に驚きに固まった。

「先輩……？」

ふらつく雪菜に寄り添うように、古城が背後から彼女を支えた。

銀色の槍に手をかけて、二人一緒にそれを構える。

「古城……どうして……？」

自分が誰の身体に槍を向けているのかわかっているのか——そう言いたげな表情で、優麻が訊く。〝七式突撃降魔機槍〟は、真祖すら殺し得る破魔の槍だ。古城がそれを自分に突き立てるということは、自殺も同然の無謀な行為である。

「悪いな、ユウマ。おまえをぶっ飛ばして、俺は俺の身体に戻る。今のおまえじゃ、いつもみたいに姫柊の血も吸えないしな」

しかし古城は獰猛に笑って言い放つ。雪菜がムッと唇を曲げる。

「行くぜ、ユウマ——ここから先は、暁古城の戦争だ」

雪菜の手から槍を奪い取り、古城が優麻に向かって突進する。予想したよりもずっしりと重い。しかしどうにか振り回せない重量ではない。

〝七式突撃降魔機槍〟は

「古城――っ！」

優麻が苦悩の声で叫び、姿を消す。空間転移――！

だが、それは最初から予想できたことだった。

優麻は、古城の意識を――すなわち彼女自身の身体を攻撃することができない。

彼女の身体が傷つけば、空間制御の魔術が解けて、古城の意識は、傷ついた自分の肉体に戻って行動不能に陥るからだ。古城が自分自身の肉体へと戻る。

そして優麻の意識は、傷ついた自分の肉体に迫ってきたら、優麻には逃げるという選択肢しかないのだ。

身体を殺す気で行き先も、わかっていた。

そして優麻の目的は那月の抹殺だ。古城が那月の傍から離れれば、当然、優麻はそちらへと跳ぶ。

優麻の目的は眠り続けている那月を殺せる場所へと。

だから古城は、待たなかった。

空間転移した優麻が再び姿を現す前に、渾身の力をこめて、槍を投げる。

「う……！」

通常空間へと復帰した優麻が目にしたのは、自分の心臓を目がけて飛来する銀色の槍。

「っ！」

通常空間へと悟った優麻が、自分の〝守護者〟に防御を命じる。分厚い甲冑をまとった青〝蒼騎士（ルー・アルー）〟――〝雪霞狼（せっかろう）〟も本来の魔

避けきれないと悟った優麻が、自分の〝守護者〟に防御を命じる。分厚い甲冑をまとった青〝蒼騎士（ルー・アルー）〟――〝雪霞狼（せっかろう）〟も本来の魔

騎士が、交差させた両腕で槍を防御（ガード）。霊力（れいりょく）を持たない古城の投擲（とうてき）では、

力無効化能力を発揮できない。〝守護者〟の防御は破れない――！

「駄目かっ!?」

古城が軽い絶望を覚えた。

その直後、古城の視界を横切ったのは、青いドレスを着た小柄な少女だった。

華やかな笑みを浮かべて、彼女は空中で旋回し、強烈な後ろ回し蹴りを――。

青騎士の腕に突き刺さる、銀色の槍の石突きへと。

「――いいえ、先輩。わたしたちの勝ちですよ」

雪菜の言葉が終わる前に、〝雪霞狼〟が眩い輝きを放った。痺れたままの手ではなく、蹴りつけた足の先から槍に霊力を流しこんだのだ。

神格振動波をまとった獅子王機関の秘奥兵器は、青騎士の両腕を貫き、甲冑に覆われた胴を貫通し、そして暁古城の胸元を深々と抉った。

「馬鹿な……どうして、古城……」

放心したような優麻の呟きは、ガラスが砕け散るような甲高い衝撃波にかき消される。

空間制御の魔術が無効化され、その反動が大気を揺らしたのだ。

青騎士の巨体が、空間に溶けこむように消失する。

そして残された古城の肉体が、糸の切れた操り人形のように、ゆっくりと仰向けに倒れこむ。

しかし古城の背中に伝わってきたのは硬い床の感触ではなく、包みこむような柔らかな弾力

だった。転倒する直前の古城の身体を、雪菜が背後から抱き止めたのだ。

古城の胸元には、深々と槍に抉られた痕が残っている。だが、ギリギリで心臓は外れていた。

高い再生能力を持つ吸血鬼にとっては、致命的な負傷ではない。

とはいえ重傷には変わりなく、鮮血にまみれた胸元を押さえて、暁古城が弱々しくうめく。

「痛エ……」

そんな第四真祖の表情をのぞきこんで、雪菜が安堵の息を洩らす。

凛々しくもなく、さりとて悲壮感もない。どことなく気怠げだが、ありふれた高校生の表情。

それは彼女がよく知っている、いつもの少年の顔だった。

本人に聞こえないように、そっと彼の耳を両手で寒いで、雪菜はーの中だけで優しく呟く。

「おかえりなさい、先輩――」

終章

Outro

絃神島――人工島の北端の岸壁。眩く降りそそぐ陽光の中に男は立っていた。金髪碧眼の美しい青年貴族。ディミトリエ・ヴァトラーだ。

彼の視線の先にあるのは、壊れかけの占い聖堂。真の監獄結界を守護する最後の城塞である。

吸血鬼の超視力で、彼は事の顛末をすべて見届けていた。

第四真祖の身体を奪った仙都木優麻が、獅子王機関の剣巫と暁古城の連携に破れたことも。

そして監獄結界の本体が、今も通常空間に、無防備な姿で残されているということも――

「仙都木阿夜の娘は、ここまでか。残念だな」

口元に笑みを滲ませたまま、無念さを微塵も感じさせない口調で、ヴァトラーが呟く。どこか子どもっぽい仕草で、人差し指を伸ばしてリズムを刻む。

「とはいえ、最後の鍵くらいは、自分の手でぶち壊すという選択肢もありかな――」

細めた彼の碧眼が、血のような深い紅に染まった。全身から立ち上る禍々しい血霧が、やがて巨大な蛇の姿へと変わる。

それはディミトリエ・ヴァトラーが〝血〟の中に宿す、九体の眷獣のうちの一体だ。水圧を操る海蛇の眷獣。あの聖堂内の大気を一瞬で数千気圧まで圧縮することも、逆に真空状態に変えることもできる。

眠り続けている南宮那月を殺し、彼女の夢の中に囚われている魔導犯罪者たちを解放する。

ついでに、ヴァトラーの眷獣が、第四真祖に通用するか試してみるのもいい。獅子王機関の剣巫が、その危機を乗り越えられるか、確認してみるのも悪くない。

だが、その前に――と、ヴァトラーは背後を振り返る。

「〝娑伽羅(シャカラ)〟！」

そして自らの眷獣を、手加減抜きで解放した。

絃神島北地区(アイランドノース)の〝魔族特区〟内の企業が、原材料や資材を輸送船に積みこむための工業港コンテナヤード――である。波朧院(はろういん)フェスタ開催機関ということで、港の業務は休止しており、港湾職員たちも残っていない。ヤード内には無数のコンテナが、空っぽのまま積み上げられている。

その山積みのコンテナの上に、見知らぬ人影が立っていた。

十代前半の小柄な娘だ。しかし、その娘がまとっている魔力の波動を、ヴァトラーは敏感に察知していた。だからこそ眷獣を放ったのだ。

ヴァトラーの眷獣は、宿主(やどぬし)の殺意に導かれるまま、自らの肉体を超高圧の水流へと変えて娘を襲(おそ)う。

十万気圧――黒炭をダイヤモンドに変化させるほどのヴァトラーの眷獣の一撃を、しかし、娘は片手で払いのけた。〝旧き世代〟の吸血鬼の眷獣を素手で防いだのだ。

その衝撃で竜巻(たつまき)のような突風が吹き荒れ、コンテナのいくつかが崩れ落ちる。それでも娘は、

表情を動かさずにヴァトラーを見下ろしていた。
「そこまでだ、蛇遣い……今はまだ、我らの眠りを妨げるな……」
冷たく澄んだ声で、娘が言う。別人の口を借りて喋っているような、ぎこちない口調だ。
娘は、黒いワンピースを着ていた。
絞りこんだウェストが、幼い身体の線をくっきりと浮かび上がらせている。
模したカチューシャ。黒いニーソックスの足元は肉球付きのブーツである。
模した仮装用の衣装らしい。よく見れば尻尾もついているようだ。
しかし、そんな可愛らしい衣装とは裏腹に、虹彩の開ききった娘の瞳は、どうやら、黒猫をいない。ただ唇だけが笑っている。
「誰だい、キミ？」
ヴァトラーが愉快そうに唇を吊り上げて訊いた。
娘はなにも答えない。彼女の髪はずいぶん長いが、普段は短くまとめているせいか、奇妙なクセがついている。その娘が、暁凪沙という名前で呼ばれていることを、ヴァトラーは知らない。そして今の彼女自身が、その名前を口にすることもない。
「――答える気はない、ということかい」
ヴァトラーの左右に、新たな眷獣が現れる。合計二体の巨大な眷獣が、一体の眷獣へと姿を変える。二つ首の龍――漆黒の鱗と翼を持つ悪龍だ。
螺旋状に絡みつき、

無制限に周囲の大気を吸いこんで、その悪龍は質量を増していく。神話や伝説の怪物にも等しい姿だ。乱気流や台風といった自然災害が肉体を手に入れたら、おそらくこのような姿になるのではないかと思われた。

「ならば、代わりにキミに遊んでもらおうか――！」

その怪物を、ヴァトラーは、猫耳の少女めがけて解き放つ。

たった一人を的にするには、巨大すぎる脅獣だ。攻撃の余波だけで、紘神島の人工地盤にも相当な被害が出ることになるだろう。もちろん爆心地に立っている娘は、ひとたまりもない。

することになる。その様を見届けるためにヴァトラーは目を細め、そして跡形すら残さず消滅

次の瞬間、彼の全身は、不可視の衝撃を喰らって吹き飛ばされていた。

「グッ……ガハッ……！」

散らす。娘に向けて放ったはずのヴァトラーの攻撃が、彼自身に逆流していた。

最初の位置から九十メートルほど離れた突堤に叩きつけられて、ヴァトラーは血反吐を撒き

全身の血液が、急激な圧力と大気摩擦で沸騰していたのだ

いし、無傷の骨は一本もない。普通の人間や魔族はもちろん、まともな吸血鬼でも即死だろう。

それでも意識を失っていないのは、真祖の血を受け継ぐ吸血鬼の貴族ならではだ

魔力の供給を絶たれたヴァトラーの脅獣は、すでに実体を失って消滅している

代わりにそこに出現していたのは、氷河のように透きとおる新たな脅獣だった。

全長十メートル足らずの美しい眷獣だ。しかも下半身は人間の女性に似ており、下半身は魚の姿である。そして背中には翼が生え、指先は猛禽のような鋭い鉤爪になっていた。氷の人魚、あるいは妖鳥――

冷たい凍気をまとう眷獣が、猫耳の少女を守護するようにヴァトラーを睥睨する。

ヴァトラーの眷獣を消滅させ、彼に瀕死の重傷を負わせたのは、その氷の眷獣だったのだ。

「馬鹿な……そいつは〝妖姫の蒼氷〟……アヴローラ・フロレスティーナの十二番目の眷獣だ。どうしてキミがその力を使える？」

全身をズタズタに引き裂かれた姿のまま、ヴァトラーが肩を揺らして笑い出した。

「いや。そうか……そういうことか……ハハハッ！　だからなのか――」

笑い続けるヴァトラーの喉からは血塊があふれ出し、全身の傷口から沸騰した体液がこぼれる。それでも彼は笑うのをやめない。狂気を感じさせる晴れやかな哄笑だ。

「暁古城が、アヴローラを喰らって第四真祖の力を手に入れた理由はそれか……おまえはずっとそれを見ていたんだな。クハハハハッ……！」

「……少しは気が晴れたか……蛇遣い」

コンテナの上に立つ猫耳の少女が、呆れたような口調で訊いた。

「まあね……おかげで実にいい気分だヨ。そうだ、当然のことじゃないか。第四真祖の眷獣を、

第四真祖以外に使える者がいるとすれば、可能性はひとつしかない――」

ようやく笑うのをやめたヴァトラーが、ゆっくりと起き上がる。

砕けた全身の骨はほとんど修復を終えて、失われた内臓と右半身の再生も老不死といわれる吸血鬼の基準に照らしても、驚異的な回復力である。

復活した吸血鬼の貴族を眺めて、猫耳の少女が告げた。

「ひとつ忠告してやろう、ディミトリエ・ヴァトラー」

「……なにかな、十二番目？」

挑発的な目つきで、ヴァトラーが訊き返す。暁凪沙の姿をした少女は、一瞬だけ苛立たしげに眉を上げた。そして静かな口調で続ける。

「まだ、終わってないぞ。なにもな――」

十

暁古城は、薄暗い聖堂の中で目を覚ました。

意識をなくしていたのは、それほど長い時間ではなかったらしい。古城の背中が触れている床は、まだひんやりと冷たいままだ。

ただ、白い布地に触れている右の頬だけがほんのりと温かい。その布地が、自分を膝枕して

いる雪菜のドレスの一部だということに、
それでもその心地好い感触をもっとむさぼるべく、古城は無意識に寝返りを打ち、
「気がつきました、先輩？」
「――姫柊……!?」
耳元で聞こえてきた雪菜の声に驚いて、古城はまだ気づいていない。
次の瞬間、全身を貫く激痛に、ぐおっ、
ドプロセッサーにかけられているような痛と古城は苦悶する。まるで体内の全神経が、フー
「なんか、体中が死ぬほど痛ェ……」
「……やっぱり、予想どおりでしたね」
手間のかかる弟をあやしているようなつきで、雪菜がよしよしと古城の頭を撫でてくる。
あからさまに子ども扱いされているみたいで恥ずかしいが、吸血鬼である古城には治癒の魔術が効かないのだろう。病院に連れて行かれたどうしようもないのだろう。
以上、雪菜としても、ほかにところで、魔女に身体を乗っ取られていた後遺症とやらに、まともな治療薬が出てくるとも思えない。出てきたらそれはそれで恐ろしい。
「あのですね、姫柊さん。血、は……？」
吸血鬼の肉体を取り戻した古城には、ひとつだけ特効薬があるような気もするのだが、
「吸わせませんよ。絶対、吸わせませんからね。今までのは、緊急時で仕方なかっただけです

から！」

雪菜が、むーっ、と唇を結んで、古城の頬をつねる。そのことに古城は安心する。やはり、彼女には古城の真意が伝わっていたらしい。

これまで雪菜が血を与えてくれたのは、一回だけ。どちらも古城が死んだあとのことである。だから古城は言ったのだ。〝雪霞狼〟を使うことを躊躇っていた雪菜に、を吸わせてくれ、と。

たとえ古城が死ぬことになっても、それで復活してみせるから、と。

最後に容赦なく雪菜が〝雪霞狼〟を使ったのは、そのアドバイスが効いたのだと思いたい。

「気づいてくれて助かったぜ」

「ほかの人のいるところで、ああいうことはもう二度と言わないでください

そう言って雪菜が、再び古城の頬をつねる。人前じゃなければいいのか、と古城は、素朴な疑問を抱き、

「そうだ……ユウマは!?」

「無事です。空間接続が断絶したときの衝撃は、先輩ほどではないはずです」

雪菜が、古城の隣に横たえられている優麻に視線を向ける。

優麻の頬は青ざめたままだし、全身のあちこちには出血の痕が残っているし、苦痛に顔を歪めてもいる。しかし、命には別状はないらしい。彼女の胸は規則正しく上下していたし、

こうして外側から眺めてみると、やはり優麻は綺麗な顔立ちをしていた。囲気とは裏腹に、スタイルも意外なほど女のらしいメリハリが効いていもったたいないことをしたような気もする。彼りシャワーを浴びたりしてみても、許されたそんな不埒なことを古城がぼんやりと考えているとどうやら最初から意識は戻っていたらしい。「失敗……したのか、ボクは……」平坦な口調で、優麻がぼそりと呟いた。怒べてが剝がれ落ちた、死を待ち望む老人のよ幼なじみのそんな姿に、古城は激しい怒りこして優麻を睨んだ。「違う、そうじゃない。解放されたんだよ、優麻が驚いたように何度か目を瞬いた。その笑顔を打たれて、古城は頬を赤こんなしっとした表情が浮かべられるよ「古城」「なんだよ」

露骨に照れている古城を見上げて、優麻が悪戯っぽく訊いてくる。
「ボクの身体の中に入ってみて、どんな気持ちだった？」
「なっ……!?」ぐほっ、と古城は思わず咳きこんだ。「そういう誤解を招く言い方はやめろ！」
「いやらしいことはしなかった？」
「してねえよ！」
なぜか追い詰められた気分で大声を出す古城。必死になればなるほど嘘っぽくなるとわかっていても、この状況ではどうしようもない。隣にいる雪菜の不機嫌な眼差しが、ささくれだった神経に突き刺さる。
「……まったく、これだけの騒ぎを起こしておいて平和なものだな、おまえたちは」
そのとき古城たちの背後から、懐かしい声が聞こえてきた。舌足らずなようでいて、奇妙な振り返ると、そこには眠り続けていたはずの南宮那月が立っていた。
今の彼女は、魔術で作りだした分身ではなく、監獄結界に封印されていた本物の身体のはずである。しかし、古城は小難しく考えるのが馬鹿馬鹿しく覚えてくる。本物だろうが分身だろうが、結局、那月は那月ということだ。
「南宮先生、やっぱり起きてたんですね」
雪菜が、安堵したようにいう。監獄結界の鍵である彼女が目覚めてくれれば、封印を再度張

り直すなり、新たな防御システムを組むなりいくらでも手の打ちようがあるからだろう。

「まさか……寝たふりしてたのか……汚ェ」

占城が不満たらたらの目つきで、那月を見上げる。すると彼女は少しムッとして、

「力を温存していたのは事実だがな。第四真祖の眷獣の力をまともにくらったくせに恩師に手を上げるとはいい度胸だな。どれ、ご褒美をくれてやろう」

そう言って、いきなり占城の眉間にデコピンを喰らわせた。

「痛ってェェェェ！　それのどこがご褒美だ。ていうか、ここか？　ここがいいのかそっ……ピンピンしてるじゃねえかよ！」

「ん？　なんだ？」

「ぐおあ!?　くたまま、占城は涙目でうめく。だが、心なしか全身の絶え間ない激痛が、少し和らいでいるような気もした。もしかしたら、那月が魔術で古城を癒やしてくれたのかもしれない。それにしても、もう少しマシなやり方があるだろうに、と古城はふて腐れる。

そして那月はやれやれと古城を見下ろして溜息をつき、

「まったく……この私が教え子に助けられる日が来るとはな。人間、歳はとりたくないものだ」

「あんたがそういうことを言うなあんたが……」

見た目だけなら幼女としか思えない那月の言葉に、古城が呆れる。

そんな那月が、不意に真面目な表情で優麻へと向き直った。
「……仙都木阿夜の娘。どうする、まだ続けるか？」
優麻が、静かに立ち上がって首を振る。
「やめておくよ。あれだけ強烈だった焦燥感が消えてる。ボクにはもう、監獄結界をどうこうする理由はないみたいだ……〝蒼〟もこの有様だしね」
「そうか」
優麻が実体化させた〝守護者〟を眺めて、那月はうなずいた。
顔のない青騎士は、過剰な魔力の逆流や雪菜との戦いによって、満身創痍の悲壮な姿をさらしていた。たとえ回復するにしても、優麻が魔女としての能力を完全に取り戻すには、長い歳月が必要になるはずだ。そして優麻自身、それを望んでいるとは思えない。
彼女はようやく母親の呪いから解放されたのだ。
そのことを実感して、古城は我知らず満足げな微笑を浮かべた。
異変が起きたのは、その一瞬のことだった。
「……〝蒼〟？」
〝守護者〟の実体化を解こうとした優麻が、不安げに声を震わせた。

顔のない青騎士が、カタカタと全身の甲冑を震わせる。金属と金属がぶつかり合うような、奇怪な騒音。それは笑い声だと、古城は唐突に理解する。

傷だらけの騎士が、骸骨を思わせる空虚な仮面の下で笑っている——

「やめろ、〝蒼〟！」

優麻が悲鳴のような声で命令する。しかし青騎士の動きは止まらない。

腰に提げていた剣に手をかけ、青騎士が初めてそれを抜き放つ。

鞘の下から現れたのは、鋭く研ぎ澄まされた真新しい刀身だ。

古城と雪菜が飛び出して、それぞれ那月を庇うように立つ。

しかし青騎士の次の動きは、古城たちの予想を裏切るものだった。

振りかざした巨大な剣を、青騎士は優麻の胸へと突き立てたのだ。守護すべき対象であるはずの優麻へと。

「……ユウ……マ!?」

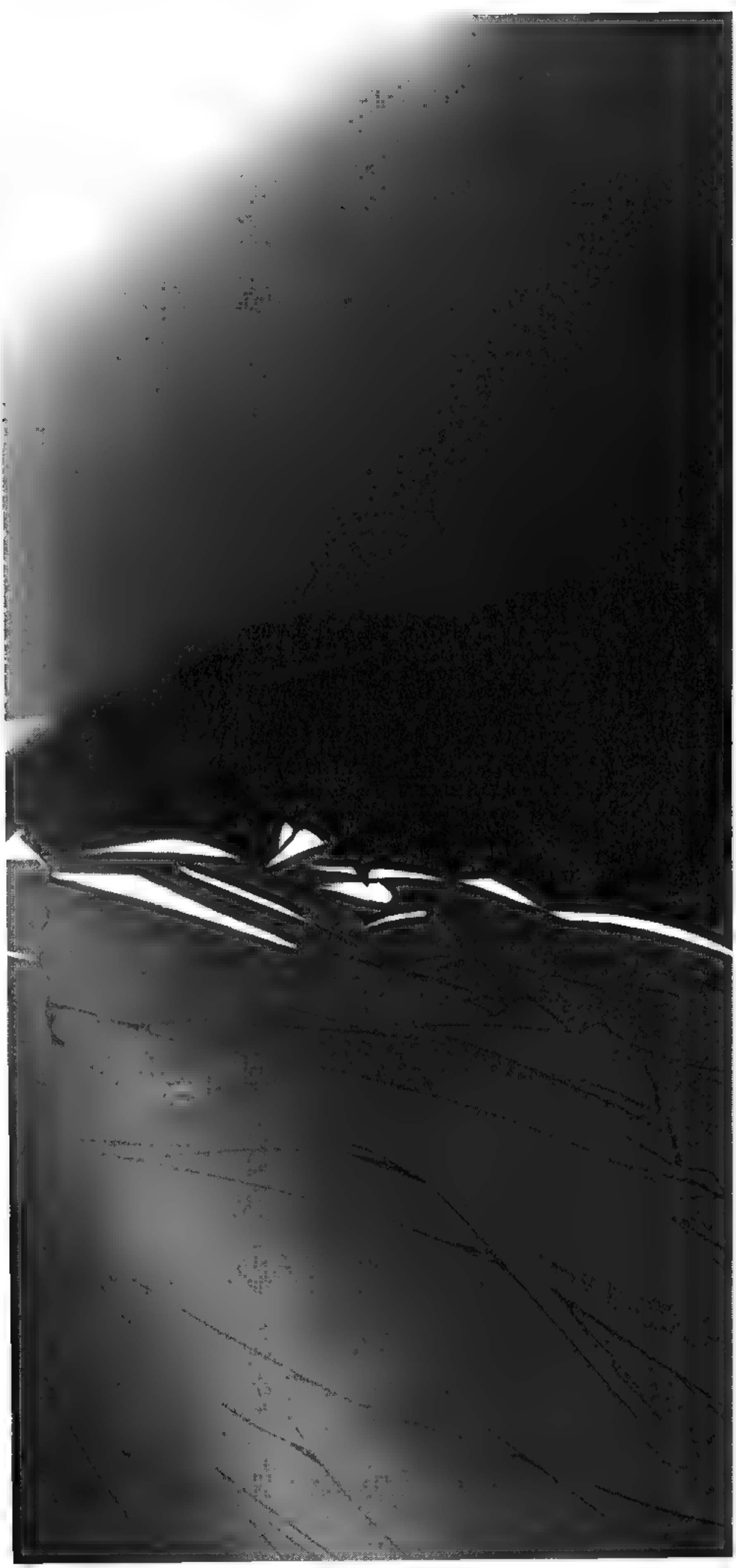
古城は呆然とその光景を見つめる。優麻の口から、ごぼ、と鮮血がこぼれ出す。

「……お母様……あなたは、そこまで……」

自らの〝守護者〟に手を伸ばし、優麻が絶望の声を洩らす。

彼の胸には、深々と剣が突き刺さっていた。だが、優麻の身体を貫通したはずの剣の切っ先が、彼女の背中に現れることはなかった。

優麻の肉体を空間転移の門に使って、剣をどこかに転送したのだ。
「待チワビタゾ……コノ瞬間ヲ。抜ケ目ナク狡猾ナ貴様ガ、ホンノ一瞬、顔のない青騎士が、錆びた声を紡ぎ出す。
それは女の声だった。歳を経た邪悪な魔女の声音だ。
「ブービートラップ……か。まさか、自分の娘を囮にするとはな……外道め」
那月が突然、蔑むような声を漏らす。
彼女の息から漂う血の臭いに、古城は表情を凍らせて振り返った。
レースで美しく飾られた那月の胸元から、禍々しく無骨な鋼鉄の塊が生えていた。
青騎士の持つ巨剣の切っ先が――
「南宮先生！」
「那月ちゃん!?」
あまりにも歪なその光景に、雪菜と古城は愕然と立ち尽くすしかない。
呆然自失の古城を少し怒ったように睨みつけ、那月が弱々しく笑う。
「担任教師を……ちゃん付けで呼ぶな……馬鹿者」
人形のように小柄な担任教師の身体が、ゆっくりとその場にくずおれていく。
顔のない青騎士の、不気味な笑い声が途切れることなく聞こえてくる。
あまりにも軽い担任教師の身体を抱きかかえながら、



「うおおお

あとがき

『ストライク・ザ・ブラッド4』をお届けしております。

四冊目ということで、このシリーズも二年目に突入しました。作者は相変わらず成長しないと思ってますが、そのぶん作品だけでも充実させていきたいと思ってますので、これからもよろしくお願いします。具体的には、刊行ペースをもう少し上げるような感じで。少しだけでも、なんとか。

そしていきなりごめんなさいを言わなければならない気がするのですが、扱いについてとか。実は企画段階では今回のエピソードは那月ちゃんメインの話でやることに決まっていたのですが、そして実際に彼女は重要な役回りを与えられているのですが、本人の出番のほうは……いったいどうしてこうなった。

もちろん最後まで読んでくださった方々は、単純にページ数の都合でこんな形になってしまったという事情はお見通しかと思います。今回のエピソードは今後の展開の布石になってる部分が多いので、彼女の出番が増えるのは次巻以降ということで。ともあれメルマガの予告などを見て那月ちゃんの活躍を期待していた皆様には本当にすみませんでした。

ちなみに「四巻の表紙キャラは那月ちゃんでもいいですよ」という私の提案をあっさり却下したのは担当さんですので、そちらについての苦情は編集部へどうぞ。

それから古城がいい思いをしすぎ、という批判も毎回いただくので、今回は彼には物理的にもしかしたらそのせいで物足りない印象を受けたかもしれませんが、それについても次巻以降でリベンジできればと思っています。

さて、本文中でも触れているとおり、絃神島の波朧院フェスタは、ハロウィンがモチーフになっております。最近はそうでもないのかもしれませんが、私、数年前に某市に引っ越すまで、ハロウィンというのはどこかフィクション臭いというか、実際にはあまり体験する機会のないあんなものは男子にとってのバレンタインデーなどと同様、エンタメの世界にしか存在しない空想上のお祭りだと。

なのですが、その某市というのがハロウィンがめちゃめちゃ盛んな街で、ハロウィンの時期には大量のコスプレ集団が市の中心部を占拠してパレードしたり、住宅街をふらふら歩いてたら（子ども会の行事で）仮装したショタや幼女がやってきてお菓子をくれたりという出来事が普通に毎年繰り返され、なんというか、現実すげえ、と衝撃を受けたのでした。

そのときの行事パンフレットを多少なりとも再現できれば、ということで始まった波朧院フェスタ

編はまだまだ続きます。というか、これからが本番だったりしますので、ご期待いただければ。

それでは最後になりましたが、今回も魅力的なイラストで本作を飾ってくださったマニヤ子さま、本当にありがとうございました。また「全員仮装で」とか「可愛い感じで」などの適当すぎる要望で混乱を招いてくださったすべての皆様にも心からお礼申し上げます。

そしてこの本を読んでくださった読者の皆様にも精一杯の感謝を。

それではどうか、また次巻でお目にかかれますように。

三雲岳斗

◉三雲岳斗著作リスト

「コールド・ゲヘナ」（電撃文庫）
「コールド・ゲヘナ②」（同）
「コールド・ゲヘナ③」（同）
「コールド・ゲヘナ④」（同）
「コールド・ゲヘナ　あんぷらぐど」（同）
「レベリオン　放課後の殺戮者」（同）
「レベリオン　拭殺校庭園」（同）
「レベリオン　炎を背負う少年たち」（同）
「レベリオン　彼女のいない教室」（同）

「レベリオン　楽園に紅き翼の詩を」（同）
「i・d・Ⅰ　神使いたちの長い放課後」（同）
「i・d・Ⅱ　seven」（同）
「i・d・Ⅲ　滅びの王国」（同）
「道士さまといっしょ」（同）
「道士さまにおねがい」（同）
「アスラクライン」（同）
「アスラクライン②　夜とUMAとDカップ」（同）
「アスラクライン③　やまいはきから」（同）
「アスラクライン④　秘密の転校生のヒミツ」（同）
「アスラクライン⑤　洛高アンダーワールド」（同）
「アスラクライン⑥　おしえて生徒会長！」（同）
「アスラクライン⑦　凍えて眠れ」（同）
「アスラクライン⑧　真夏の夜のナイトメア」（同）
「アスラクライン⑨　KLEIN Re-MIX」（同）
「アスラクライン⑩　科學部カイメツ」（同）
「アスラクライン⑪　めぐりあい異世界」（同）
「アスラクライン⑫　世界崩壊カウントダウン」（同）

「アスラクライン⑬　さくらさくら」（同）
「アスラクライン⑭　The Lost Files」（同）
「ストライク・ザ・ブラッド1　聖者の右腕」（同）
「ストライク・ザ・ブラッド2　戦王の使者」（同）
「ストライク・ザ・ブラッド3　天使炎上」（同）
「サイハテの聖衣（シュラウド）」（同）
「M・G・H　楽園の鏡像」（単行本　徳間書店刊）
「聖遺の天使」（単行本　双葉社刊）
「カーマロカ」（同）
「煉獄の鬼王」（双葉文庫）
「海底密室」（デュアル文庫）
「ワイヤレスハート・チャイルド」（同）
「アース・リバース」（スニーカー文庫）
「ランブルフィッシュ①　新学期乱入編」（同）
「ランブルフィッシュ②　中間試験暴走編」（同）
「ランブルフィッシュ③　場外乱闘恋心編」（同）
「ランブルフィッシュ④　伝説崩壊編」（同）
「ランブルフィッシュ⑤　凶天使襲来編」（同）

「ランブルフィッシュ⑥」亡霊殲滅編〈上〉」（同）
「ランブルフィッシュ⑦」亡霊殲滅編〈下〉」（同）
「ランブルフィッシュ⑧」決戦前夜秘湯編」（同）
「ランブルフィッシュ⑨」大会開幕奇襲編」（同）
「ランブルフィッシュ⑩」学園炎上終幕編」（同）
「ランブルフィッシュ　あんぷらぐど」（同）
「ダンタリアンの書架1」（同）
「ダンタリアンの書架2」（同）
「ダンタリアンの書架3」（同）
「ダンタリアンの書架4」（同）
「ダンタリアンの書架5」（同）
「ダンタリアンの書架6」（同）
「ダンタリアンの書架7」（同）
「旧宮殿にて」（単行本　光文社刊）
「少女ノイズ」（同）
「少女ノイズ」（光文社文庫）
「絶対可憐チルドレン・THE NOVELS」（ガガガ文庫）
「幻獣坐 -The Scarlet Sinner-」（講談社ノベルズ）

本書に対するご意見、ご感想をお寄せください。

■

あて先

〒102 8584 東京都千代田区富士見1 8 19
アスキー・メディアワークス電撃文庫編集部
「三雲岳斗先生」係
「マニャ子先生」係

■

電撃文庫

ストライク・ザ・ブラッド4

蒼き魔女の迷宮

三雲岳斗

発　行　二〇一二年六月十日　初版発行

発行者　高野　潔
発行所　株式会社アスキー・メディアワークス
〒一〇一-八八四　東京都千代田区富士見一-八-一九
電話〇三-五二一六-八三九九（編集）
http://asciimw.jp/

発売元　株式会社角川グループパブリッシング
〒一〇二-八一七七　東京都千代田区富士見二-一三-三
電話〇三-三二三八-八六〇五（営業）

装丁者　荻窪裕司（META + MANIERA）

印刷・製本　加藤製版印刷株式会社

※本書のコピー、スキャン、電子データ化等の無断複製は、著作権法上での例外を除き、禁じられています。なお、代行業者等に依頼して本書のスキャン、電子データ化等を行うことは、私的使用の目的であっても認められておりません。
※落丁・乱丁本はお取り替えいたします　購入された書店名を明記して、株式会社アスキー・メディアワークス入手部あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。
但し、古書店で本書を購入されている場合はお取り替えできません。
※定価はカバーに表示してあります

© 2012 GAKUTO MIKUMO
Printed in Japan
ISBN978-4-04-886633-0 C0193

電撃文

文庫は、我が国にとどまらず、世界の書籍の流れのなかで〝小さな巨人〟としての地位を築いてきた。古今東西の名著を、廉価で手に入りやすい形で提供してきたからこそ、人は文庫を自分の師として、また青春の想い出として、語りついできたのである。

その源を、文化的にはドイツのレクラム文庫に求めるにせよ、規模の上でイギリスのペンギンブックスに求めるにせよ、いま文庫は知識人の層の多様化に従って、ますますその意義を大きくしていると言ってよい。

文庫出版の意味するものは、激動の現代のみならず将来にわたって、大きくなることはあっても、小さくなることはないだろう。

「電撃文庫」は、そのように多様化した対象に応え、歴史に耐えうる作品を収録するのはもちろん、新しい世紀を迎えるにあたって、既成の枠をこえる新鮮で強烈なアイ・オープナーたりたい。

その特異さ故に、この存在は、かつて文庫がはじめて出版世界に登場したときと、同じ戸惑いを読書人に与えるかもしれない。

しかし、〈Changing Times,Changing Publishing〉時代は変わって、出版も変わる。時を重ねるなかで、精神の糧として、心の一隅を占めるものとして、次なる文化の担い手の若者たちに確かな評価を得られると信じて、ここに「電撃文庫」を出版する。

1993年6月10日
角川歴彦

電撃文庫

ストライク・ザ・ブラッド1 聖者の右腕

三雲岳斗
イラスト／マニャ子

ISBN978-4-04-870267-6

世界最強の吸血鬼、第四真祖の力を手に入れながらも平穏な日常を願う高校生、暁古城。そんな彼の前に現れた「監視役」とは……!? 待望の三雲岳斗新シリーズ開幕!!

み-3-30　2090

ストライク・ザ・ブラッド2 戦王の使者

三雲岳斗
イラスト／マニャ子

ISBN978-4-04-870752-7

世界最強の吸血鬼・暁古城と、彼を監視する雪菜の前に、欧州の真祖〝忘却の戦王〟の使者が現れる。その目的は古城に対する宣戦布告か、それとも……。

み-3-31　2191

ストライク・ザ・ブラッド3 天使炎上

三雲岳斗
イラスト／マニャ子

ISBN978-4-04-886274-5

失踪したクラスメイトを追跡して、無人島に漂着した古城と雪菜。そこで彼らが遭遇したのは、魔族特区で生み出された対魔族兵器〝人造天使〟だった……。

み-3-33　2280

ストライク・ザ・ブラッド4 蒼き魔女の迷宮

三雲岳斗
イラスト／マニャ子

ISBN978-4-04-886633-0

盛大なお祭りが開催されている絃神島を、古城の幼なじみが訪れる。だがその旧友との再会が、古城の肉体に驚愕の異変を引き起こすことに……!

み-3-34　2351

サイハテの聖衣（シュラウド）

三雲岳斗
イラスト／朱シオ

ISBN978-4-04-886101-4

霊獣を封印した破魔の鎧――獣装戦闘服（BUD）、またの名を〝聖衣（ノイラウト）〟。これは、怪物（マカノヒ）の侵攻から人々を守るため、聖衣をまとい戦う、美しき少女たちの物語。

み-3-32　2251

電撃文庫

アスラクライン
三雲岳斗
イラスト／和狸ナオ
ISBN4-8402-3090-0

高校入学を明日に控えたその夜、留学中の兄から銀色のトランクが届けられた。そして僕と操緒の秘密を巡る、あまりにも賑やかな、高校生活が始まった――。

み-3-16　1123

アスラクライン②
夜とUMAとロカップ
三雲岳斗
イラスト／和狸ナオ
ISBN4-8402-3179-6

かわいい女の子に囲まれ始まった高校生活。だけど、一人は幽霊、一人は悪魔、そしてもう一人はサイボーグ!?　普通の高校生智春は、どこへ行ってしまうのか!!

み-3-17　1160

アスラクライン③
やまいはきから
三雲岳斗
イラスト／和狸ナオ
ISBN4-8402-3308-X

個性強すぎの美少女たちに囲まれて、刺激強すぎの高校生活を送る智春。今度の敵は過労と記憶喪失!?　トラブルの連続に、ますます加速するスクールパンク第3弾!!

み-3-18　1221

アスラクライン④
秘密の転校生のヒミツ
三雲岳斗
イラスト／和狸ナオ
ISBN4-8402-3449-3

智春のクラスに交換留学生がやってくる。貴族の末裔で美少女という前評判を聞きつけて、盛り上がるクラスメイトたち。しかし彼女は……。人気シリーズ第4弾。

み-3-19　1276

アスラクライン⑤
洛高アンダーワールド
三雲岳斗
イラスト／和狸ナオ
ISBN4-8402-3550-3

智春の前にまた新たな女の子が現れた!!　今度は小動物系美少女の沙原ひかり。美化委員の活動を通して親密な雰囲気になっていく二人だったが……。

み-3-20　1314

電撃文庫

アスラクライン⑥ おしえて生徒会長！

三雲岳斗
イラスト／和狸ナオ

ISBN978-4-8402-3685-0

入学以来、めちゃめちゃな学校生活を送る智春は、その原因である行方不明の兄に会いに行くことを決意。そして兄の手がかりを握る人物を訪ねるが……!?

み-3-21　1374

アスラクライン⑦ 凍えて眠れ

三雲岳斗
イラスト／和狸ナオ

ISBN978-4-8402-3842-7

洛高の二年生が修学旅行へ出かけた。留守中、佐伯兄から洛高と玲子のことを託された智春だったが……。美少女たちに囲まれた高校生活が思わぬ急展開!?

み-3-22　1426

アスラクライン⑧ 真夏の夜のナイトメア

三雲岳斗
イラスト／和狸ナオ

ISBN978-4-8402-3934-9

アルバイトのため海辺のペンションに滞在中の智春たちだったが……。解き明かされていく二巡目の世界と、悪魔出現の謎。絶好調スクールパンク夏休み篇！

み-3-23　1469

アスラクライン⑨ KLEIN Re-MIX

三雲岳斗
イラスト／和狸ナオ

ISBN978-4-8402-4118-2

機巧魔神や悪魔出現の謎を解く鍵を握る人物とは、操緒の姉の女子大生、水無神[redacted]だった!?　大好評人気シリーズ、新たな特技を身につけ暴走気味の第9弾！

み-3-24　1523

アスラクライン⑩ 科學部カイメツ

三雲岳斗
イラスト／和狸ナオ

ISBN978-4-04-867088-3

水無神環緒が語る〝一巡目の世界〟の秘密。執拗に智春たちを狙う鳳島氷羽子。急速に非在化する奏[redacted]。物語は怒涛の急展開!!　人気シリーズ第10弾!!

み-3-25　1603

電撃文庫

アスラクライン⑪ めぐりあい異世界

三雲岳斗
イラスト／和狸ナオ

ISBN978-4-04-867267-2

鋼色の機巧魔神との戦闘に敗れ、一巡目の世界へと飛ばされた智春。異界の街で彼が出会った人物は!? そして「魔女」と呼ばれる美少女が現れて……。

み-3-26　1663

アスラクライン⑫ 世界崩壊カウントダウン

三雲岳斗
イラスト／和狸ナオ

ISBN978-4-04-867763-9

人間化した奏と、高校生の姿に美しく成長したアニア。そして大破した機巧魔神《黒鐵》の中から、操緒を救い出す方法を知る人物が現れて……!?

み-3-27　1749

アスラクライン⑬ さくらさくら

三雲岳斗
イラスト／和狸ナオ

ISBN978-4-04-868141-4

二巡目の世界へと帰還した智春たち。しかしここにも、世界崩壊の予兆が!? 非在化を始めた世界を前に、操緒と智春が選んだ最後の決断とは……!?。

み-3-28　1851

アスラクライン⑭ The Lost Files

三雲岳斗
イラスト／和狸ナオ

ISBN978-4-04-868334-0

夏目智春が謎の失踪を遂げてから数ヵ月。智春の義理の妹・苑宮和葉が、洛高に残された記録（ファイル）から知った、智春の隠された記憶とは――

み-3-29　1902

筋肉の神マッスル

佐藤ケイ
イラスト／さめだ小判

ISBN978-4-04-886630-9

滅びを待つ街に、救いの筋肉が降り立った！ 絶望の闇を引き裂いて唸れ肉体、轟け豪腕！ 佐藤ケイが贈る高負荷筋量（ハルク）アクション・コメディ登場!!

さ-4-26　2345

電撃文庫

特異領域の特異点　真理へ迫る七秒間

範乃秋晴
イラスト／saitom
ISBN978-4-04-870742-8
は-10-1　2183

特異領域理論により政治経済の枠組が一変した世界。自称天才、無期停学中の賢悟が受け取った驚きのメッセージ。それが世界を揺るがす事件の始まりだった！

特異領域の特異点2　非科学的な神の証明

範乃秋晴
イラスト／saitom
ISBN978-4-04-886653-8
は-10-2　2350

今や世界の奇才ともてはやされるまでになった賢悟。それゆえか彼を狙う刺客が現れる。光速の居合を誇る刺客に、苦戦を強いられる賢悟。刺客の目的とは!?

あなたの街の都市伝鬼！

聴猫芝居
イラスト／うらびら
ISBN978-4-04-886275-2
き-5-1　2273

都市伝説を研究している高校生・八坂出雲。彼の前に様々な都市伝説＝都市伝鬼（としてんき）が現れはじめて――怖がりな出雲はいったいどうなる!?　第18回電撃小説大賞〈金賞〉受賞作！

あなたの街の都市伝鬼！2

聴猫芝居
イラスト／うらびら
ISBN978-4-04-886628-6
き-5-2　2354

伝鬼達の食費で金欠な出雲。たまらずジェット女・舞佳に弁当を作って貰うが……その交換条件として、学校の七不思議を編纂することになり――!?

きみのぱんつを守りたい！

麻宮 楓
イラスト／ネムネム
ISBN978-4-04-886692-7
あ-25-7　2356

進藤マコトが抱える、忌まわしき運命に翻弄された悲劇の刃――脱衣剣。女の子を裸にしちゃう剣なんて……と悩むマコトだが、佳奈を守るため封印を解く！

電撃文庫

トカゲの王Ⅰ —SDC、覚醒—

入間人間
イラスト／ブリキ

ISBN978-4-04-870686-5

俺はこんな所で終わる人間じゃない。『普通』の人生から逸脱した、選ばれし者なんだ。『リペイント』と名付けたこの能力で、俺は眼前に立ちはだかる不気味な殺し屋たちから、必ず逃げ延びてやる。

2156 い-9-22

トカゲの王Ⅱ —復讐のパーソナリティ〈上〉—

入間人間
イラスト／ブリキ

ISBN978-4-04-886244-8

世界を塗り替えるはずだった俺の野望は、右目と共に消失した。そして俺はヒキコモリになった。そこに復活を目論む巣鴨がやってきて、なぜかエロDVDをあさりはじめた!?

2255 い-9-23

トカゲの王Ⅲ —復讐のパーソナリティ〈下〉—

入間人間
イラスト／ブリキ

ISBN978-4-04-886625-5

復讐というパーソナリティは、螺旋を描いて俺たちの中心点へと収束していく。果たして、この中で、生き残るのは誰か。それはもちろん、俺——であって欲しい。

2342 い-9-24

朝岡ひよりのドキドキカルテ

時田 唯
イラスト／タケイオーキ

ISBN978-4-04-886657-6

転校生のひよりは刺激的な体験をしないとアレルギーが出る体質の持ち主だった!?彼女の秘密を知った仁は主治医としてあの手この手でドキドキさせようとするが……。

2346 と-11-6

ねじ巻き精霊戦記

天鏡のアルデラミン

宇野朴人
イラスト／さんば挿

ISBN978-4-04-886559-3

戦争嫌いで怠け者で女好き。そんな少年が、のちに名将とまで呼ばれる軍人になろうとは、誰も予想していなかった……。壮大なファンタジー戦記、開幕！

2353 う-4-4

電撃文庫

ゴールデンタイム1 春にしてブラックアウト

竹宮ゆゆこ
イラスト／駒都えーじ

ISBN978-4-04-868878-9

私の描く人生のシナリオは完璧！　そう豪語するお嬢様と出会った多田万里のままならない青春の行方は!?　「とらドラ！」の竹宮ゆゆこ、待望の新シリーズ始動！

た-20-16　2000

ゴールデンタイム2 答えはＹＥＳ

竹宮ゆゆこ
イラスト／駒都えーじ

ISBN978-4-04-870381-9

自称完璧なお嬢様・香子への想いと先輩・リンダとの失われた過去の狭間で揺れる多田万里。そして舞台は岡ちゃん主催の一年生会へ!?　青春ラブコメ第2弾！

た-20-17　2096

ゴールデンタイム3 仮面舞踏会

竹宮ゆゆこ
イラスト／駒都えーじ

ISBN978-4-04-870735-0

すったもんだの末、香子といい感じになった万里。気分はハッピー！な一方で、リンダのことを考えると気分はもやもやし——。青春ラブコメ第3弾！

た-20-18　2177

ゴールデンタイム4 裏腹なるdon't look back

竹宮ゆゆこ
イラスト／駒都えーじ

ISBN978-4-04-886546-3

わずかな間だけ、かつての記憶が戻った万里。リンダを求める自分と、香子との仲を深めたい自分。前に進むために万里は決断を迫られる。青春ラブコメ第4弾！

た-20-19　2292

ゴールデンタイム外伝 二次元くんスペシャル

竹宮ゆゆこ
イラスト／駒都えーじ

ISBN978-4-04-886631-6

三次元に絶望した男、二次元くん。本名佐藤。脳内にＶＪという名の嫁を持つ彼は、しかしリアル美少女により心の浸蝕を受け——!?　青春ラブコメ番外編！

た-20-20　2343

電撃文庫

はたらく魔王さま！

和ケ原聡司
イラスト／029

ISBN978-4-04-870270-6

世界征服間近だった魔王が、勇者に敗れて辿り着いた先は、異世界〝東京〟だった!?六畳一間のアパートを仮の魔王城に、フリーターとして働く魔王の明日はどっちだ!?

わ-6-1　2078

はたらく魔王さま！2

和ケ原聡司
イラスト／029

ISBN978-4-04-870547-9

店長代理に昇進し、ますます張り切る魔王。そんなある日、魔王城（築60年の六畳一間）の隣に、女の子が引っ越してきた！　心穏やかでいられない千穂と勇者だったが!?

わ-6-2　2141

はたらく魔王さま！3

和ケ原聡司
イラスト／029

ISBN978-4-04-870815-9

東京・笹塚の六畳一間の魔王城に、異世界からのゲートが開く。そこから現れた幼い少女は、魔王をパパ、勇者をママと呼んで――!?　波乱必至の第3弾登場！

わ-6-3　2213

はたらく魔王さま！4

和ケ原聡司
イラスト／029

ISBN978-4-04-886344-5

バイト先の休業により職を失った魔王。しかもアパートも修理のため一時退去となる。職と魔王城を一気に失い失意の魔王は、なぜか〝海の家〟ではたらくことに!?

わ-6-4　2281

はたらく魔王さま！5

和ケ原聡司
イラスト／029

ISBN978-4-04-886654-5

無職生活続行中の魔王が、まさかの薄型テレビ購入を決断！　異世界の聖職者・鈴乃もそれに便乗することに。そんな中、恋する女子高生・千穂に危機が迫っていた。

わ-6-5　2348

電撃文庫

スイート☆ライン

有沢まみず
イラスト／如月水

ISBN978-4-04-867815-5

無口で超男性恐怖症の天才声優・新島永遠。彼女の欠点を克服させるため、高校生の花沢正午は永遠と同居することに！　極上スイートなラブコメディ、スタート！

あ-13-26　1764

スイート☆ライン2 オーディション準備編

有沢まみず
イラスト／如月水

ISBN978-4-04-868072-1

アニメ業界注目のビッグプロジェクトが動き出した！　新島永遠や神楽坂はるかも参加を決意するが、それぞれ超えなければならないハードルがあって……。

あ-13-28　1836

スイート☆ライン3 オーディション編

有沢まみず
イラスト／如月水 (RED FLAGSHIP)

ISBN978-4-04-868404-0

アニメ業界注目のプロジェクト「セブンティーン」のオーディションが始まった！　でも勇気の振り絞って臨んだ永遠を待っていたのはちょっと変わった審査で……。

あ-13-30　1919

スイート☆ライン4 ユニット結成編

有沢まみず
イラスト／如月水 (RED FLAGSHIP)

ISBN978-4-04-868370-4

永遠や舞たちに、妙に真面目な女の子・千秋が加わり、アニメ「シックスティーン」の新たなプロジェクトが始まる!?　声優たちのハッピーラブコメ第4弾！

あ-13-35　2284

スイート☆ライン5 メモリアル卒業編

有沢まみず
イラスト／如月水 (RED FLAGSHIP)

ISBN978-4-04-886629-3

永遠たち声優5人のユニットが結成された！　そして初イベントに向けて特訓を始めるが、とんでもない事態が発生し……。スイートラブコメディ、完結編！

あ-13-36　2352

原作&アニメ&ゲームなど春香の魅力が詰まった至高の一冊、絶賛発売中！

グラビアパート

原作&アニメ版権の美麗イラストをはじめ、N's（能登麻美子×後藤麻衣×清水香里×植田佳奈×佐藤利奈）のグラビアインタビューなど、大増量ページ数で贈るビジュアルコーナー。春香の魅力をたっぷりご堪能ください。

ストーリーパート

原作小説の全話を徹底解説！　ストーリーの中に秘められた設定や丸秘エピソードなどもコラムで大紹介！

キャラクターパート

原作版とアニメ版の両方のビジュアルをふんだんに使用し、「乃木坂春香」の世界を彩る賑やかなキャラクターたちを徹底紹介！　いまだ世に出たことのない設定画などもお目見えしちゃうかも！

メディアミックスパート

TVアニメ第2期のレビュー&第1期のストーリー紹介、ゲームやコミック、グッズ化などなど、春香のメディアミックスの全てを網羅！

スペシャルパート

①五十嵐雄策インタビュー

原作者の五十嵐雄策氏が、気になる20の質問に答えてくれました！　原作誕生&制作の秘話がここに――。

②美夏ちゃん編集長が行く、出張版！

ゴマちゃこと後藤麻衣さんが大活躍した「電フェス2009」を、ゴマちゃん視点で完全レポート！　メインステージや公開録音の裏側だけでなく、会場内を見学した模様を収録!!

③しゃあ描き下ろし、ちょっとえっちな絵本

しゃあ&五十嵐雄策の両氏が描き下ろした、ちょっとえっちな美夏の絵本を本邦初公開！
ちびっこメイドのアリスも参戦して、大人に憧れる美夏が取った行動は――!?

乃木坂春香ガ全テ

電撃文庫編集部　編

『乃木坂春香ガ全テ』
電撃文庫編集部 編
定価1,680円（税込）　B5判／176ページ
絶賛発売中　　イラスト／しゃあ

電撃の単行本

※定価は税込(5%)です。

いとうのいち画集

文庫でのイラストを中心に、美麗なイラストを完全再現。
多数の描き下ろしイラストも収録した、進化する『いとうのいち』に刮目せよ。

いとうのいち画集

紅蓮

『いとうのいち』に刮目せよ。
『灼眼のシャナ』絵師・
いとうのいちが贈る初画集！

いとうのいち画集Ⅱ

華焔

初画集から二年——。
進化するイラストレーター
いとうのいちの世界が
ここに！

いとうのいち画集Ⅲ

蒼炎

これは、『灼眼のシャナ』
挿絵師いとうのいちが
描いてきた軌跡、
その詳録である。

好評
発売中!!

著／いとうのいち　発行／アスキー・メディアワークス
定価：2,940円　装丁／A4変型・128ページ・オールカラー

画集

好評発売中! イラストで魅せるバカ騒ぎ!

エナミカツミ画集
『バッカーノ!』

体裁:A4変型・ハードカバー・112ページ　定価:2,940円(税込)

人気イラストレーター・エナミカツミの、待望の初画集がついに登場!
『バッカーノ!』のイラストはもちろんその他の文庫、ゲームのイラストまでを多数掲載!
そしてエナミカツミ&成田良悟ダブル描き下ろしも収録の永久保存版!

注目のコンテンツはこちら!

BACCANO!
「バッカーノ!」シリーズのイラストを大ボリューム特別掲載。

ETCETERA
「ヴぁんぷ!」をはじめ、電撃文庫の人気タイトルイラスト。

ANOTHER NOVELS
ゲームやその他文庫など、幅広い活躍の一部を収録。

名作劇場 ばっかーの!
「チェスワフぼうやと(ビルの)森の仲間達」
豪華描きおろしで贈る「バッカーノ!」のスペシャル絵本!

※定価は税込(5%)です。

BACCANO!

画集

おもしろいこと、あなたから。

電撃大賞

自由奔放で刺激的。そんな作品を募集しています。
受賞作品は「電撃文庫」「メディアワークス文庫」からデビュー!

上遠野浩平（『ブギーポップは笑わない』）、高橋弥七郎（『灼眼のシャナ』）、
成田良悟（『バッカーノ!』）、支倉凍砂（『狼と香辛料』）、
有川 浩（『図書館戦争』）、川原 礫（『アクセル・ワールド』）など、
常に時代の一線を疾るクリエイターを生み出してきた「電撃大賞」。
新時代を切り開く才能を毎年募集中!!!

電撃小説大賞・電撃イラスト大賞

※第20回より賞金を増額しております。

賞（共通）

大賞……正賞＋副賞300万円
金賞……正賞＋副賞100万円
銀賞……正賞＋副賞50万円

（小説賞のみ）

メディアワークス文庫賞
正賞＋副賞100万円

電撃文庫MAGAZINE賞
正賞＋副賞30万円

編集部から選評をお送りします！
小説部門、イラスト部門とも1次選考以上を通過した人全員に選評をお送りします!

イラスト大賞はWEB応募も受付中！

最新情報や詳細は電撃大賞公式ホームページをご覧ください。

http://asciimw.jp/award/taisyo/

編集者のワンポイントアドバイスや受賞者インタビューも掲載！

主催:株式会社アスキー・メディアワークス

ヤスダスズヒト待望の初画集登場!!

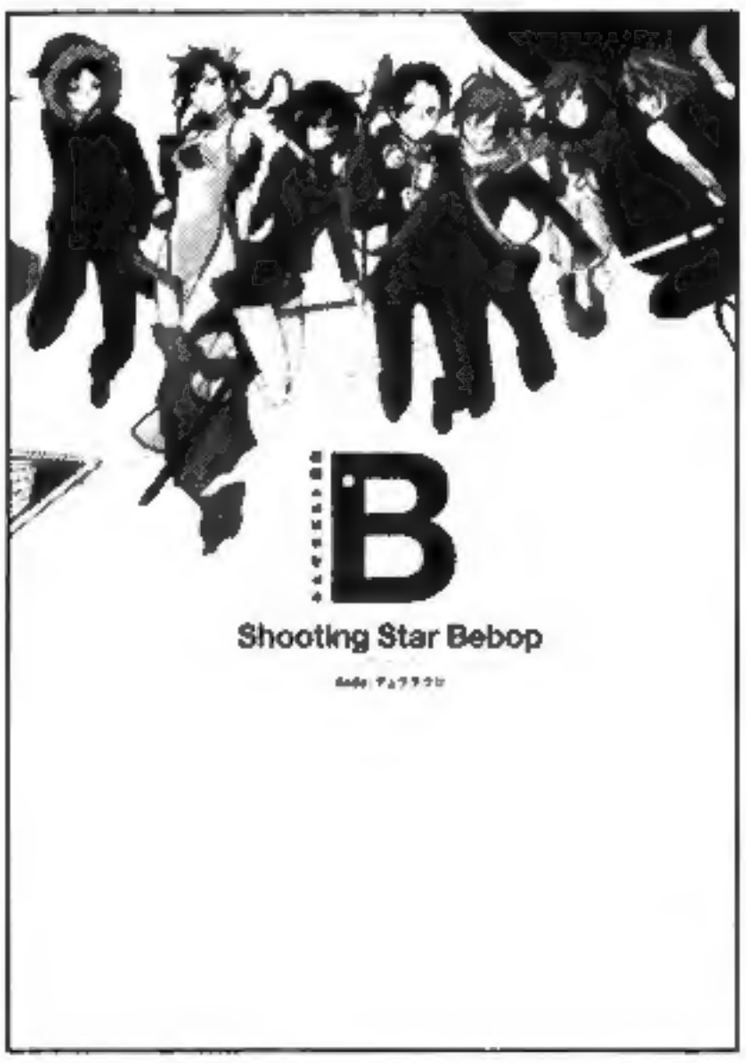
イラストで綴る歪んだ愛の物語――。

デュラララ!!×画集!!

Shooting Star Bebop
Side:DRRR!!

ヤスダスズヒト画集

シューティングスター・ビバップ
Side:デュラララ!!



content

■『デュラララ!!』

大好評のシリーズを飾った美麗イラストを一挙掲載!!　歪んだ愛の物語を切り取った、至高のフォトグラフィー!!

■『越佐大橋シリーズ&世界の中心、針山さん』

同じく人気シリーズのイラストを紹介!!　戦う犬の物語&ちょっと不思議な世界のメモリアル。

■『Others』

『鬼神新選』などの電撃文庫イラストをはじめ、幻のコラムエッセイや海賊本、さらにアニメ・雑誌など各媒体にて掲載した、選りすぐりのイラストを掲載!!

著/ヤスダスズヒト　定価:2,415円(税込)　A4判/128ページ
※定価は税込(5%)です。

画集